

浮世風呂

67-516



1200501281741

67  
516



始



646  
浮世風流

67  
516



世

月

日



## 解題

浮世風呂は式亭三馬の代表的作物である。

三馬は八丈島なる爲朝神社の神主菊池壹岐守の庶子茂兵衛といふ板木師の子として、江戸淺草田原町に生れ、日本橋茅場町の西宮新六といふ書店に丁稚奉公してゐるうち、好きな道とて、稗史小説の類を耽讀し、遂に有数の作家となつたので、その處女作「天道浮世出星操」てんたううきしよでうかがひを著したのは、寛政六年彼が二十歳の時である。

寛政十一年には「俠太平記向鉢卷」きやくへいを書肆西宮から出版した。これは前年山王の祭の際に起つた鳶の者の喧嘩を仕組んだものであるが、よ組の連中を誹謗したといふので、三馬の家と書肆とが彼等のために破壊された。これが公事沙汰になつて、暴行者は入牢、版元は科料、三馬は五十日の手鎖と、それ〴〵處刑せられた。併し此の事件によつて、三馬の名聲は俄に高まつたのである。

三馬といふ號は、唐來參和の參と、烏亭焉馬の馬とをとつて名づけたものだといはれてゐる。此の外に、本町菴、洒落齋などの號もある。

浮世風呂は、三馬が歌川豊國の許で三笑亭可樂の落語を聴き、その錢湯の笑話から趣向を得たもので、寫す所の舞臺は唯町の湯屋であるが、其の湯に入りに来る老若男女の會話を、殆ど速記した如く精細に寫して、當時の俗間の風習を歴々と顯してある。町人の娘が大抵の年頃になると、武家屋敷に奉公する事だの、寺子屋通ひの子供が芝居の眞似をして遊んだり、似顔繪を蒐集して楽しんだりする事だのも、當時が偲ばれて面白い。作者はなほ湯屋の

外を通る物賣の聲まで寫して時間の経過を示してゐる。音の寫生、これに非常に意を注いで、新しい標音法まで用ひてある。巻中の廣告文によれば、第五編以下を發刊する計畫であつたが、竟に四編九冊で終つたのは惜むべきである。

書中の標音法は原本に従つたが、あて字の讀みにくいもの、假名遣の誤れるもの等は大抵之を改めた。

### 浮世風呂大意

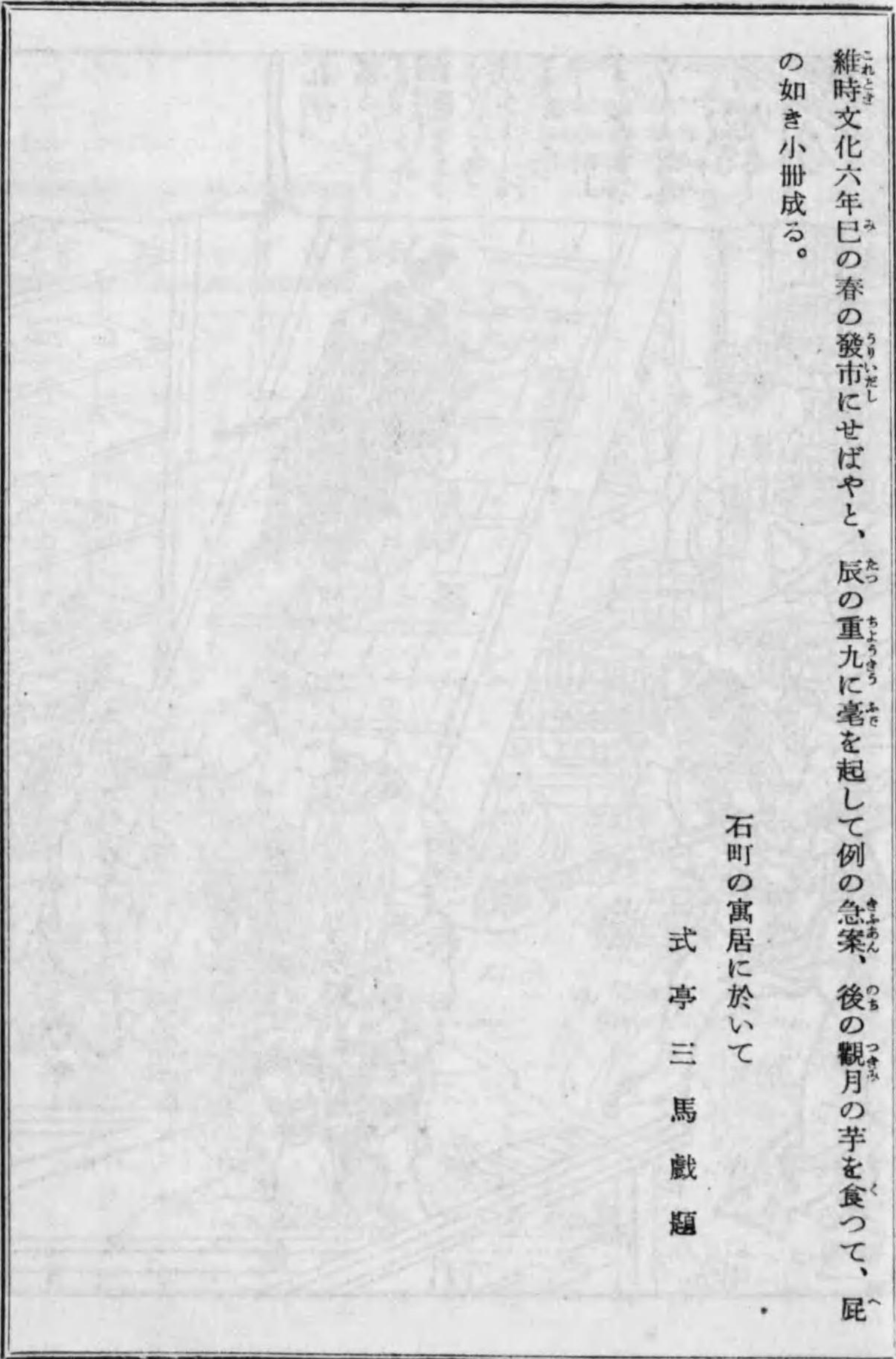
熱つらく監かんみるに錢湯せんたうほど捷徑ちかみちの教諭をしへなるはなし。其の故如何いかにとなれば、賢愚けんぐ邪正じやせう、貧福ひんふく貴賤きけん、湯を浴びんとて裸形はだかになるは、天地自然の道理。釋迦も孔子も於三も權助も、産れた儘すがたの容にて、惜しい欲ほし西の海。さらりと無欲の形なり。欲垢よごあかと煩惱ぼんなんと洗ひ清めて淨湯じやうたうを浴びれば、旦那様も折助も執とが執とやら一般裸體いぱんはだか。是れ乃ち生れた時の産湯うぶたうから死んだ時の葬灌ゆくわんにて、暮ゆふべに紅顔こうがんの醉客すまいひも朝湯あさたうに醒しらふとなるが如く、生死しやうじ一重いづむが嗚呼あゐまゝならぬ哉。されば佛嫌ほとけきらひの老人らうじんも風呂へ入れば吾われしらす念佛ねんぶつを申し、色好みいろこのみの壯夫さうぶも裸はだかになれ度前ほどまへをおさへて己おのれから恥はぢを知り、猛もうき武士ぶしの頸のどから湯をかけられても、人込ひとごみぢやと堪忍かんにんを守り、目に見えぬ鬼神おにがみを雙腕かたうでに彫りたる俠客ちゆうつばらも、御免ごめんなさいと石榴口ざうりくちに屈かむは錢湯せんたうの徳とくならずや。心ある人に私わたくしあれども、心なき湯に私なし。譬たとへへば人密ひとひそかに湯の中なかににて撒屁おならをすれば、湯はぶくぶくと鳴りて忽たちち泡あわを浮うみ出す。嘗かつてて聞く、藪やぶの中の矢二郎やじらうはしらす。湯の中なかにの人として、湯のおもはくをも恥ぢはぢさらめや。惣すべて錢湯せんたうに五常ごじやうの道あり。湯を以て身を温め、垢あかを落し、病ぢを治し、草臥くたびを休やすむる類たぐひ。則すなはち仁じんなり。桶のお明あきはござりませぬかと、他ひとの桶かに手をかけず。留桶とどめを我儘わがままに使つかはず。又は急いそいで明あけて貸かす類たぐひ。則すなはち義ぎなり。田舎者いんげでござい、冷物ひやものでござい、御免ごめんなさいといひ、或あるはお早い、お先まへへと演あべ、或あるはお靜しずかに、お寛ゆるりなどいふ類たぐひ。則すなはち禮れいなり。糠ぬか、洗粉あらいこ、輕石かろいし、絲瓜へちま

皮にて垢を落し、石子で毛を切る類、則ち智なり。熱いといへば水をうめ、ぬるいといへば湯をうめる。お互に背後を流し合ふ類、則ち信なり。かゝるめでたき銭湯なれば、此に浴する人々も、水舟の升、陸湯の桶、方圓の器に随ふ道理を悟りて、湯屋の流し板の如く、己が心を常に磨きて諸の垢をたけな。人間一生五十年、二度入の御方あるとも、御一人前の分別あるは湯屋の張札の如く、一心足らぬ萬能膏あり。馬鹿に附ける薬はあらずも、走馬の千里膏、鞭打つて呉れる交の無二膏あり。口中散を翻せば忠孝一切の妙薬。二親の安神散、兎角煩惱の火の用心は湯屋の定書に似たり。心に驕奢の風立てば家私は何時にても早仕舞なり。五倫五體は天地より預り物なれば、大切の品を御持參物なるを、色と酒とに魂の失物不存、我から招く禍は、他人の一切存不申事ならずや。名聞利欲の喧嘩口論、喜怒哀樂の高聲御無用。此の文言を守らぬ時は、仕舞湯に入り損ひ、モウ抜きましたといはれて、後悔手巾を咬むとも益なし。なべて世の中の人心は銭湯の虱に等しく、善惡に移り易き物なれば、權兵衛が褌から八兵衛が羽二重に移り、田婢の湯具から令室の絹布へも移る。昨日の緋絆一枚は疊の上へ脱ぎしも、今日の重着は棚の上へ脱ぐに等しく、高貴貧賤は天にあり。善惡邪正は己が招く所なり。此の意味を篤と悟らば、他の異見は朝湯の如く、己が身に染みわたるべし。唯一生の用心は、軀を借切の戸棚へ納め、魂に錠をおろして、六情を履き違へぬやうに堅く相守可申事と、神儒佛の組合行事が牡丹餅ほどの判を居ゑてしかいふ。

維時文化六年巳の春の發市にせばやと、辰の重九に毫を起して例の急案、後の觀月の芋を食つて、尻の如き小冊成る。

石町の寓居に於いて

式亭三馬戲題





凡例

常のにごりうちたる外に、白濁をうちたるは、田舎のなまり詞にて、おまへが、わしが、などいふべきを、おまへが、わしがといへる、がぎぐげこの濁音としりたまへ。

一夕歌川豊國のやどりにて、三笑亭可樂が落語を聞く。例の能辯よく人情に通じて、をかしみたぐふべき物なし。惜しいかな、其趣向僅に十分が一を述べたり。傍に書肆ありて吾とおなじく感笑して居たりしが、忽ち例の欲心發り、此の錢湯の話にもとづき、柳巷花街の事を省きて、俗事のをかしみを増補せよと乞ふ。則ち需に應じて前編二冊まづ男湯の部を試む。

評話浮世風呂

前編卷之上

江戸 式亭三馬戲編

五日の風静なれば早仕舞の牌を出さず。十日の雨穩なれば傘の樽をも出さず。月並の休日靜謐にして、賢きも愚なるも貴賤おの／＼恩澤に浴する人心、今日煤湯を沐びて五塵の垢を落し、明日黄湯に入りて六欲の皮を磨き、いつも初湯の心地せらるゝは、實にも朝湯の入加減、嗚呼結構とやいはん、噫嘻有難いかな。這首にだぶ／＼といふ僧あれば、彼首にぶう／＼をいふ俗あり。タロクとどぐる男あれば、湯う屋と引く女あり。薬店の小二は現金湯と洒落て讀めども、儒者の塾生反つて忍冬湯と誤るは、讀み易く解し難きの類なるべし。女湯の湯舟に簪を墮せば、湯汲の男、滑川めきて探すとも、御壹人前拾文の孔方は、青砥も惜むべからず。子供衆八文御供付十六羅漢、偏袒右肩の湯上りに浴衣容の顔世はあるとも、當時の師直更に女湯を覗かず。男湯孤ならず女湯必ず隣にあり。亭主の賓頭盧尊者は面を撫づる糠袋を貸すいとま、拍子木で留桶をきつけかけ、斜に女湯を見やりて膏藥の流るゝを





知らねど、男女風呂を同じうせず、夫婦別あるを知れるや。女房の光明皇后女湯の番頭にかはる。消炭の火鉢に糠の油を採り、貸手巾の雫は絞れど、却つて極老人あしき病人を入れざるは、阿闍佛の化益はあらずも、千手観音の上這はあるべき歟。洗粉の袋はぶん／＼と匂ひて下男の鼻を穿ち、風呂の壁はとん／＼と扑きて湯波の睡を寤さしむ。或はぎやあ／＼と啼き、或はがや／＼と騒ぎ、熱いといへばぬると云ひ、うめるといへばうめるなと喧く。どよめきわたる風呂の中、しんめりとして枕丹前をうたへば、六法で振こむ裸體あり。ノリ地になりて角力の段を語れば、土俵入の身で出るあり。爰に哀れを留めしは、石榴口の冷物ふるひ聲にあらはれ、去程に是は又、馬ぢや／＼といふ人、思ひの外立派にあらず。ハイ出ます子供／＼は江戸節を喊る爺様にて、いつも長湯の名をあらはし、御免なさい田舎者はめりやす好の江戸子にて、ざつと一風呂手巾を濡らすのみなり。されば長湯も短湯も、あるは八百屋の縁の下と松坂音頭の白聲は、店向の新下りにて、長し短し儘ならぬ、ちよいと黄色なそり節は、サイネエモシの合の手あり。にやんまみじや佛と咬ませれば、法蓮陀佛と吐き出すあり。ほ／＼ほん／＼と腮でころがし、ふ／＼ふんと鼻へぬかすに引かへて、是は唐山かね金山の麓とは吾から名告る胴満聲。あたまを押へて吐くあれば、尻をたゝいて語るもあり。片足あげて諷ふもあれば、踏みはだかりて怒鳴るもあり。居たり立つたりする中に、寝てゝてんつるの口三絃は、湯舟の隅に屈み居る藝なし猿の戯れ口。神祇、釋教、戀、無常皆入り込みの浮世風呂。所はいづくと定めねど、時候は九

月なかばの頃。錢湯天明けて未だ店を開かず。

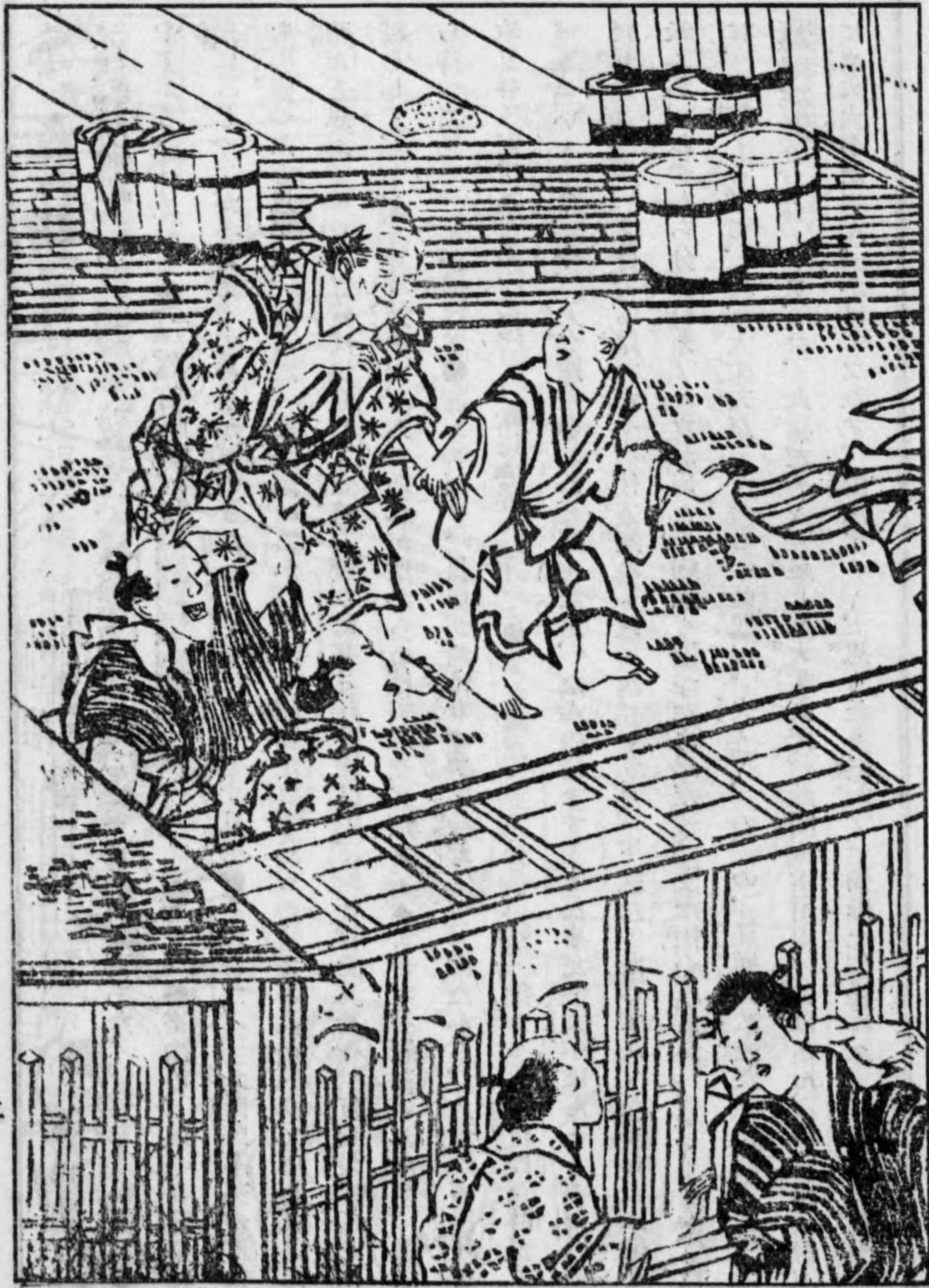
▲夜あけがらす かア／＼／＼／＼ ▲あさあきんど なつと納豆引 ▲家々の火打 カチ／＼／＼ ○此幕あきに出づる者は三十餘りの男、寝まきのまゝの細帯にて、下まへ下りに着物を着て、下駄の齒の踏る、ほど裾を引きずり、油で煮染めたやうなる手拭を、意氣地なくだらりと肩に懸け、手のひらへ鹽を敷せて、右の指で齒を磨きながら、惡の這ふ様に歩み來るは、俗にいふよ／＼といふ病の人 ぶた七「オヤ、ままだ明かね、明ね、明ねか、あ、朝寝な籠棒だぜ」ト獨ごとをいひつゝ、戸口に「ば、番頭さん、／＼、起けねか／＼、



朝湯の光景

▲むかしハ錢湯の看板に矢のかたちを木にてつくり門口の目印としたり。弓射といふ心なるよし、古き繪ざうしにまま見及びぬ。今も遠境には用ゐる所あり。

おお、起けね／＼、尻端焼痕すウ程、おて、お天道さま、お上や、おあがやひつた。コ、コ、コ、コ、コ、コ、ばんたん、オヤ、オヤ、オヤ／＼、糞々、糞踏だ／＼。エ、エ、穢ね、トそばにねてゐる手前か／＼、悪い奴だな、てめだねだと、それたて、糞踏だ／＼ナア、こゝ、こちくしよ／＼。ト小言をいひながら、齒磨の睡を



ある所 ▲顔をぬきあげ、びんぎりか、あ束ね、二十二三の男、晒の手拭とこころく口紅の附きたるを肩にかけ、齒  
 磨の袋を櫛枝にて置きしを、刷毛の間へ挟み、股引を丸めて小脇にかいこみ、寝起きのまゝにて来る ○向横町より此の頃ひたひ  
 りの男、帯と下駄ばかり、目に立つ有様、少し首を曲げて、奥歯を櫛枝で磨き ▲べらばい、手拭が落ちたイ。何をうかうかし  
 ながら来たりしが、唾を吐く拍子に、肩の手拭を落す。こちらの男見て  
 やアがる ト笑ひながら ●下駄の齒でぐるりとまはりながら、手拭を拾ひあげ、うしろを 「キヤン●畜生め、氣のきかねえ  
 ふりむいて、貝の口を見ながら来ると、又犬につまづく 「キヤン●畜生め、氣のきかねえ  
 所にうしやアがる▲ナニてめえが氣のきかねえくせに、ざまア見や●そねむない、此野郎華美の着物  
 を引張つたと思つて。なんだ、まだ湯はあかねえか。朝寝な奴等だぜえ。エ、人をつけえにした。何  
 時だと思ふ。モウ納豆賣は出直して金時を賣りに来る時分だア。ドレ手拭を見せや。紅を付けて、化  
 粧をして、ヘン、いゝ業晒だぜえ。あれが所からあげて来やアがつて▲よせエ、癢をいふなエ。男な  
 ら持つて見や。兄が違はア●違ふ筈だア。目鼻が無けりやア山葵卸といふ面だから、火魚から揚錢を  
 取りさうだア▲こんべらばア トいけ申儀に、どぶ板の ●ア、糞だ、どツこい ト飛び退き 誰かモウ踏付けた跡だ。  
 よいゝ「いゝ、今、今、乃公踏だ●おめえ踏んだか、なんの踏ますともな事だ。夫がほんとうのよけい  
 だぜ「よ、よ、よ、よ、よ、よ、踏たかや、仕方無ね、なゝた。コ、コ、下駄たゝたつてたゝたゝらた▲何を  
 云ふか、ねつから分らねえ。コウおめえの病氣も困つたもんだぜ。まだ快くねえか よいゝ「なゝ、な  
 に、最能く。で、で、大丈夫だく。こゝ此通だ。夫く、の、の、此通大丈夫だア ト足を踏みしめて見  
 になるをこらへて、足を 踏みかためながら 「コ、コ、此様だく、足しや大丈夫だ。此間も本所の、伯母さん、伯母さんの方  
 に火火火事だツた、かけてツたア、働たアく、思もたま働たア。伯母たん譽めた、伯母たん譽めた

ア●何云つて譽めた よいゝ「エ、大丈夫だツて大丈夫だツて、夫ぢやア讃岐の金毘羅様エ、金毘羅  
 様エお禮參に行、行ア、行る迎▲堀の内さまを信心さツし。まだくほんとうぢやアねえ。あぶねえ  
 もんだ よいゝ「堀の内様、お貼護符、戴た。有難てゝ、たゝたてやたちただち。南無妙法蓮華經く  
 くくくとツて、お題目く三百遍さばべ唱た。▲お題目を三百遍ぢやアすくねえ よいゝ「あた、あ  
 た、朝飯前だ。お題目、かやば空腹でなくたア利かね云た、おたアお母、乃公えく可愛がる、滅方  
 だく。すて、すて、すてきに可愛がるから能い。淺草の伯父さん、おでえ、悪、悪がツて坊主にな  
 で、坊く坊主になてはア。●坊主の方が能からう。伯父御の意見につくがいゝ。よいゝ「ナニく、  
 おふくど、く、お袋合點しねえ。おで、おツつけ、花簪花簪だア、耐ねえく。れこだアく。れ、  
 れ、れこだア▲お侍になるのか よいゝ「兩刀だアく。たまねえく。コ、コ、足は此通、大、  
 大、大丈夫だアく。 トどぶ板の上で、ふらくする足を二つ三つ踏みしめる拍子に、湯屋の大戸を内より開く。途端によ  
 ぶねえく 湯屋の番頭殿を激して飛び下り、二人と諸共にだき起す。此内よいゝは ばんとう「何所も怪我はしなさんねえか●  
 夫見さツし、いふ口の下からころんだア▲アハ、、、、よいゝ「な、な、何、大丈夫だく。イヒ、  
 イヒ、イヒヒ、、、、ト真け惜みの苦笑ひ ばんとう「どなたもお早うござります ▲アイ●どうてきに朝寝だ  
 の ばんとう「アイゆうべ夜を更しました▲怪しいぜ番頭●俄へでも行つたらう ばんとう「へ、夫なら  
 能いけれども ト敷蒲團で鏡箱の上をは ○二人は裸になり、よいゝ ●又すべるめえぜ。オ、寒い。今朝はめつぼう寒

いナア▲とでございやナ。同行どうぎょうでござい。同行どうぎょうくくくトかけ出し。是これはいなトさくろ口を這入る。すぐにそり節なくちなく前へあて、後生大事に向うをならみ。よい「ヤ、やつとこさトさくろ口を御免ごめんねくく。熱あつ、熱あつ、こいちやアちい、めつぼだ。石川いしかわ五右衛門ごうゑもんだアくく。トまたぎて、顔をしかめなが「ア、今は吉田町よしたまちでねんとどねんとどよい、こいつアいさみだ。アそりや、ハそりやト二人ふにんに催もよほされて、よい夫おとこで、ねんとど、ねんとどどとどろねん。▲表うらの方より入り来るは、七十ばかりの隠居、置頭おきだま中紙子の袖無羽織ちゆうししのそでむえり、十二三じふにさんの丁稚ちやうぢに、浴衣ゆいを持たせて杖つゑにすかり、口をむくくしなから。ばんとう「御隠居ごんかくさん、今日こんにちはお早うござります。いんきよ「どうぢや番頭ばんとうどの、大分だいぶ寒くなつたの。ばんとう「ハイそろくく加減かへんが違つて参りました「イヤ違つた段たんではない。コレ鶴吉つるきちよ、履物はきものを用心用心しろト上へあがり、耳のわきの珠。ヤ、ゆうべは寝そびれて困り切つたて。それに犬いぬめが、ヤないたくく。此齡このとになるが、ゆうべほど犬いぬの吠ほえた晩は覺えぬ。それからまづ、ちやんと支度しどして、布團ふだんの上にすわつて、煙草たばこをばくりく喫くんで、暫く考へてゐた所が、さて寝られぬ。さうでもない、内の用心用心を見ようと思つて、手燭てしやくを持つて表裏おもてうらを見たが、別條べつじょうもなし。又もとの床へ這入つたが、イヤ若い者若きものといふものは、よく寝るものだ。おれが起きて家内けいだいを氣をつけて歩くに、一人でも目の覺めたやつがない。あれだから油斷あぶらたんはならぬて。コレハびん助びんすけ殿、早かつたの。びん助びんすけ「ハイ御隠居ごんかくさんお早う。ゆうべの地震ちゆうしは何時なんときでござります。いんきよ「それよ、あれから暫くして七ツが鳴つたから、八ツ半前はつぱんぜんだらう。九くは病やまひ、五七ごしちは雨あめに、四ツ早よひざり。びん「七ツ金ななつかねとぞ五水ごすいりやうあれいんきよ「イヤくく六八ろくぱちならば風かぜと知るべしぢや。びん「ほんにさうだツけ。魂たまの歌うたとはき違ちがえた。道理だうりで

風をひいたやうな心持だ。いんきよ「イヤサ吹く風の事ことさ。びん「ホイ又違つた。私わたしは又、九くが病やまひとあるから、六八ろくぱちも風をひくだらうと思つた。オツトおあぶなうトつゞいて。▲これより退々たいたい人ひとはみがきうり「梅紅散藥ばいこうさんやく齒磨はみがき口中一切くちゆうしつてつ、ばいこさん「蜷あまアリむつせん剃身せしん、蛤かきむツきん「ひしほ金山寺きんざんじ、醬油しょうゆのもろみ「菜漬なづけ、奈良漬ならづけ、南蠻漬なんばんづけ、菜漬なづけはようござい「御用ごようはよろしう、伊勢屋いせやはよう「御用ごようは能い、御用ごようは能い。徳利とくりのお明あきはござりませんか。木魚ぼくごをたたく坊ぼくごさま「なむあみだぶくく。ボクボクくくく。ばんとう「あげませうト報謝する。なまみだぶくくく。今日の御志ごんし、御先祖代々ごんぜんぞうだいだい一切しつてつの諸精靈しよしやうりやう、證大菩提しやうだいぼだいのため、なむあみだぶくくく、ボクくくくくく。腰こしの曲まがつたお比丘尼びくに二人ふにんの音ね「チリリン、チリリン。ばんとう「進しんませう。びん「アイお有難ありがたう、にやんまみじやぶ、にやんまみじやぶ。西光さいくわうさんおまへの頭巾かぶとは、いつもより新しくなつたやうだ。わたしが目のかすんだせえかの。西光さいくわう「ナニサ、去年こぞのお十夜じふやに徳願寺とくがんじ様へお通夜つうやをしたらのヤ。私わたしが傍そばにちやんと落ちてあつたのさ。主ぬしが知れねえから、つゞくつて持つもつよ。頭巾かぶとがわるくなつたからのヤ。小裁こざいをめつければ拵こしらえようくくと思つた所、これが信心しんじんの徳とくとやらだ。のう妙清めうせいさん。妙清めうせい「ほんにそれがお如來にょらいさまのお授おんじゆけだらうよ。のヤ西光さいくわうさん、ヤレヤレにやむあみじやぶくく。ホンほんニ今日けふは萬屋まんや様が出る日ひだよ。西光さいくわう「マア叶屋かぢやの方かたから廻まわつていかう。妙めう「ア、腰こしが痛いたえ。チリリン、チリリンくく。ト杖つゑをつつばつて、からだをそりて腰こしを延のばす。坊ぼくご「いつまでもこゝに稻荷いぬかひや福ふくの神かみツ。アイ和尚おしょうお久ひさしぶり、朝坊主丸あさぼうすまるまうけツ。ばんとう「出でねえくく。坊ぼくご「さう云いはずとおくんねえ、丸儲まるぞろけ

だア。アイ一文、アイ和尚二人一文 ばんとう「出ねえ〜」坊「出ねえ〜」ツト口眞似しながら手桶を

六つばかりの男の子の手をひき、猿廻しの様ニ背中へ負ひしは、三つばかりの女のよい〜〜よ、アそりや〜〜来たぞ。おぶ

子。竹で拵へたる遊びの手桶と、やきもの、龜の子を持たせて、生のろい口拍子うはどこだ。兄さんヤころびなさんなよ、能く下を見てお歩きよ。アよい〜〜よ、アおぶうはこ

こだ。そりや〜〜ば〜ツちいだ〜。飛んだり飛んだり、オ、きたなや〜。これ兄さんのは、わんわ

んのば〜ツちいを踏まうとしたよ。坊はおとつさんにおんぶだから能いの せなかのいもと坊おんぶ「オ

オ、オ、坊は親父におんぶ、兄さんは歩行。サア下しな。コリヤ〜、待つたり〜、ころぶよこ

ろぶよ。サア兄さんひとりで衣を脱ぎな。坊の衣はちゃん脱がせる。ソリヤ手を抜いたり 兄おい

らはモウ衣を脱いだよ。跡の〜千次郎おめえは遅い。おめえはおせい トちひさい子のあごの下をこそぐる「コリヤ〜〜じ

やうけるな〜」モバの「オヤ兄さんには、似指があるが、鶴さんのはねえの「アイ鶴は落しました、

へ、へ、へ、福助さん扱此日和は能く續く事でござりますね 福助左様さ、是ぢやア豊年でござりま

す 金左様さ、サア這入りませう。コレ〜兄さん、すべりなさんな。鶴さんはお持遊を落すまいぞ。

アよいとこさ。福助さんモウ是ぢやア納まらねえ。子が出来ちやアみじめだぜ 源能いお楽しみだア

金能い苦みさ。いくぢやアねえ。ソリヤあたま〜、ハイ子供でござい〜 ト石榴口へ入り、二人の子をしめしながら兄さん

は手の届く所をしめしな。ソリヤだぶ〜〜、ア、能いぞ〜、温で能いぞ 徳藏是は金兵衛

さん、子供衆にはチトしつぱり物でござりませう 金ハイ徳藏さん、きのふは何所へお出なすつた。

大分御機嫌だつけネ、徳ハイ王子へ行きました 金ハ、ア海老屋か扇屋かネ 徳夫ばかりで濟めば

能いのに、田圃通を抜きました 金例の今口巴屋かネ。ハ、ハ、ハ、どうも打留はさう來るて。ハ、ハ、

ハ、徳チトうめて上げよう。子供といふ者は熱い湯で懲りさせると湯嫌ひになるものさ。ト〜、羽目

板をた、トント返詞湯をかきまはす時は、逆櫓の淨瑠璃を語る人が能い。サア〜皆様はねます。ヤツシ

ツシ。ヤシツシトかきまはす 金ハイ〜、是は有難うござります、サア這入りましよ。兄さん早く這入り

な 兄おとつさん、まだ熱いものを 金ナニあつい事があるものか。をぢさんが折角うめてお呉だ

は。鶴は強いから、コリヤ、コリヤ、這入りました「鐵炮の方までぬるくなつた。モウよし、トント

ン 金鶴は強いぞ〜 兄おとつさん、おいらも強いよ。コレ見な這入つたよ 金オ、強い〜、手

桶でだぶ〜を汲んで、ソレさア可。面白いぞ面白いぞ。オヤオヤ、龜の子が泳ぐよ。オヤ、そりや、

ぶく〜〜。ア、能いぞ〜。兄さん能く沈んで温まん 兄アイ、よく沈むと金魚や緋鯉が

出るのう 金オ、出るとも〜。啼くと水虎が出来ます。オ、恐い事、いや〜、水虎出るな。鶴は利

根者だから啼きませぬ。のう啼かねえのう、兄おいらも弱蟲ぢやアねえよ 金オ、オ、兄さん

も強い。ソリヤ耳の脇にば〜ツちいの溜らぬ様に、アよいと、目ねぶつてな。ソコデ鼻の下のお掃除

をして、蟲の食付かねえやうに、ヤレ能い子になつたぞ。アレ他所のをぢさんがお譽めだよ。ソリヤ

お舌をべろり、ヤレ能い子になつたぞ。ホイ〜お咳が出る。オ、オ、悪いおとつさんだの。あんま

りお舌を洗つたから、腹の方は灸があるからよしませう。灸ウ誰がするた 妹「おつかア 金「ホ、ツ、おつかアか。にくい母めだの。うな／＼をしてやらう。可愛坊に灸ウするて 妹「おつかア、うのウ 金「オ、／＼、母アうな／＼してやらうぞ 兄「おとつさん、モウ出よう 金「まだ／＼、モツト温まつて 兄「それでもせつねえものを 金「ナニおとなしくねえ。鶴は是程おとなしいものを、サア／＼兄さんも鶴も哥をうたひな、 兄「おウ月様いイクウツウ、十三七つ 金「そりや 兄「まだ年わアけえなア 金「あの子を生んで 兄「この子を生んで 金「サア／＼鶴もうたひな 妹「おまん抱かちよ 金「オ、／＼おまんにだかしよ、夫から「サア夫から 妹「太鼓あつて 金「ナニ／＼まだサ、お萬どうけつた 兄「油買ひに茶ア買ひに 金「アリヤ兄さん上手だよ 兄「油屋の縁で 妹「氷張つて 金「オ、氷が張つて 兄「すべつてこウろんでエ 金「あアぶら一升こウぼしたア 金「サア鶴もいひな、その油どうちたト、サアいひな「次郎どんの犬と 兄「わアい／＼、おとつさん違つたア。太郎どんだものを 金「みんな嘗めて 妹「ちイまつた 金「おとつさんは忘れますのう、ハ、ハ、ハ、ハ、 兄「其犬どうした 金「サア／＼そこだ／＼ 妹「太鼓張つて 兄「あつちら向いちやア、ドドドン 金「こつちらもドドドン 兄「さうぢやアねえ。こつちら向ちやアど／＼どん 金「ホイさうか。アどん／＼どんよ、サアあがりましょ。ハイ出ますもの子供／＼。おつかアが待つてゐるだらうぞ。お芋か、餅か、何でも能い子になつた御褒美に待ち／＼して居るだらう。ヤレ能い子になつたぞ。アリヤ／＼、初がお浴衣を持つてお迎ひに來たぞ

妹「初衣 金「オ、／＼「サア初や、あげるぞよ。ヤレ能い子になつたぞ。 兄「上り場にては醫者と雖 たくあん御隠居どうでござすナ。相變らず碁でござらう。伊勢十の主人、油八の太郎兵衛なる者、おの／＼御出會かナ。所謂碁敵なる者であらうて。ハツハツハツハツハト人を嘲るやうに笑ひて、口さきにて切 金「いんきよ「イエ、此頃は親類どもに病人がござつて、家内の者が代り／＼に夜伽に參るの、イヤ何のかのと取紛れて碁も出ませぬて「ム、夫はわるい。ハテさて夫は氣の毒千萬。トキニ病體は 金「いんきよ「兎角食物が納り兼まして、食ると尾籠ながら吐きます。此の節はます／＼重りますばかりで、 妹「ハ、ア誰におかけなすつた 金「いんきよ「仲景様を二廻りで験が見えませぬから、孫逸様を中たびお願ひ申して、只今では丹溪さまでござります 妹「いんきよ「何と見立てたナ 金「いんきよ「先づどなたのお見立も臍症ぢやと仰せられます いんきよ「臍症でない、ナニ夫が臍症。まづ物を食して吐すものを臍といふは、俗物も當推量にいふテナ。臍噎翻胃なる者は、なかなか又大いに異なるものだて。何として／＼、あの男等が少量で何が知れるものか。ハツハツハツハ、既に醫書といふ内にも、外臺千金方などの説によれば、エ、何といふ事があるて、エ、何アノ何でござつて、息は鶯棒に似て飛んで散亂し、人は臍症にして達て俳諧すとある。總て病人の息は鶯棒というて、關羽張飛が持つた棒を呑んだ様なもので、息がせか／＼といきだはし いものでござるから、兎角飛んで散亂したがる。此の臍症なる者は、所謂俳諧などを好む人にある病とござつて、人は臍症にして達て俳諧す。人が止める／＼といふ程達て俳諧する者などに生ずる病だ

ていんきよ「成程、左様おつしやれば俳諧が好きで困ります。いしや「イヤそれも一寸哥仙位はよけれど、五十員百員などくると、留員で又業をなすて。それ御覽じろ、俳諧が好きだ。見ずとも其通りだ、見脈にして病を指す、此方は聞いたばかりで病を察するはさ。ハツハツハツハア、去嫌がある食物をお氣をつけられい。其の膈壑翻胃に似て非なる者を鶉飼の症といふ。是即ち物を食つてすぐに吐くものです。恐らくは鶉飼の症でござらう。難治の症でござす。あの男等は先より口先が功者で、病家の俗物をとらへては、新渡の唐本には點がなくて讀みにくい。唐人も甚だ杜撰が多いなど、いふ傍から、モシ丹溪さま鶉飼を食べたいと申します。いかゞ致しませうといはれて、ア、ア、成程エ、鶉飼はよろしくない。しかしたべたいと思はゞ、家鴨卵を少しが能い、など、天爾波の様な事をいふ男どもだ。ハツハツハツハ、歎かはいし事だてナ。ハツハツハツハ、イヤ、チトお出でなさい。此の間は腹こなしに鞠を初めたでござす。所謂蹴鞠なるもの、成通卿程の高手にもならねど、踏みつぶすまでも大きく腹こなしに能いてナ。チトお出でなさい。ドウダ番頭、所謂主管なる者も大役だてナ。ハツハツハツハ、ばんとう「へ、へ、へ、今日はどちらへいしや「ム、今日は芥子園が書畫會から顧炎武が所へよつて、山谷が詩會へ廻るが、東坡や放翁が代作を頼む事だらう。兎角隙つぶしが多くて病家の小言を聞いてならぬ。是で醫者が流行つてはたまらぬ。イヤしからば、ハツハツハツハト浴衣をかへて出

▲八兵衛といふ男、あたまからぼつ／＼と湯氣をたて、手拭を下帯の代りに腰へ巻いて、着物を振つてゐる。

▲松右衛門といふ男、古風に襦袢のさがりをあごへ挟んで、めてゐる。尤も手拭は丸くしてあたまへちよいと巻せ。

松右衛門「八兵

衛さん、アレ見なさい、深い笠を冠つて、障つたらひけさうな羽織を着て歩く苦々しい、あれが三十箇所の地主様の果だア。八兵衛「角の道樂者かネ。松「さうさ、痛はしさも痛はしいネ。心がけが悪いと皆あの通りだ。ハ「ソリヤ、まく／＼よ、天王様はといふ形だネ。松「あの御親父は伊勢から出て来て一代に仕上げた人さ。其代り利勘だ。なんでも人は奢つてはゆかねネ。今日は大分魚が見えるから、チト騙つて奉公人に食はせようといふ所が、大きな皿に鯉の酢煎なら五匹ばかり、尾頭を並べて、鯉が小笠原流で、ト斜に構へて居るはさ。江鯉魚なら今日買つて焼いて置いて、自身に明日の朝提籠を提げて河岸へ行きます。河岸中をぐる／＼廻つても直が出来ぬから、土大根の折を買つて来て、ソレ昨日の焼いたこはだを一匹ヅ、入れて、輪切大根の煮付、夫が惣菜。大勢下女はしたがあつても、菜は婆さまが出て、まんべんなく盛り渡す。爺さまは彼のこはだをむり／＼と、頭からしてやりながら、魚といふものは頭に甘みがあるものだといふから、四五十人の手代子供が、無據頭から食はねばならぬ。ソコデ物が廢らぬ。年中朝が茶粥で、晝が汁ばかり、夜食は澤庵、それも鹽のあた辛いやつだから、二切れで湯までの菜になる。今日は佛の日だといふ所が、八盃豆腐が、平の中をゆるゆると遊いで居るやつさ。鯉節のはひる汁は夷講と生辰ばかり。三度の飯の外に食ふものは、冷飯を干した糲の鹽煎。其の中へ田舎から貰つた味噌豆を入れた所が、豆の数は鉦太鼓で探す程だア。おめえ。其の豆煎の外は自作の醴よ。婆さまが上總産だから、薩摩煎といふ茶の粉を拵るばかり、其の外に

奢といふはさつぱりなし。御先祖様を大切に、出入の者に目をかけてやらしつたから、身代はよくなる筈。金が子を産んで家質が流れ込む。商では儲かる。暫時の内に大層な物になつた。ハ成程私等が親父の咄を聞くに、先づ酒は夷講ばかりで、常に客のある時は、蕎麥二ツを鼻の先へ置いて、サア〜お辭義なしにお上んなさいといふ所が、たつた二ツだから客も一ツ食つて立つ。そのあとで婆どのヤ、さらば相伴しませう。こなたもまわれと半分づゝ食ふとの事だ。夫ぢやア金も溜る筈さネ

松「先づ第一冥利が能いわさ。僅三十年の間に、地面が三十二三箇所、土藏が三十、穴藏が二十五六、出入の人数からかけては事も大層だてネ。ハそれをたつた二三年で潰したネ。松「左様さ、なくすは早い物、一文の錢もあだおろそかには儲かりませぬ。お前方もお若い、錢はつかひなさるな、金罰があたる、ナア番頭。此の番頭もだまり〜してゐて、モウ株でも買つたらう。ばんと「ハイかぶは汁の實に買つたばかり、どうも錢金といふやつは溜りませぬ。松「イヤ〜至つて溜め能いものだ、心がけが悪いから溜らぬ。有難いこの御江戸に居て、金の溜らぬ事があるものか。錢も金も一ツ所に集る有難い所だによつて、諸國の人々が皆出て来て、出世するではないか。番頭も金を持たぬ氣なら、國に居てかて飯を食つて冷えかたまつて居るだらうが。ナントどうだ一言もあるまい。ばんと「コレはあやまりました。松「しかし見所があるテ、此番頭は頼もしい。綿の厚い着物が嫌ひでは身は持てぬ。貴様の着物も、薄綿になつては夫限りだと思はつしやい。八兵衛さんも今ではかゝさん一人だから、隨

分孝行しなさい。世話を焼かせなさるな。唐の何とかいふ唐人は、寒の内に筒を掘らうとしたら、金の釜を掘り出したとさへある。ハハイ私どもが孝行は金の釜も掘れぬえから、唐銅の釜を擔つて來る體でも吞ませる位な事さネ。松「夫でも能いのだ。今の道樂者がそれ程な身上を受取つて、あのさまは不孝の罰だ。ナニガ御親父の葬に焼香をすれば、役者の眞似をして上下でゐざり歩く。現在親の別れに、哀みの情が見えぬ奴だから、ろくではあるまいと思ふと、案の如くだ。ヤレ藝者の、ソレ替間の、ヤ何だは彼だはと、さまざまの者を内へ取込んで、どつび〜と騒ぐやら茶屋だの女郎屋だの、迂つたは轉んだはと、内外の物入りが強くなる。仲間の取遣りはあがつたり大明神。御親父の身の脂をとろ〜なくしてしまつた。そのくせ高慢に人を見くだして、文盲だの、ヤレ俗物とかやら云つて、茶磨藝を鼻に懸けたがる。茶座敷ばかりも何度拵えたか知れぬはさ。あれがほんの豊後よみの豊後知らずとやらだ。兎角人は身の用心〜ト出で、行

▲田舎出の下男、十能へ懐をつツかけ。三助「モノ金を拵えべい云つて、山事は悪い事だネ、わしイ國サ居たとき、珍事てうような事が有つけエ。爰でエ何云がな。己ア方で薯蕷と云ひます。みな「江戸でも山の芋さ。三助「モノ、夫で其薯蕷めが鰻なつたアだ。みな「ハテナ。三助「もつともハア、五體揃つてでもねえ。半分が薯蕷で、半分が鰻子だ。そこでハア獵師イ、夫エ見てうつたまげたア。何でも山の神どの、祟りか、蟒蛇だつべい。蟒蛇の化ねえ所が、魔性の物に違えねえ。打殺さア手もねエ事だが、臨終しねえ時やア氣味悪いと、何がハア、村内







上之卷五葉  
北川美九画(集)



所の水瓶を頼みてえ ヤキつきヤ「へんやつかましい。

晝時ひるどきの光景ありさま

ふろの中 トントンうめねえか、あついで、うめるなく、水になるぞ ばんとう「湯が出るよ  
ゆくみ「オイトとめ桶を持ち ▲世話焼ぢいさまと見えて、手拭をコレ若い衆、ながしを能く洗はつせえ。老人は危え、  
すべりさうだ。此また小桶を並べた事は、通り路がねえ。アレ水舟の水が溢るによ。誰だか糠袋を  
あけた、あのさまはい、いけぞんざいな。コレ、コレ、膏藥を足の裏へ踏付けた、エ、きたねえ。へ  
ッ、へッ。痰を吐くやら、瘡蓋を落すやら、へッ、へッ。イヤハヤ埒くちはねえぞ。南無妙法蓮華經  
トぎくろ口よヤ、夥しい尻だ。アイ御免なさい。コレおめえがたは悪い事だ。口もとを塞げて居すと、中  
り覗きへ這入なせえ。跡から這入る事がならぬ。ソシテマア其様に腰を掛けてばかり居ちやア、どうもなら  
ねえ。アイ老人でござい。ヤはは能い湯だ、此の湯をぬるいといふ人は鐵炮の方へ沈むか、此の格子  
を外して鏝の中へ這入るが能い。ヤレ、結構。アなんめうほふれんげきやう うた「清盛様は火  
の病、われらはッ。コウぢいさん、鐵炮へ沈むと附馬がうるせえはな。おめえ熱かア、香の物を一切  
れ入れて、かき廻しねえ。ソリヤ沸いて來たぞ。こうてきだア。虱の食つた穴へしみて能い鹽梅だぜ。

體中へ一粒鹿の子の紋が付いた。虱もまんざらぢやアねえ うた「忍び寄り來る小提灯。伊吾よ、と  
呼んでも見たが、可愛よし松は誰と寝た。サ、サ、おとつさんと寝たならよし うた「たとひ山中  
三軒家でも、主と二人で暮すなら「へん畜生め、心意氣だイ。すつぱりやつてくりや、いたこのはやし「ア  
アブウない、まだこウい、こい。 さみせんのわるまね「元コテントン、てこく、てんく、つん、ぼんぼ  
ん「オイ靜にしねえ。三味線がはねらア「アイ御免ねえ「ソリヤ出ますく、はい跨ぎます、おゆる  
しなさい「大きな罌丸だぜえ、天窓と鉢合せをして罌丸が宙を飛行たア。とんだ人魂だ「吉ヤ、あた  
まから罌丸とうたれちやア合馬アなるめえ。尻から銀で禪をかけやナ「うさアねえ、飛車と潰れて角  
の通りだ、おきやアがれ。オイ出やす、田舎者 ▲西國の方からはじめて江戸へ出て、鏡湯の勝手知らず、きよろく  
とつツ立つてあたりしが、下關に新らしき番桶が湯に漬けてあるを見  
て さいこく者「是ア憚な事、湯も汲み置いて、手拭まで添へ置くとは、どうする事もならんばい トおの  
れが  
手拭は絞りに禪を乾す ▲さて彼の新しき番桶を湯の中から此の湯は臭匂のする湯たい。ア、臭事 くさこ  
掛竿へ廣げ置き取り上げて顔を洗ひながら くさかにほひのする湯たい。ア、臭事 くさこ  
トおの。は何かい。  
どうした物かい。人ども使うた跡でも有つろ。此まア油どもの浮いた事ちう。のさんばい、ぎら ゆくみ男「そ  
する事、鯨ども洗うた跡どもの如あるけえ。奇妙な匂ひ、是ア打明ける事 ト湯をあびて鹽を湯液のゆくみ男「そ  
の鹽はこゝへお持ちなすつてはわるい。やつぱりあそこへ置いて、小桶で汲んで行つてお明けなさい  
「ナイ ゆくみの男は下帯を洗ふ事と心得しゆゑ指圖するなり。かの男は指圖を受けて、も此の手拭は新だつとも、何故此  
ヤア様に彼所此所穢居るか。ぜへたんぼう打込だ如、此のよごれのすさまじか事 ト番桶を廣げて見れば、あと此の  
トおの どよの中へ







しながら、折々舌を出して 酔「湯屋の番頭だな ばんとう「ハイ 酔「チ違ねか番頭、名は何といふ。名は番頭か、番頭三津五郎か。お、おれが目には六ツばかりに見えるから、ば番頭六ツ五郎だらう。湯はいくらだ、十文か ト錢入れを出しなから、錢箱の張紙を讀む ナンダ奴が四文、フム奴が四文、坊主はいくらだ。野郎が十文、奴が四文では坊主は只入れるか。エ、番頭、ど、どうだよ ばんとう「笑ひながへ、へ、へ、これは奴が四文ぢやアござりませぬ。ぬか四文でござります 酔「ム何、糠四文か。ム、ム、コレぬの字を力んで書けば奴と讀むは。糠なら糠のやうに誰にも分るやうに書け。奴といふ字は上げて書くと糸鬚奴、下げて書くと刷下奴と讀む。番頭、知らねえか ばんとう「ハイ存じませぬ 酔「知らざア宥してやる。ナニカ、其の糠袋も入れて四文か ばんとう「イエ糠ばかりで四文でござります 酔「フム糠代か ばんとう「ハイ 酔「フム夫では、ゲイフウ、糠代番頭代が四文と賣つて歩けばい、ウハ、、、ト ト笑ひながらあたナリを見廻し 笑「湯でばかりは食へないか ばんとう「ハイ諸方から弘を頼まれました、無 據弘め遣します。へ、、、 酔「フム赤切手ひかす膏ツ、番頭 ばんとう「ハイ 酔「なぜ赤切が手をひかねえ ばんとう「ハイ、へ、、、 酔「イヤサ、足へ赤切が切れて歩行れずば、手を引いて貰ふが能いぢやねえか。但しト手へ赤切が切れた時、足が引かねえなら尤もにもせう。痛くて一足も引かれぬ事はあらうが、手の引かれぬ事はあるまい。ナ、但しあるか、番頭ナ、ナゼ、赤切が手ひかす膏だ ばんとう「ハイ手をひかね間に治るとい

ふ心でござります 酔「ハテ呑込のわるい番頭だ。手を引かぬといふ事があるものかよ。エ、ト、こちらには、風流、八人、丸ではない。アレハ八人湯か、八人散か ばんとう「ハイあれは八人藝でござります 酔「フム藝か、ハテ知らぬ薬だな。風流とあるから風薬だな ばんとう「イエ八人藝と申して一人で八人の真似を致します 酔「ハテ奇妙な者を賣るな。いくら程するものだ ばんとう「イエ賣物ではござりませぬ、見る物でもないが、アレハきく物でござります 酔「サアそのきくが能いはさ ばんとう「六十四文位でござりませう 酔「ハテ安いものだナ。一人前八文につく。湯錢より安いナ。その薬を呑んで八人藝したら、一人前八文づゝ八八六十四文取つて、湯へ入る時は一人分十文拂ふ。差引くと五十四文づゝ利がある。斯うだから待てよ、コレ番頭、賣物ではあるまいが、せめて半分賣つてくれぬか ばんとう「ハテとんだ聞き違ひ、あれは八人藝と申して、人でござります 酔「サ、人は合點だ ばんとう「イエサ此の方では致さぬ、他所できかせるので 酔「ハテ扱きくから買ふ。きかぬ薬が益に立つものか ばんとう「イエサ、藝をする盲人でござります 酔「ハテ此の番頭は何を云つても分らぬ男だはえ。ア、酔つた、ゲイツブウ、ア、面倒な男だ。 又かほをしかめてき アノあちらは何だ、ハテ讀めねえ書きやうだ。おれに讀めねえから誰にも讀めまい。番頭、あれ、あゝ、あれやア何だ ばんとう「ハイ戲讀談と讀むさうでござります 酔「ム、解毒丸か ばんとう「イエ、あれは落咄でござります 酔「ム、ハテ色々な物を賣る、能く手が廻るナ。道理で高い所へ上つて居るはエ。ハ、ア、あれ、あの薬が第一だ。

どうもいへねえ、ゲイツブウ、番頭、ゲイツブウ、ア、酔つた〜。あのアレ、夜ばいの薬といふ物は何を置いて買はねばならぬ。今度は賣るまいと云つても買ふ。ばんとう「なんでござります。酔アア、あれ、あれ〜、アノ夜ばいの薬。ばんとう「へエ、エ、あれかネ、ハ、ハ、ハ、あれはお前さま、夜ばりでござります。酔夜ばりとは。ばんとう「寐小便の薬でござります。ウハ、ハ、ハ、ハ、酔も又なから。酔そりや十二文やる、これで糠をまけやれ。ソシテ手拭も新しいのを貸してくりやれ。酔ざましに一風呂、イヤどつこいな、コレ番頭、おれが草履は長刀だらうが、履違へられてはすまぬぞ。若し違へたら其代に裏付を取るぞ。番頭、氣を付けやれ。ト二階の梯子へ上。ばんとう「ア、もし〜、二階は貸切でござります。どうぞ下に被成て下さりまし。酔番頭、コレ、お身は色々の事をいふの。何處でも二階へ脱ぐに貸切とはどうだ。三百六十日晝夜十二時が間、飯も食はず茶も吞まず、宿元の用事も足さず此の二階を借切つて、湯へばかり這入つて居る者があるか。サあるなら爰へ出せ。おれが相手になる。もし借り切つた奴があらば不所存者だ。おれが利害を説いて聞かせる。ばんとう「イエサ、貸切といふ譯は、店向のお方々に戸棚を皆貸してござりますから、お脱ぎなさる場がござりませぬ。扱々お前さまは聞分けのわるい、世話をやかせのお方だ。酔番頭、コレ、扱々われも聞分のわるい、世話をやかせの男だ。ばんとう「ハテそれでも店向の。酔イヤサ店向でも樽拔でも、おれが着物をおれが脱いで、おれが罌丸をおれが握つて、おれが湯へ這入れれば、おれが儘だ。湯はその方の

物、錢はおれが物だから湯へ入つた跡で、借切の者が兎の角のいはず、體の湯の氣をさまして歸さうから、其の時湯錢もおれに返しやれな。ナント是程わかる事はあるまい。ナ、何だ、あすこに居る奴めが、おれを見て笑ひをる。不届な奴だ。何が可笑しい。ヤイ爰へ來い、對手になる。うせぬかおのれ。▲二階の番頭見かねて梯子の上よりだましかける。二かい番「モシ〜是へお上りなさりまし。生酔振り仰。酔ナンド、われはなんだ。正體をあらはせる。二かい番「ハイ私は二階の番を致す者でござります。酔ム、二階の番か。二かい番「ハイ。酔番は番頭まで功を経ねえのだナ。よし〜、さう聞けば堪忍なる。ナア番頭、下の男の様に分からぬ男もない者だ。ト二階へ上る。二階の戸棚は貸切の衣装棚故、戸に紙を張りて。コレ番頭、おのしが呑む物はなんだ。二かい番「ハイ香煎でござります。酔フム八人藝ではないか。二かい番「イエ左様な物ではござりませぬ。酔ム、錢をとるか。二かい番「イエこれは賣物ではござりませぬ。私は茶が嫌ひだから、これをたべます。これは私一人でたべる物でござります。酔ム、それで落付いた、一杯すそわけをしてくりやれ。ト一くちのゲイツブウ、ア、酔醒には能いはい。二かい番「ハイ。酔錢はとらぬな。二かい「ハイ。酔そんならモウ一盃くりやれ。二かい「ハイ〜。▲またの。酔ア、能いはい、番頭。二かい「ハイへ、酔酔醒には能いはい番頭。二かい「ハイどうぞござりますか。酔ハ、ア番頭、何かうまさうな物を食ふの。それはなんだ。二かい「ハイ餘り退屈致しますから、晝過ぎの目さましに買つてたべます。酔ム、晝過ぎの目さましか。おれも目をさましたいの。ハ、ア竹の皮につんで、ヤ、コレ、番頭、おのし買つたらう



が、ナントそれもおすそ分けはどうだの。人に見せてばかりは置かれぬものだてナ。二かい「ハイこれはたべかけで、きたなうござります。酔「ナニサ、すわぶん苦しくないテ。これは何といふ物だ。二かい「ハイ夫はお市といふ菓子でござります。酔「ム、お市なら饅頭でありさうなもの、ア酔醒には見ても能いはい。二かい「イヤモシそんなにお手をお付けなすつては。酔「ナゼ悪いか、おのしが食物をおれがいぢつたとて、おのしに罰も當るまい。じぎに及ばぬ。サテト、そんなら手を嘗めて、また外のをいぢつて、又嘗める分は能からう。コレ番頭、モウ一盃くりやれ。二かい「ハイト今度は番頭しぶく／＼に香煎を汲み酔「手を嘗めながら湯あめ糖をいぢつて、其の指を嘗めては、又格別能いはい番頭、此の湯の中へ入れた物は、其の菓子の碎けた粉だらうな。二かい「イエ／＼夫は香煎でござります。酔「フム何所から貰つて来る。二かい「夫はお前さま買ひ求めます。酔「フム錢を出したか。ハテ酔醒には能いはい番頭。二かい「ハイト顔居る。酔「ナントもう一盃呉やれ。面倒なら其の薬罐と粉の筒を爰へ貸れ、おれが氣儘に吞まう。酔醒には能いはい番頭。湯上りに吞んでも錢は取らぬか。二かい「ハイ。酔「まづしからばと、一風呂這入つて又湯上りに吞まう。ヤットコサ、まづ是も脱いでと、番頭、あのあれ、角力取の灸の蓋のやうに紙を張つたが、あの戸棚は何だ。二かい「あれが貸切の戸棚でござります。あの紙に書いたは店方の印でござります。酔「フムあの小さな戸棚に人が這入つて居るか。二かい「イエ衣装戸棚でござります。酔「おれはまた、借切つた奴が寝てでも居る事と思つた。此疊は貸切ではあるまいな。二かい「ハイ左様

酔「ム、錢は取るまいな。二かい「ハイ。酔「それでよしとゲイ引ドリヤ一風呂、番頭行つて来て吞まう。酔醒には能いはいト梯子をひよ／＼。▲金兵衛「とんだ者が來たの。生酔でも程が有つたもんだ。ノウ番公、源四郎さん奇妙な奴だネ。源四郎「左様さ、先刻から傍で口を出したかつたが、喧嘩になつては悪いと目を長くして居ました。二かい「イヤハヤ、あきれたお人さネ。源「ヤ傘屋の六郎兵衛さんが亡たさうだネ。金「ヤレ／＼氣の毒な。源「金兵衛さん、お前もお出でなさるだらう。金「久しい馴染だから供に立ちませう。葬禮は翌の何時だネ。源「大方四つでござりませう、遠いお寺だネ。金「ハ、ア方角はエ。源「目黒の蛸薬師からまだ十五六丁あると聞きました。金「ヤ夫は遠い／＼。いつもなら四つと云つて四つ半九つにもなるが、遠くては早く出すだらう。源「左様さ。併し葬は遠くても近くても一日の潰れさ。歸つてから何の用も達せぬやつさ。金「左様／＼、ア悪い方角だネ。二日かけの葬歸りが出来よう。源「手負があらうて。金「六郎兵衛さんも能い老入だ。息子達はよく粒が揃つて皆大丈夫なり、娘はそれ／＼にかたづくし、モウ孫も五六人ある。今往生すれば残る事はねえのさ。あの人も若い内苦勞したから、老つて樂をする。今の若者は老つてから苦勞する。身持が大きに反對だ。ア久しい染馴だつけ。南無あみだぶつ、アツアなむあみだぶつ。源「又へば將菜どもが蠅の集つたやうに初めたの。▲五六人集りて將菜。太吉「ヤ横町の草間御出なさい、又負けようと思つて。源「ナニ此の盲將菜め。太吉なざア、一番糖をねぶらせると、本氣で勝つたつもりで居る。太「サアそんなら此跡で教へてやらう。源





「屎でもくんべい團扇だ。ぎょう／＼云はせてやるぞ。五節句に何程よこす視いろから「ドレ／＼今の跡はどうなつた、ハ、ア悪くしたナア、負になつたア。先の鹽梅ぢやア丸で勝つた將棊だア。些と見ねえとさうだ。先「是でも能いよ、勝つて見せようツ。後兵三「今飛車角二枚渡したもんだから弱り切つたア。洒落も出ねえ。先「飛車と角で將棊は指さぬツ、こつちは王を取りやすツ。ソレ王手。後「そこで合馬サ、オツト待つたり。先「きたねえ將棊だナア。後「銀は惜しい。こゝは桂馬で、ソレそつちが王手だ／＼。先「いま／＼しい奴だ。やつぱり銀にして置けは能いのに。後「へ、ン妙手を指すてナ、サア逃げろ／＼。能いか／＼、逃げたナ。そこで何を打つてやらうな。ヤもう一間角を突込め。先「角を突込めとお出でなすつたか。イヤ角を突込めとお出でなされたかツ。ソコデト、かう打つ、あれで取るか。斯う来る、あゝ行く。若し引いたら尻からびたりト、先づなんでも遣つて見ろト。後「ハ、アおつな事をして来るナ。飛車王手が外れたら、銀を奪ひ取る計略だナ。先「ナニ飛車も入らぬのさ。源「此の手合の將棊は、王を詰めようとはしねえで、飛車と角ばかり惜しがつて居るぜ。コレ駒ばかり擱んで居すと、有りツたけ打たツしナ。先「ハテだまつて見なさいツ。汝等が知る所にあらずだ。サア／＼早くしねえか。下手の考休むに似たりだ。後「ナンノ、ちつと能い手をさすと洒落らア。下手の考休むに似たり。先「引と口ヤ此計究めて好しだぞ。ソレ来い。先「ヤ取れ／＼。後「イヤ遣れ／＼遣つてさせかい。先「取つてさせ／＼ツ、能いなく、ソリヤ王手、ヤ逃げたナ／＼、逃げたの内に横木

瓜ツ、イヤ逃げたの内に横木瓜ツ。どうしてくれうナ、是で行かうか、あれで行かうか、まづ斯う行け。ヤきび助／＼。ヤ逃げたの内に横木瓜、王手サアどうだ。後「ハテきびし／＼に牡丹唐草かい、斯う引く。天窓からびしやり。先「アおなまめだん佛。太直まだある／＼。角を引いて取捨て、しまはつし。後「それでも能くないテ。太「ナニ能いよ、マア引いて取捨てさつし。先「ア、ヤかましい、東西／＼。一人に五人が、りりだナ。大勢の智恵でおれ一人に負けるかい、可哀や／＼。取捨てたか、ソリヤ又王手。太「ソレ引たくれ／＼。先「ア、ア、なむさん、そこに桂馬があるとはしらねえ。待つて呉ともいはれまいス。後「そこでお手に。先「お手は山々王が三枚飛車角六枚。後「じやうだんぢやアねえ。先「お手には山々といふ内にも、香桂前にたゝす。金角寺の和尚。後「銀があるか。先「銀も一分や、二歩はありツ。真「いかい事渡したのウ。後「取捨てる事は奇麗だ、駒はいらねえ。先「フム盤ではかり指すがい。負ける氣遣ひなしの木さいかち猿之ツ。ヤ入王とさせまいとお打ちなさる。歩を成と打て。後「まづ金をいたゞき女郎衆と。先「ハ、ア惜しい成金を取られたかい。是にて將棊はおだ佛かい、ヤ是にて將棊はおだ佛と、斯うしろ。後「イヤ待つたり、これは爰に居たのだの。そんなら此の香で此の金を取らう。斯うは逃げめえ。先「ナンダ／＼、どうするのだ。二三手過ぎた事を仕直すぜえ、此方の駒まで動して、大きにお世話な事だ。一人で兩方指すの、アレ御覽なさいあの通りだ。若殿様のお對手になるやうだ。夫でよしか、何でも佛のいふ通りにしてやらア。斯う氣の能い將棊だ物を、名人だてナ、

ソレ、よくば引たくれんげの革財布と責めるだ。後「おつに責め寄せたナ。待てよ、爰が思案のあとや先ツ。ハテナ爰が思案の後や先ツ。責められてはチト辟易だてハテ、こいつはチト辟易仕るて。ハテお責めなさるか、おまへがたも精出してお責めなさるが身のお勤ツ。先「勤といふ字に二ツはない、テテン。源「ア、そこへ逃げちやア損だ。其の隣へ逃げて、むだ駒を遣はせるがい、先「能く口を出すナア。太「ア能い手があるツ、能い手があれば、大橋もありやすツ。源「ムフム目が暗んで居るから見えねえ。先「黙つてくたばれ、何もいふなツ。後「何もいふな、人ではないはツ。先「ヤ何もいふ人ではないはツ、ソレ何處へ行く。後「爰へ逃げる。源「ア、悪い、さう逃げちやアおえねえ。太「ソレびたりだ。先「アアよんやらまかせろさト。後「ア、よんやらまかせろさト。先「ソレよんやらまかせろさト。源「ソレ、そこが油断。先「ハテ何にもいふ人ではないはツ。後「ヤ人ではないはと取る。太「能いか。先「ソリヤ何にもいふ人ではないはト、雪隠へお出なさい。ア、臭い。後「忌々しい。とうとう雪隠へ。先「ヤ弱い事。源「ドレ、おれが敵を打つてやらう。太「おれが出る。源「マア待たツし「又へぼめらが、金銀でもおかつたるい。エヘン。▲五十餘の端様、内から迎。おらが太吉は何をして居るの。子を上り。「コレ太吉や、此の子は何をして居るナ、父さんが仕事をしかけて、今ツから店へ行きなさるつて、おのしが歸るのを待つて居なさるはナ。先刻から首を長くして、モウ歸るか、モウ歸るかと思ふに、再び三寶歸るもんぢアねえ、とつさんがじれ出しなさるだらうと思つて、ハツ

ハツとして居るに、ホンニ、思ひやりもねえ。能いきぜんだア。飯を食つて腕を突出すと、モウはや湯へ行候と手拭を持つて出たがる。いくつだと思ふ。廿三の四の年ばかり取つて、おれに世話ばツかりやかせて、世が世なら嫁子を貰つて、親を結構にすどす時分だア。世間の息子さん方を見たが能い。おのしがやうに、うぼつぼで遊んであるく者は又一人とありヤアしねえ。怠ける奴に碌な事を考え出した例がねえ。見たくでもねえ、將棊をさして飯の食はれる程になれば能いけれど、おのしが様な物飽きをする者は、萬一に飽ツぼくて、何を一ツ遂げた事がねえ。口惜しくは石垣へあたまを打付けて死んでしまつたが能い。おのしがやうな者は、死んでも親は泣かねえ。此の一言、子を思ふら恩愛の情を、イエサ、もうネ、どなたもお喧しからうが、可愛くもなんともござりません。ホンニ、おえねえなまくら者で、憎くてなりません。あれがお蔭で私が不斷とつさまに叱られます。私が陰になり日向になりして、とつさまの前を繕つて置いて、夫でさへ常不斷しくじります。人と云ふ者は、何ぞれ角ぞれ、取得のあるものでござりやすが、あれに限つちやア、鶺鴒の毛で突いた程もござりません。親に似ねえ子は鬼子とやらで、とつさまが曲つた事の嫌な人だのに、あんな子を持ちましたから、世間の人様に私が面目次第もねえ。お前がたの前でいふは悪いが、全體友が悪いからさ。折角内に仕事をして居る者をば釣出しに来てなりません。わが子の悪しき思はず、他人の子を恨むは愚痴無智の母親氣質、却つて我が子も悪しき道に誘ふ也。母親たる者、かゝる類はよく、恨むべき事なり。四五日も内に居るから、ヤレ、のう、としたと思ふと、又は駈け出し、又は駈け出しして、本の清書







無寐ながら蛸たこになると直打ねうちのある頭あたまだはい。こちらのお座頭ざとうは白座頭しろざとうに黒座頭くろざとう、寒の蟲つぶで盲くられた人は氷座頭こほりト、これまでは座頭ざとうもきこえたが、赤座頭あかざとうとは珍めづらしいはい。くり「ハイ私は小豆あづきに交まぜたのでござります。酔よム、いゝゝ、コレ貴公きこうも瘡毒そうどくか。くり「イエ癩疹しかが目へ這入りまして。酔よハハア癩疹しか、ハテとんだ物が目へ這入こつたの、這入こる時に何とぞ云いひましたか。くり「イエ何とも申しませぬ。酔よハテぞんざいな奴やつだ。大切たいせつの目へ這入りながら、案内あんないなしに無作法むさばな奴やつだナ。まだしも癩疹しかで仕合しあせ、海鹿あしかが目へ這入こつたら嘸な寝ねるだらう。目へ這入こつては眼病がんびょうであらうな。くり「ハイ。酔よハテ扱あ氣きの毒どくな、目は人間の眼まなこだ、人の眼まなことする目へ這入こつて眼病がんびょうになつては盲くらになる筈はずだ。つてゐて、ををか湯あをあびる。途端とたんの拍子しちに、又一人の男おとこ小桶こづつへ水みづを汲くんでまじり来き。酔よオ、ひやツこいホイ、コレハ、ヤイこちらの男おとこ、ナゼころんで水を浴あびせた「ハイ御免ごめんなさい。どうも鹿相しかさうだ、仕方しほうがねえ。酔よナニ鹿相しかさうだ。コレ、そつちの轉まぶは鹿相しかさうでも濟すまうが、おれに水みづをかけて鹿相しかさうで濟すむか、湯あをくぐらせた上で、水みづをかけるとは野郎やろうの素麴そうもくと思おもふか「ハ、ハ、ハ、酔よイヤ笑わらふな、可笑おかしくないぞ。人に水みづをかけて是こがほんの水みづかけ論ろんだ。二人ふたりながらおれが對手あひてだぞ。コレ此この通り水瓶すいびんが鼠ねずみへ落おちたやうに十分濡ぬれだ。了簡りょうかんならぬ。二人ふたりながら待つて居ゐる。コレ番頭ばんとう、先ま刻ときから喧嘩けんかの對手あひてが欲ほかつたが、漸々やうやくの事ことで二人ふたり一時いちときに出來いた。とてももの事に策さくを貸かせ。湯あの中なかを探たづして見たら、最もう二三人ふたりにさんはあらう。サア、皆覺悟みなかくごしろ。今の二人ふたり逃にげるな。逃にがしては番頭ばんとう對手あひてだ

ぞ。今見いまをれ、どうするか。トツツ立ち上ありて、足あしを踏ふみかけて、仰あ向けにどつき懸かぶ。酔よア、痛いたえ。うぬら出しぬけにいながら、足あしもとを見みれ。「ナンダ輕石かろいしか、輕石かろいしでもどいつでも、みんな對手あひてだ。ト相手あひてを間違まちがへて外ぐわいの。いさみ「つきとはな。輕石かろいしがあるゆゑ。んだ此この業報ごうぼう人にんめ。四文しぶん一合湯豆腐いっくわうとうとう一盃いっばいが關せきの山やまで、に、に、濁酒にごりざけの粕食かすくめ。とんだ奴やつぢやアねえかい。誰だれだと思おもつて、たはことをつきやアがる。二日ふたにちの初湯はつゆツから大卅日おほひそかの夜半よなかまで、是計これんばかしもいざア云いつた事ことのねえ東子あづまこだ。ナア、斯あう云いつちやア、しちもくれんだけれど。とりまゆる人ひと「ハテサ、まあ能いいはな。いさみ「インニヤサ、おめえまでがおつかじめる事ことアねえはな。此方こつちは大體たいたいな事ことア了簡りょうかんして、狎あころが糞うんこを踏ふんだやうな面おもてで通とさアな。無面目むめんもくも程ほどがあらア。何處どこの釣瓶つるべへ引ひつか、つた野郎やろうか、水心みづこころも知らねえ泡あア吹ふかア。コレヤイ、六十六部むそくじゅうろくに立山たてやまの話はなしを聞きやアしめえし、あたまツからおどかしをくふもんかえ。石菖鉢せきしょうばちの目高めだかなら、支躰しづてい相應おな子こ子ごをおつかけてりやア、まだしもだに、鯨くじらや鮠しやちんを吞のまうとは、大それた芥子けし之助のすけだ。掘抜ほりぬきの足代あししろへ家鴨あひるが登のぼらうといふさまで、おれに取とつてか、つたのが胸尿むねうしだ。ばんとう「ナニサ、まあ能いから了簡りょうかんしなさい。酔よナナ、なんだ、家鴨あひるだ、あ、あ、家鴨あひるとは、ナナ、なんの事ことだ。いさみ「ナニどうしたと。ばんとう「ハテサテ。そばの人ひと「コレおめえも生なま醉まの癖くせに、しつツこいからだだ。だまつて居ゐなせえ。酔よナナ、生醉なま、おれがいつ生醉なまだ、おらア酔よヤしねえ、コレ酔よやアしねえぞ。酔よつたと思おもつたら、ほんの事ことたア、當あてが違ちがふぞ。ほんの事ことたア。いさみ「コレエ、生醉なまだからふせうすらアエ、さもなけりやア、とつくに張はりくじくんだア。酔よオ、面白い





下之卷四葉  
北川美丸極



は、は、張りくじいてく見々、見る。くそうぬ、ほんの事たア、ほんの事たが、又ほんの事たア。  
 コレイ、は、は、張りくじいて見るエ。ほんの事たが、又ほんの事たアト三人につかまへられて、ひよろ／＼に  
目をすゑてにらんであるゆゑ、いさみをやう／＼にだめて引き分くる ほんとう「ハテおめえ跡で分る事だはな。皆が知つてゐるから堪忍してやんなせえ。高が生酔だから、どうも仕方がねえトなだめて歸し、さてかの生酔には密つてかゝつて 子供大ぜい「なアまゑ  
 粕食く 酔「ナナなんだ、此とツツとうへんぼくめ 子ども「ぼくねん人ヤイ 酔「おれ、おれ、ぼくねんじんなら、わいらアぼく大根だく。おら酔やアしねえぞ、ほんの事た、イヤまた、ほんの事たが、  
 又ほんの事たアあとは大風の吹い ほんとう「ヤ太夫さん此間は義太夫の稽古屋 太夫「ハハ、ヤえらう込むナト芝の引幕を寝まきに直したる廣袖の着物を脱がうとする所へ、稽古所の月なみ面では三の 義遊「ヤ親方、お早いナ 太夫「ヤア義遊さ切を照らうといふ木田あたまの刷毛腰梅、でつぷりとした男 手拭を絞りながら 義遊「ヤ親方、お早いナ 太夫「ヤア義遊さん、モウお上りカナ。ゆうべは、えら請ぢやげな 義「イヤモ呑太夫が所を拾つてくれた、酒客めが、紙治の茶屋場を出して丸で鹽町の氣で語りをるから、憎さも憎しと、紅梅籠の二ツ胴をはり出させて、久しぶりの石町をきかせるつもりであつたが、赤助がいふには、やつぱり音十郎殿に稽古した先斗町が口づいて大丈夫だといふから、假橋を出した 太夫「ハ、ア一本鎗ぢやナ 音十郎とは和泉屋音十郎、筆敷淨瑠璃の名人、すなはち古人松主が事なり しかしお前の淨瑠璃は、やつぱり住さんの性根で押して行きなされ。夫が徳ぢや。見物の請が能くて一割儲かるはい 義「イヤ又昨宵も浪花が例の鍋屋で中二階を張りをつたはい。的めも潜人ぢやな 鍋屋 潜人とは淨瑠璃のみそをあけて照り 潜上をいふゆゑ 潜人なるべし 〇淨瑠璃の方 太夫「大潜人ぢや。東へ持來もよけ

れど、的めは餘り仰山過ぎるはい 豊竹越前守の方、若太夫、若太夫、若太夫の類を東といふ。竹本筑後守の方、政太夫、住太夫の類を西といふなり 併しうまい事はうまいテ。ほんまの東口といふものは、まだくあのやうな物ぢやない。白湯さまはどうぢやつたナ 義「例の通り白湯と鼻をかむ音ばかりさせをって、床の内で咳拂ひばかりしてけつかる 太夫「あの人の語る時、あの人を床から出して聞人にして聞かせたい。自由にならぬもんぢや 義「立會はまだカナ 太夫「稽古がやつと残つてある。まだマア今やそこの事にやいけそもござりませぬ。チトお出でなされ 義「弦糸は見えるかの 太夫「此間すきとお出でがない 義「アあいつも古い下手、不景氣な聲だ ト立別れる。此の様にふ人、おのれが床へ這入ると、すこたんを語り、三味線ひき一杯遊ばれ、きく人に眼口をいはれ、床の中まであくびの聲の響くもかまはず、汗を流して語る。されども湯屋淨瑠璃の三の切語りなり 富「きのふ大師河原へ参つたが、ヤ遠いぞく。歸りに羽田の辨天へ廻つて、大森の橋の際へ出たが、草臥れ果てた。オイ金公久しく潮來を聞かねえぜ。ちつと唄はッし 金「ヘンそんな安いンぢやアねえ。是でも大躰錢をかけて習つたのだア。潮來をさらふとつて、毎日六七ツ、錢を遣つたア 富「何につかふ 金「見あたり次第に湯へ這入つたア。翌は杵屋の浚があらア 富「茶屋か 金「ウム今ツから湯の中で浚つて、それから弾合せだア 富「たまらねえ 金「オヤなんだか女湯の方で大きな聲をして喋舌るぜえ 富「新道の藝者の内の婆さんだらう 金「番頭のわきで聞かう 富「こいつアおもしろえく。  
 番頭曰 男湯の殘闕、女湯の光景、可笑しき事さまくあれども、前編の紙數僅なれば書き盡しがたく、後編に猶くはしくお目にかけます。女湯の趣向面白く出來の上、來春出版を皆様

が  
**ロマツの内早仕舞**  
めでたしく。

### 女湯之卷

#### 自序

嚮むかに著す男湯の浮世風呂、一篇いつぱん這入つた大入に、發客腹はんもくをば温めたれど、湯番のあたる火と共に焚落おとしの灰となりしは、終湯しまひゆの入り損ひ。今一足で噫あ嘻い惜ししい哉。其や燒版けいたは東も西も、涼湯ゆせむのせぬ間に今一編と、二度入りの御方おん様より、休みの翌あしたを俟まつ如く御懇望ごこんぼう頻なり。湯波ひしやの柄杓ひしや、作者の毫ご、まだらまだらと埒らあかずは、六日の菖蒲湯しやうぶゆ流行に後れ、残暑の桃湯ももゆ躑躅あとへんなるべし。未だあがらぬかあがらぬかと、草稿を急ぐ事長湯の迎に彷彿ふらふたり。然れど小な智囊ちひさを糠袋あなぶくろほど絞るとも、久しい物日の十二銅どう、ちよいと捻ひねつた趣向も無し。勿論もちろん覗のぞいて看みもならぬ女湯の別世界。こんな物でもあらうかと、淨湯ぢやうゆの樋ひの當筒あてづゝ棒ぼうが、竟つひに二冊の草紙となりぬ。此の節薪たきま高直かうちきに付、前篇の餘材あつを輯あつめて二番仕込にばんじこみの女湯なれば、烏からすの行水ぎやうすい早拵はやぢ、ざつとながして云爾しかいふ。

文化六年巳の重陽ちゆうやう前後五日の急案きふあん

江戸前えどまへの市隠しん

式亭三馬しきていさんば題

自序



譚話浮世風呂

五七



五六



女中湯人物之圖



附けて言ふ

小兒を養ふに丸薬の苦きと、水飴の甘きとあり。これを書に譬へば、三史五經は丸薬の苦味にて、稗官野史は水飴の甘味なり。蓋し世に女教の書許多あれど、女大學今川の類、丸薬の口に苦ければ、婦女子も心に味ふこと尠し。這女湯の小説は素より漫戲の書といへども、心を用ゐて讀む則是、水飴の味ひ易く、善惡邪正の行狀は自らに曉得べし。されば常言にいふ如く、他の風見て吾がふりをも好歹ともに改め給はゞ、教諭の捷徑となりぬべし。又強意見は耳に留めぬ壯者も、含笑ある教訓は、聽くに倦まざるものなれば、自然と心にとむるものなり。人々假初の戲冊子も心をとめて味ひ給はゞ、大益必ず小益の中にあるべし云爾。

此の書初編は、文化巳の年の肇春、祝融氏の怒りに觸れて、板面悉く烏有となりぬ。仍りて再び増補して上梓せん事を計れり。四方主顧の君子、發市の日を俟つて需め給はらば、發客の幸甚しからんと歛曰。

### 二編卷之上 女中湯之卷

朝湯より晝前のありさま

物もらひの百一切成就 穢極 穢毛 滯無 穢者 有羅之。内外乃 玉垣清淨 申器 「一天四海皆歸妙法、

南無高祖日蓮大菩薩、南無妙法蓮華經」願くは此の功德を以て普く一切の衆生に及ぼさん。南無阿彌陀佛」〇淨土宗やら、法華やら、八宗九宗入りつどふ女湯の障子を明けて、オ、寒いと云ひながら、肩をぶるゝとして入來るは、何文字とか豊何とか名告るべき十八九の白齒



といふ昔模様、謎染の新形浴衣をかへて

「オやお鯛さん、お早うござい

ますネ。昨夕は嘸お喧しう料理屋の娘ら おたひアイゆうべは、おねむかつたらうネ。いつでもあの生醉さんは夜が更けるねえ さみアイサ、それでも癖がなくて能い上戸さ。粕兵衛さんのやうに酒亂でな

いから能いよ。あれからネ、わたしを送つて遣らう迎、新道の曲り角で亡ツたり何かアして、とうとう内の前まで送つてさ たひいゝ氣ぜんな、きつい世話焼き爺だネ。呑助さんのへぼ拳と飲六さんの悪ふさげには恐れるねえ さみ左様さ、酒香さんの甚九も騒々しいよネエ たひいつでも終は厭さ。

オやお前モウお化粧が出来たネ さみ「アイ、今朝お櫛さんが一番に来て呉たからサ。おまはんのは誰にお結はせだ たひ「お筋さんさ さみ「イツそ恰好がよいネエ たひ「なアに、今朝は代りだから、勝手が違つて、をかアしい氣持さ さみ「人が替ると、上手でもわるいものさ。あツちを向いてお見せ。オヤイツそ、よいがネエ たひ「一が上り過ぎたぢやアないかネ さみ「いゝえ能ございます たひ「ハイおゆるりと ト駒下駄を下して、門 さみ「ちツとお寄んなはいましたな、宿に母が居りますよ。ハイ左様なら ト捨置で風呂へ ▲あとから来るは、是も同じ仲間と見えて、三十ばかりの白齒、眉毛の上へ小髭がたまつて、鼻のわきの肌理皺も、だん／＼深くくえこ入る ▲んで、色つや薄黒く、白齒も黄色になつたれど、ひつじばえの眉毛が、りきんだばかりで、顔中の七難を隠す、といふやつ。中折の下駄をがたく／＼と、いけさう／＼しく履きすて、湯番のかみさまに挨拶し、 おはち「お三味さん／＼ トいへども聞 お三味さん、浴衣をほり出して、帯を解きながら風呂の方へ向ひ、甲張つた調子にて おはち「お三味さん、お早いの おはち「お早いちやアねえはな。おめえといふものは、しよにんな者だの、さうしなせえ。随分つき合を知らねえが能いのさ。あれほど待つて居て呉なといふのに さみ「それでもおめえのお飯は埒が明かねえものを おはち「アイサ、大喰だからね、左様さ、至極お前さまの御尤な筋さ トいひながら風 今の、おめえの所へ寄つたら、おめえン所のかゝさんがいふには、たつた今行きやした。今しがたまでおめえの來るのを待つて居たはな。どうもあの子はしよにんだねえ。何の角のと嬉しがらせる奴さ。ホンニおめえのかゝさんは世辭者だのう。いつそ世辭が能いよ。おらが所のかかさんと來ちやア、小言ばアつかり云つて、うるさくつて、なるもんぢやアねえ さみ「能いはな、その代りに、とつさんが氣が能いから能いはな おはち「あんまり氣が

能過ぎるから、常日一夜かゝさんに叱られてばつかし居るはな。とつさんの最辰をするぢやアねえが、傍で齒痒い様だよ。コウ／＼おめえ、ゆうべは大酒屋か さみ「ア、註に曰、アイといふ返答をア、とい おめえは おはち「わたしは蛭子講の座敷さ。丁度八ツに歸つたはな さみ「わたしもそちこち八ツ前だつた おはち「無理酒を飲んだからは見な、いまだに目が腫れぼつてえよ さみ「道理で色が悪い おはち「オゝ熱い さみ「熱いか、弱蟲だのう おはち「弱蟲ぢやアねえはな。おめえも熱からうが、此の子の様な意地のつツばつた子はねえよ。トントン／＼、ちつとうめておくれ 湯波の男わざと 今うめました。モウなりません おはち「今うめたもすさまじい。まだ熱いから、うめや。おいねえ三助だのう ゆくみ「三助といつちやア、猶うめません おはち「そんなら三助大明神様、拜みます 此のうち水を ゆくみ「サア搔き廻しなさい おはち「いやだよ、誰がかき廻す物か。コウ／＼此處へ沈みな、水の來る所へ。アレサ、まんがちな、コウお三味さん、おめえ一昨日何所へ行つた さみ「芝居へ おはち「フウお客とか さみ「ナアニ櫻丸で おはち「オヤ誰と さみ「猫文字さんの所から誘はれたからの、おづるさんと豊たぼさんと一緒に行つたはな。おめえの所へ人をやつたら、者通さんと堀の内へ行つたといふから おはち「さうさ。まだ見ねえが、誰が能い さみ「紀の國屋さ おはち「さうだらうよのう。業腹な。跡の替り目も見損なつたよ さみ「芝居がはねたから、丸三へ寄つて、三さんに禮を云つて出たら、二階でエヘン／＼といふから、仰向いて見たら、大勢首を出して居たはな。聲色の彌七さんと、のし松さんが、詞をかけたつけ。その外は誰

が居たか、早々駈け出して来た。ア、まだ熱いやうだ。サア、出よう、トをかへ出ると、流しの男、留桶と中をながし ながしの男「サアお撥さん、背中を出しなせえ、ト洗ひかけ さみ「コレ、此人はや、おれが先へ来たものを、ながしの男「どつちでもいい。どうで一緒に歸る者だ。此のながしの男は來年頭番頭に拔けようといふ人物。この家に四五年も長年するゆゑ、女中がた一同に心やすく、詞遣ひもいけぞんざいが通 ばち「コウ、丁寧に扱つて呉な。いけぞんざいな、二三遍撫るかと思ふと、湯をぶつかけてお仕舞にするのう、男「大概で能い事さ。垢だつても毎日出る者でねえ、さみ「さう云ひなさんな、お撥さんのは、猫背中ときてゐるから、鼠の糞のやうな垢がよれるよ、ばち「エ、置いてもおくれ、能い口だのう、男「また喧嘩をせうと思つて、モウ、水の吹つけかけ競は悪いぞ。ア、やかましい娘どもだ。ソレよし、サア、お三味さん背中を出さつしやい、さみ「ソレ出さつしやつた、洗はつせえ。ぞんざいな親父だのう、ト此のうちのからかひ、長ければ略す ○三十四五のかみさま、八ッばかりの髪を連れ、「オ、あぶいぞ、あぶいぞ。ヤレ、あぶかつたのう坊や。ヤレ、内へ這入つたら温になつたぞ、トふりむ おかみさん此間は湯屋のかみさま高「ハイお早うございます。一兩日はけしからぬお寒さでございます。お杉さんお出でかね。オホホ、いつも御元氣で能いぞ。お玉さん、今日はお手習はお休みかえ、ト「イ、エ、かみさま「ハ、アおなまけだね、母「御覽じました、私の目つまを忍んでは休みたがります。今日もちやんとお爺さんをだまかしてお休みに致しました。兎角おとつさま殿が、あまやかし過ぎて困ります。それだから私のいふ事はさつぱりお取上げなしさ。かみさま「まだその筈さお前さん。シタガ、變つた物で女

藤のお子は兎角爺親の可愛がるものさ。アハ、お杉さん、何をお持ちだね、お薩か、オ、能い物をお持ちだぞ。オホ、いつそ愛盛りだ。とんだ人相よしで、能いお子だ。アレ、ひとりでお笑ひでさ、オ、お杉さんかよ、お、い、お子だぞ、ヤレ、母「サア、お玉は衣をお脱ぎなら、爰へおよこし、ソレお轉びでないよ。お杉坊も紋の足袋を脱いで、ソリヤお胴着も解いて、オヤ、りんがいくぢもねえ結びやうをした。お襦袢の紐が解ける物ぢやアねえ。サア、ソリヤよし、サア、早くお湯で温になりませう。ア、よい、よい、ト呼ぶ 風呂の内より、ト「なんだお馬か、何しに來た、馬「あのね、あのう、おとつさんがね、お客があるから、あのう、早くおあがりよ。そして、あのう、何處へも道よりをせず、たつた今お歸りよ、辰「アイ、今歸ります。誰が來たのう。たま、湯へ來ても直にお迎ひだ、うるせえのう。そしておのしはお手習に行つたぢやアねえか。何でお歸りだ、馬「今日はね、あのウ、お清書だから、清書双紙を取りに、辰「そんならよし。早く行つてお習ひ、馬「アイ、そしてネ、あのウ、おとつさんがネ、あのウ、今日は御褒美にお辨當にしてお遣りと、辰「また久しいものさ。雨の降らねえ日はお辨當は入りません、馬「ウ、それでも、ヨウおつかアさん、お辨當にしておくれな。ヨウ、お前なんざア、おとつさんがお辨當にしてやれとお云ひだ物を、辰「チョツやかましい、そんならお辨當にしてやるから、お茶好はならないよ、馬「アイ、ト出て行 何處のもお辨當で困りますよ、辰「ハイ



サ、もう五月蠅くてなりません。いかなことでもお辨當が遅いと、宿まで取りに参りますはな。さうしてえつさらおつさらお師匠様へ持行つてたべます 巳「ハ、ハ、ハ、ハ、いえ、又雨降風間には轉んだり何角致さぬで、お辨當も能うございますが、お茶が何だは角だはと、望み好がるさうございますよ。ヤレ水入へ挿すから花を買つて呉ろの、肉桂がほしいの、丁子水にするから丁子も欲しい事のと、様様のねだり事で、あくせい仕果てます 辰「いえさ、何處のもその通りでこまります。金紙だの、行成紙だのと、益にも立たぬことに切こまざいて遣ひ捨てますし、夫にまたアノ變り繪とやら申してネ、あつちへこつちへひつくりかへつて、役者の早變りの繪がござります。夫をお前さん、買ふ程に、箱に一杯溜つてさ。私も肝が潰れましたはな。三番目の兄どのは又合巻とやら申す草雙紙が出るたびに買ひますが、葛籠にしつかり溜りました。ヤレ豊國が能いの、國貞も能いのと、畫工の名まで覚えてまして、それは、今の子供は功者な事でございますよ 巳「さやうさねえ、私どもの幼少な時分は、鼠の嫁入や昔咄の赤本が此の上なしでございました 辰「いえさ、何事も移り變る物でございますよ、鬢挿を入れ始めた事は、近頃の様に存じました。その前は一面に 巳「アイサ、みんな摘髮でございます。それがお前さん、鬢挿だの張籠だのと調法な事になりました。獨手に髪が結はれます。あの島田くづしの形などは役者の鬢同然さ。頭へ載せさへすれば手つかずに鬢が出来る。イヤハヤ利口な事さネ 辰「一頻は頭の上へ鬢がおつかぶさつて居りましたが、又昔へ歸つて些ばかり貰つて來た程の

島田になりました。その上に上方風を好き好む者も出て参りますし、ホンニホンニ移り氣なものでござりますよねえ 巳「京形だの京簪だのと、何でも珍しい事を好みます。お江戸の人はお江戸の風がいつまでも能うございますよ。つかねえことでございますが、御惣領のお姉さんは、タシカお片附なさいましたツけネ 辰「ハイ相應な所がございましたから片づけました 巳「お一人づ、もお身のかたまるがお心休めさ 辰「何でござりますか、モウ女の子は金ツ食ひだと申して、宿でも小言ばかり申して居ります 巳「先様はお姑御がござりますか 辰「ハイまだ若姑でございます 巳「それはあのお子さんお骨が折れませう 辰「いえ、もうずんど氣立のよい姑御でございます。夫に鞞殿は一遍道樂をして堅まつた人だけに、至極わかつて居りますから、大きに仕合さ。夫婦中も至極ようございます 巳「それは何より能い事さネ。よしや姑御がむづかしくても、御夫婦中さへよければ納ります 辰「ハイサ、最う跡月帯を致しましたはな 巳「オヤ、それは重ね、お悦びでございますネ。能くお毒だてをお氣を付けなさいましよ。五月過ぎれば何をたべてもあたりは致さぬけれど、鱈などは決しておあげなさいますな、お乳に障りますよ。實母散や婦王散もおまへさんがお子持ちだけに御如才はございませぬ 辰「ハイ、私にも合ひ薬でございますが、照降町の足袋屋で賣る血の道の薬が能うございます。看板も出ては居りませんが、能く人の知つてるお薬さ。逆上せないで至極よいお薬でございます。あのお薬のお蔭で大分よい人がございますから、方々へ教へて上げます 巳「七夜の内につければ乳も出

る。ソシテよくしこりも取れて乳口の明くお薬がございましたつけ。ア、胸忘れを致しました。何處でかあつたて 辰へエ、それは尾張町の平松の黒薬でございませう。あれはよいお薬さ。熊の腹帯だの、子安のお守だの、お雛形だのと、それはく有難い品を方々様からお借り申しました。私がたびたび産を致しても、子の産は何か案じられまして、氣味の悪いものでございませうよ 辰その筈さお前さん。お産れなすつたら、産湯を徳利に一盃おとりなすつて、胎衣と御一緒にお埋めなさいまし。幼様がお乳にお困りなさらぬといふお呪咀でございます。私どもは兎角に子育てがなくて困りますよ。ホニお羨しい事だ 辰夫でも御惣領がお一人ござらツしやれば澤山でございます。殊に男のお子ではあり、私どもは女の子が三人、男の子が二人でございますが、そのうちにも女の子はほんにく生れるから死ぬまで厄介さ 辰いゝえ、女の子が心樂みで能うございませうよ。お前さんのもお二人男のお子だから、二番目のお兄いさんは丁度能いお跡取りさ。私どもの惣領どのも、世話ばかりやかせて困り切ります。襲にも晴にも一人の男だけに、甘やかして奉公にも出しませんから、今での後悔さ。利口發明でも人中を見ねえちやア役に立ちませぬ。儲ける事は知らねえで、遣ふことばかり功者になります 辰なにさ、どうで一盛りはお道樂でございますのさ。私どもの二番目も、人中が薬だと申して、本店へ遣はして置きました 辰へエ、よく長く御奉公なさいませぬえ。いづれサ他人の飯をたべねばネ、他の同情がございませぬのさ。たとへサ、奉公人を使へばとてもネ、わが身を抓つて見ね

ば、他の痛さが知れませぬはな。どうしてもモウ、親の手を離れぬ者は、痛さ痒さが分かりませぬ。御奇特に御奉公させ申しなさいませ 辰ハイサ、只今の分ではよく辛抱致します。宿で殿しいだけにネ、宿下の外は内へ来るなど申付けましたから、近所までお使に參つても、内へは寄りませぬ。トはな 辰お下女 下女「おかみさんエ、式手屋の馬太郎様が入らつしやいましたから、一寸お歸んなさいませ 辰「オイ、今行くよ。あれ御覽じましたな、二度三度のお迎だ。ホンニくたんまりと湯へも這入られませぬ。ホ、ホ、コレく喜代や、おのしはの、お茶の支度をさつせえよ 下女「ハイく 辰「左様ならお静に 辰「ハイ左様なら、お宿へよろしくおつしやつて下さいまし。存じながら御不沙汰 別れる 〇水槽の片わきに、糠をこぼしながら、婆様 さる「をばさん、おあがりか 辰「オヤをばさん、お早かつたの、いつの間に来なすつた トおない年位の婆あさま、互にをばさんくの挨拶 さる「ホンニをばさん、此の頃はお遠々しいの ト「アイヨ、おめえ鹽梅がわるかつたぢやアねえか さる「ソレヨ、その事よ、何最う年病だらうはな。目は悪しの、足腰は不自由なりの、かゝつた事ぢやアねえはな。嬉しがるものは嫁ばかりさ ト「何まだその年ぢやアねえはな さる「いくつだと思ひなさる ト「サレバ、おれよりは上だらうよのう さる「ア、上所か一まはり違はア。最う丁度だはな ト「八十か さる「ヤレモく、かはいさうな事をいふをばさんだ。七十よ ト「おや、おや、おれはの、去年まで五十九だつけが、取つて六十だヨ。大方來年は本卦歸りだらうといふ噂だ さる「此のをばさんは馬鹿な事ばかりいふ

は。ホンニく、いつも若い元氣だ。とり「若くなくてさ。おばと四十九で信濃へ嫁入といふけれど、六十ぢやア脉が上つたよ、のうをばさん。ハ、ハ、ハ、」おめえはいつも氣さくで能いよ。白髪にはなつても氣は若いヨ。とり「氣を腐らしたつて始まらねえ事だ。なんでもこちとは頓着しねえのさ。黒油でもなすつて、最う一遍おしやらくをする氣だものを、嫁に行く口があらば、をばさん仲人して呉なよ。鬼も六十、今が婆盛りだ。アツハツハツハ、」さる「ハ、ハ、ハ、ほんにおめえは後生がよからうヨ。とり「なアに後生も三升も構ふことか。死んだ跡は勝手にするが、此の世の事さへも知れねえものが、死んだ先がどう知れるものか。寢酒の一盃づゝも飲んで、快く寝るのが極樂よ。さる「それよ、おめえは些づゝも酒がいけるだけ氣の持ちやうが違ふ。こちとらは氣の晴れやうがねえ。年が年百くさくして居るだ。ホンニく見たくでもねえ、ア、最うく婆に倦じ果てた。とり「オヤ、此のをばさんはヤ、今ツから婆に倦きてつまるもんか。死んだ先には當もねえ事だから、お近づきの婆に百までも壽をするが能いはな。さる「オ、否な事かな。モウくしみく厭だ。些とも早くお如來様のお迎を待つ。さる「エ、何のこつたな、いくぢのねえ。死にたいくといふ人の、死にたがつた例はねえ。お迎が來たら、最うちつと待つてくれといふだんべい。さる「ウンニヤ、ほんのことさ。とり「死んで見たら、又生きたがるだらう。逐出した嫁を譽めては後の嫁を悪くいふやうなもんだ。夏が來れば冬が能いといふし、冬が來れば夏が能いといふし、人間といふものは自由ツくうな事ばつ

かりいふ物よ。こちとらは不斷息子や嫁に云つて聞かせるのさ、手めえ達は、おれが生きて居る内に甘い物をたんと喰はせろとの。死んだ跡で目がさめるな、お佛壇へお盛物を並べ立つてナニガ芋やすりこ木を削込んだつて、佛になつて食ふやら食はねえやら知れねえツ。精進日を忘れて油揚げ一枚焼いて着けたり、お供や七色菓子を上げるよりか、生きて居る内に初松魚で一盃飲ませる方が、遙に功德だと、の、さうだらう、をばさん。さういふもんだからの、野郎どのもよく孝行にして商賣を精出すはな。毎日商から歸りには、何かしら竹の皮へ買つて來ての、サアか、さん一ツあがれと、一合づゝも寢酒を飲ませるしの。少し涙で泪ぐみ。あれもおめえ、前方はちつと道樂だつて、今では鹽がしみたか、それはく大人しくなつてよく持ぎます。爺さまに早く別れたのが、あれが身のしまりにもなつたのさ。其代におれがあれを育てるには、のうをばさん、海山の苦勞をしたはな。なんとしてく、なかく生やさしい事ぢやアなかつた。それでも生立の悪い野郎なら、おぼつぽで遊び歩いて、いまだに役にも立つめえが、早く了簡が付いたで、あれもおれも兩爲さ。夫にまた嫁が直な者での、朝晩よく氣をつけて呉るからの、是がまた一ツの安氣よ。あれもおめえ、龍の糞新道の足右衛門さんの媒人で不意とした事て貰つたが、最う足かけ三年になるはな。どうぞ孫がほしいけれど、埒の明かねえ夫婦さ。あれも授かり者だから、いくらほしがつても無い種は出來ねえものよ。のうをばさん。さる「さうさ自由にならねえものよ。おらが内ぢやア、おれが體がきかねえから、守が一ツ

出来ねえのに、年子だア。ホンニちつとおすそわけしてえ位よ。先の嫁が置いて行た子が三人に、今度の嫁が続けて二人。またおめえ出来さうだ。せめて仕事でも精出せばいゝが、大酒食だから、五日も三日も怠け出すと細工はあがつたりさ。かゝアどの長屋中で評判の引すりよ。うぬが嬰兒にはかまはねえで、髪頭ばつかり作り立つて、亭主には襦袢を下げさせるか、屎小便もかけながして、襦袢を一つ洗はうではなし、飯を食へば膳をつき出してモウ嬰兒を背負出す。誰も仕人がねえから、せう事なしにおれが取り始末をすればの、大勢の子持を權に借つて、内の事は一葉も構はねえ。誰が大勢子を持ってといふもんか。手々の好で子を拵て自慢らしい。あきれもしねえといふことさ。あのまアさまを見なせえ。おめえの方へも行くだらうが、椎茸さん干瓢さんといふ天窓をして、なけ無しの一帳羅を着殺に着切つて仕まふだ。着物もの、おめえ、身じんまくをよくすれば、じゞむさくもなく、小ざつぱりと洗濯ものが着られるのだけはな。洗濯物は置け、針を一つ持つ術を知らねえだ。商賣ありだから、大方子も出来めえし。教たらちつとづゝ縫物も出来ようと思つたが、何が出来ようズ。出来ずともいゝ子は出来て、ようかし雑巾の張返しも手にのらねえ、針を一本持たせると、疊屋さんが端をさすやうだ。口は達者にベエラくしゃべつて、人が一言いへば十言程づゝ口答をするか。ホンニく、肝の煎れた事よ。聞きなせえ、塗盆の上で鯉節を搔いたり、敷居の上へ吹殻をはいたり、當り合のものを枕にして、いけずうくと晝寝さ。火鉢の中へはびよつびよと痰を吐いて、灰でぐる

ぐると轉がしての、丸い物をいくらも拵て置くから、おれが跡から廻つては掘出して捨てれば、いちにかゝつてお籠さまへ液を吐くはな。宵ツぱりの朝寝坊ときてゐるから、人を集めて面白くもねえ芝居咄を、ベエンくとして、そのあげくは寒いからぶつかけて食ひてえのと、さんざつぱらあばれ食をしてお寝ると高射だ。息子殿の寝言と掛合にギリく歯を咬むといふもんだから、やかましく寝つかれねえ。その合間には子どもらが目を覺して、ギヤアく吼えと、あつちもこつちも一時に泣出す。サア夫でも起さねえぢやア目がさめねえ。それだもんだから、夜がな夜一夜騒々しくてならねえよ、をばさん といゝはな、夫でも夫婦中がよくば、こつちの知つた事ぢやアなし、打遣つて置きなせえ。おめえが世話やき過ぎらア 一何おれは構はねえのさ。夫婦中がよくは夫婦喧嘩もねえ筈だが、親子喧嘩の合間こまには夫婦喧嘩さ。出しええもしねえ癖に出て往けといふ。片々どのは見くびつて、ふてるの、その跡は科もねえ行燈へ當つて、暗くもねえものを、エ、暗い明りだなんの角のと、燈心を掴み込んで、此の高い油をばつばと減すか。こつちら殿はこつちらどので、あたけちらして、傍にある入物小鉢はその度におちこはすだ。瀬戸物焼糺と塗師屋は常得意さ。あれでもすまねえもんだが、ほんにくからつきり氣の休まる間がねえ といゝハテ、そんなことに苦勞をするはおめえの損だよ。氣で氣が休まらねえのだ。後生を願はずと此の世を極樂にしなせえ。おめえが修羅を燃すと内中が治まらねえから、やつぱり地獄の苦みだはな。おれがやうに氣を持つても、是でも姑

はやかましいといはれ勝だ。おめえも五十年あとは廿歳だのう。そんなら五十年あとの氣になつて、おめえが嫁で、嫁を姑のやうにあしらふ氣になれば、しち面倒な事はねえ。家を治めるために娶を取つてあてがふからは、姑は遠くへ退居るがい。兎角姑が口を出すと治まらねえよ。おめえ死にたいくといふから、死んだ氣になつて居れば、何もやかましい筈はねえ。さるをばさん、おめえまでが、嫁の最貞をするから。とりハテ、誰が最貞をするものかな。夫がおめえの愚痴だアな。おらア女だけれど、心は男のやうだから、愚痴な事は嫌だ。そんな事をいふ隙に大般若經の建立にでも出なせえ。内に居るから悪い。おいらは毎日お念佛だ。ハアさうだぞと嘯して、鉦をたゝいて出なせえ。氣がはれてとんだ能いよ。いつまで活きるもんだナ。そんな事はさらけ遣て置きなせえ。エ、役にも立たねえ。オ、寒くなつた。おめえ最うおあがりか。お十夜には來なせえよ。どうせ勸信坊が札を持往だらう。さる「アイ、どうぞして参りてえもんだ。とりもんだぢやアねえ。さつさと出かけなせえ。」  
●三十位の女房、人がらのよい風俗、鼻の下を長く延ばして、もみあげのあたりを洗ひながら いぬ「オヤ／＼お鍋さんでございませうかえ。あのお子さまは少し見申さぬうちに、おみ大きくおなりなさいましたネ。モウ當年おいくつでございませう。きじ「ハイ九ツになります。オホ、いぬ「お宿下りでございませうか。きじ「ハイ、三夜泊りにお隙を頂きました。いぬ「それはよろしうございます。踊と申すものはおちひさい内から御奉公が出来てよろしうございますねえ。おいくつからお上げなさいましたえ。きじ「ハイ、六ツの秋、御奉公に上げました。いぬ「へエ、

よく思ひ切つてネエ。きじ「ハイサ、乳母を付けて出しましたから、只今までも御奉公が勤まりますが、最う早わが儘ものでこまります。いぬ「イエサ、やんちやんが能うございませう。しかしお乳母どが大體ではございませんネ。何は、御稽古はどうなさいませう。きじ「ハイ、藤間さんがお屋敷へお上んなさいますから、やはりお屋敷で致します。いぬ「それは幸なことでございます。モウ餘程お上げなさいましたらう。きじ「ハイ何か埒もござりません。それでも此の子は好でござりますから覺えもよい様でござります。へ、いぬ「大方芝居をおねだりでございませうネ。きじ「ハイ、最二軒見せました、今日はお寺詣に連れて参りますのさ。これが下ツて居ります間は、何角と手につきませんで、モウ／＼用がさつぱり片付きません。明日は早々お屋敷へ上げます。いぬ「ナゼエ、追願ひをなすつて、最二三日お泊めなさいましたネエ、お鍋さん、オホ、。ホンニ私どもへも些とおよこし申しなさいまし。お釜と丁度能いお友達だ。きじ「ハイ有難う。ホンニお釜さんもきつい御成人でございませ。毎日よく御稽古にお通ひなさります。いぬ「ハイ、もう背丈ばかり伸びまして、おとなしくございません。ヤレさらへ、ソレさらへと申して、やう／＼さらひます。兎角無精で困りますよ。それにお前さんネ、御縁がなくてどうも御奉公の口が外れます。此の方で上げたいと思へば先さまへ濟まず、御意に入ればこちらで不承知なり。度々お目見えに出ますが、兎角に故障がございまして、オホ、、なんだかモウ世話なものでございますよ。オホ、、きじ「イエサ、何ごとも御縁づくでございませうから、

必ずお氣ながになさいまし。しかしネ、御奉公は有難うござりますよ。躰しつげるとなしに行儀ぎやうぎがよくなり  
ます。内においてどのやうにやかましく申しても、折屈せりかてみが直りませぬ。お屋敷様へ上げておきますと、  
おれそれが何處か違つて参ります。それにお前さんネ、此の子が上あがりましたお屋敷様は、お高たかがよい  
所為せゑか御富貴ごふつきでございましてネ、おあてがひから何から萬事がふんだんでございます。それに部屋親  
様がいつそお氣立きだてのよいお方で、これを御自分の子のやうになすつて、お世話なされますから、至極  
勤めようございます。ソシテ奥様の御意に入りまして、名をばお呼び遊ばさず、おちやつびいや、  
於茶おちや於茶おちやとお召し遊ばして、お客様の入らつしやる度に、此の子を御吹聴遊ばさうでござりま  
す。誠に有難いこととござります。幼少から上げて置きました厚い御恩を一生忘れてはすみませんの  
さ。さりながら着類は綺羅きらが張りましてネ。その上今までの衣類は段々ちひさ小くなりますし、何も角かも只  
今からは大人おとな並なみに拵おとへ直しますから、イヤハヤ大頭痛おほづらみでございます。いぬ「左様でございます。しか  
し段々じゆんおおく順送りになすつて、あのお子様の着古めしふるしはお妹御様いもごのになりますから、むだはございません。  
夫それはもうおとつさんのお痛いたごととでございますねえ。オホ、。ホンニちつとおよこし申しなさいまし。  
私わたしどものお釜かまに地を弾ひかせて、なんぞお踊おどなさいました。チト拜見致したうございます。きじ「ハイ有  
難う、コレ御挨拶を申しやれ此の子はヤ。いぬ「ハイ有難う。きじ「お釜かまさんはお琴もなさいますネ。いぬ  
「ハイ、生田いくたを習はせましたが、此の間は尼駄あまた様の方へ上げました。モウ中許なかゆるしを取りましたヨ。きじ

「それは宜しうござります。チトもしお咄うたに。いぬ「ハイ有難う。ト別れる。●上方筋かみかたの女、ずんぐりとした風俗、色白  
紅黒光りに濃く塗り、太い弁を日紙ひしにてぐるく。●可愛らし。かみがた「お山やまさん、えらう寒いな。何ぢやとトトモウ  
巻きたるは湯氣ゆけにて脂甲あぶらのそらぬためなり。●聲こゑにて。此間はお腹はらの耦合あひがわるうて、夜よさり毎ごとに腹痛はらいたでづゝないはいな。それぢやさかい、風呂になと入つ  
て温あたためてこまそと思つて、なアんぼも入いつてぢやはいな。お山さんあれ見イ、お家いえさんの傍わきに立つて  
居ゐなます嬰兒いまいさんを見イな。ありや何色ないろぢやしらん。お山「あれかエ、あれは紅べにかけ花色はないろといふのさ  
かみ「いつかう能よう染めてぢやなア。山「薄紫うすむらさといふやうなあんばいで、意氣いきだねえ。かみ「いつかう粹すいぢ  
や。こちや江戸紫えどむらさなら大好だいすき。こちやあないな着物きものがしてほしいわエ。お山さんあつちや向むかきんか  
山「流ながしておくれか、夫はお憚おそれりだネ。かみ「なんのいな、テモ能よう肥こえてぢやな。山「いやよ、太ふとつ  
ちやうはしみく。否いやだ。酢すでも呑のんで瘦やせたいよ。かみ「なんのマア、肥こえたが能よいぢやないかいな  
山「それでもおまへ、ほつそりすうわり柳腰やなぎこしとさへいふぢやアねえか。かみ「かいな、こちやまた、風負かぜまけ  
せいで能よいかと思つた。わしなど走はしりな。横よこにねて轉ころる方がやつと速はやいぢや。山「ハ、ハ、ハ、ハ、  
モウ四よつを打うつたかネ。かみ「何なにいひぢやいな。つウツと最前さいぜん打うつてぢや。最もうやんがて午ひるぢやがな  
山「さうかエ、日は短いネエ。かみ「さいな、これから往いんだら、わし所ところへお出ででて飯食めしひんか。上かみの風  
に丸まるを料理ちやうして食くて見みたいと、千度せんどいうても、トトモウ内のが耳潰みみつぶしてぢやつたが、今日けふはどうして  
やら、丸まる焚たいて食くはそと、此こゝ様に云いうてぢやさかい、晝ひるは丸まるぢや。山「丸まるとは何なにだエ。かみ「御當地ご当地でい

ふ「鼈ぢやがな。おまへも食て見い。山「オヤいやよ、おかつねえ。鼈なんざア見るもいや。丸を焚くといひなはるから、麥飯かと思つたら鼈かえ。オ、氣味のわりい。江戸ぢやアね、鼈をしやれて蓋といひやすよ。山「何ぢや、蓋、あほらしい。蓋とはマアなんのこつちやいな。山「蓋の様だから蓋さ。上方の丸とはなぜだねえ。山「甲が丸いさかい。丸ぢやわいな。山「そんならどつちらも五分のこぢつくだネ。山「さいな、御當地の鼈煮といふはな、どないな仕方ぢやと思つたら、あほらしいマア、吸物ぢや無うて、上でいふ轉熬ぢやさかい。鹽が辛うて、トトやくたいぢや。上の拵へ方は又あないな不味もんぢやない。第一が薄醬油で吸物ぢやさかい、酒の下物になとせうものなら、いつかう能いぢや。こちや最う大好きく。鱸なども御當地のは和いばかりで、もみないがナ。上の鱸というたらまあ、どないなもんぢやい、名高い所がマア、京で上の生洲な、大坂で大正ナ、その外に川魚屋もまだまあ多とあれどナ、玉というたら等的等ぢや。何ぢやるとマア、鐵串にさして焼くぢや。ハ、その焼いた跡で能い程づゝに切つてナ、平に入れてぎつしりと蓋して出すさかいに、なんぼでもさめるといふ案じがないわいな。山「江戸ぢやア、そんなけちな事は流行らねえのさ。江戸前の蒲焼は、ぼつぽと湯氣の立つのを皿へ並べて出す。たべるうちにさめたらその儘置いて、お代りの焼立をたべるが江戸子さ。さめると猫に持行て遣らうと、竹の皮へ包んで歸る人は、よつぽど勘定高な人さ。山「デおますか。夫がマア、何で江戸子ぢやナ。物の廢にならんやうにしてこそ自慢したるが能いはいナ。

いしこらしう江戸子ぢや何たら角たら云うても、上の者の目から見ては、トトやくたいぢやがな。自慢らしういふことが皆へこたこぢや。ぢやによつて江戸子はへげたれぢやといふはいな。山「へげたれでも能いのさ。江戸ツ子の有難さには、生れ落から死ぬまで、生れた土地を一寸も離れねえよアイ。おめえ方のやうに京で生れて大坂に住つたり、さまざまにまごつき廻つても、あげくの果は有難いお江戸だから今日まで暮してゐるぢやアねえかな。夫だからおめえ方の事を上方贅六といふはな。山「ぜえろくとはなんのこつちやエ、山「さいろくと。山「さいろくとはなんのこつちやエ。山「知れずはいゝわな。山「へ、關東べいが、さいろくをぜえろくと、けたいな詞つきぢやナア。お慮外もおりよげえ、觀音様もかんのん様、なんのこつちやるな。さうだから斯だからトあのまア、からとはなんぢやエ。山「から」だから「から」さ、故といふことよ。そしてまた上方の「さかい」とはなんだえ。山「さかい」とはナ、物の境目ぢや。ハ、物の限りる所が境ぢやによつて、さうぢやさかいに斯した境と云ふのぢやはいな。山「そんならはいはうかえ、江戸詞の「から」を笑ひなはるが、百人一首の歌に何とあるエ。山「ソレく最う百人一首ぢや、アレハ首ぢやない百人一首ぢやはいな。まだまア「しやくにんし」トはいはいで頼母しいナ。山「それやアわたしが云損にもしろさ。山「ぞこねえぢやない、云損ぢや。えらう聞きづらいナ。芝居など見るに、今が最期だ觀念何たらいうたり、大願成就忝ねえ何の角のいうて、萬歳の才藏のと、ぎつばな男が云うてぢやが、ひかり人のないさかい、よう濟ん

である。山「そりや、上方もわるい。ひかり人ツサ、ひかるとは稲妻かえ。おつだネエ、江戸では叱るといふのさ。アイそんな片言は申しません。かみ「ぎつぱひかる、成程こりや私が誤つた。そしたら其百人一首は何のこつちやエ。山「からといふ詞の譯さ。能くお聞きよ。百人一首の歌に、文屋康秀、吹くからに秋の艸木のしをるればトあるよ、ソレ吹くからに、ネ、よしかえ、吹くゆゑにといふことを吹くからにさ。なんぼ上方でさかい」と云つても、吹くさかい秋の草木のしをるればとは詠みは致しやせん。かみ「成程さう聞きや、お前のがほんまに尤らしいが、ハテ云や何でもいはれるはいな。山「大願成就でもなんでも、利口をじこうといつたり、立派をぎつぱ、狐をけつねといふより能いのさ。五音相通とか、何とかと叶つてゐるから、無理ぢやアねえと、此中も博識な人がお話しだつて。延引だの観音だのと、あいうえをの上へ、むの字が乗れば、五音相通で、恩愛、観音、延引、善悪など、いふものだと、能く教なすつたから、今度おめえが江戸詞を笑つたら一番しめてやらうと思つて、待つてゐたはな。かみ「さうかいな、そんならア、かんのんも能いはト、からも能いはト、扱また關東べいぢや、どうしべい、斯しべい、行くべい、歸るべいとは、扱見とうむないナア。山「それもネ、萬葉集とやらその外神様の時分の本にネ、べい、詞があるとき。可とは可といふことで、行くべい歸るべいは可行可歸といふ詞で、今でも萬葉とやらの歌よみは、べい詞を遣ふさうさ。この事も一緒に聞いて置いて、内へ書付けて置いたから、その歌や詞を來て見なせえ。鄙言の、何ちふこ

とだの、角ちふことだのといふのも、ちふとは「といふ」といふ詞を詰めたので、古い詞だから頼もしいとお云ひだよ。かみ「なんのいな、べい、詞が何で譯があるぞいな。山「譯が無くツてさ、うそならわつちが内へ來て書付を見なせえ。かみ「ハアちと見よかいナ、何なと賭にせうかい。私が負けたらナ、醜など大福餅など立ちよはいナ。おまへ又何なと立てさんせ。山「立るとはえ。かみ「振舞の事ぢや。山「おごるのか。かみ「さいな。山「ム、わつちが負けたら釧を貳朱はづまう。かみ「こりや能いはいな。山「アいた、痛いよ。おめえはア、調子に乗つて背中を痛くおこすりだよ。モウよ。いよ。かみ「ハ、ハ、ハ、拍子にかゝつてオ、しんど。山「サアお前の背中をお出し。かみ「又遺趣がへしにえらいことすまいぞや。是、どうぢやいなお山さん、アいた、ア毒性なお方なア、いつこ面倒なら放つておかんせ。アいた、何しぢやいな、痛さがたまらんはいナ。灸があるさかい、味能うながしいな、アいた、アいた。子守の少女。おかみさんの赤子をあげる間、着物のそばにすわつてゐて、ひとつ身の着物をひろげ、ちい、を拾つてゐる。かみ「はら、七八歳をかしらにして、大歳ばかりなる。娘の子四五人、江の島土産の貝屏風を立て、香箱の上へ人形のペロを敷き、お蒲團をきせて寝か。揉み紙で拵へた島田、丸鬘、島田くづし、片はづしなどのあねさまへ、附木で拵へた櫛笄を挿し。をしめたり解いたりして、こしやくなことをし。おはる「坊や、おとなしくねんねしやヨ。朝起々したら、お目覺にお隣のおかみさんえ、最うね私どもの内の坊はネ、どうも啼いてなりませんよ。おなつ「そんなら灸を居ゑておやんなさいまし。おはる「ハイ、ありやこはいよ、灸だと、オ、こはいの、早く寐した。も



しおき、草束のあね様、まげゆはひの古きれで帯





百よひやア、く なつ「アイ落ちました●お白しろのサア。おんしろ白々しろくしろき白木屋のお駒さんウ、才三さいざさんウ、店みせには  
 丈八ぢやうはちならひ筆ふで ふゆ「ア、落ちた●えエン遠州あんしやうはやいちごぢやのウ、油まんしゆの孫ぢやというてエ。  
 いふにいはいれぬ伊達だてなる男ウ、夏も足袋はくばらをの雪踏せきたア。じよろりく〜とじよろはくばかり「オ  
 ヤ落した、エ、業腹ごふはらな ▲はる「能いい氣味きびだねえ●く「うつちやつておきやアがれ。おちやつびいめ。今  
 度はネお夏さん、京々きやうきやう京 橋中々はしちゆう中橋。おつや十六大振袖おほふりせでよウ、あの歌にせうネエ「ア、それがよい  
 よ ▲こちらの二人はとなり 同士をしてゐるはる「お隣のおかみさん御免なさいまし あき「ハイお出でなさいまし、コレハ〜  
 マアこちらへお上あんなさいまし はる「ハイ、これは赤の飯まんまでございますが、わざつとお祝いわひ申まます  
 あき「ハイ〜、御叮嚀ごたいなにお拵こえなさいましたねえ はる「たんとお給たべなさいまし ト帯を前へ廻して、西木綿で拵へた枕の狼を背負ひ、子守唄をうたひ どうも坊が啼な蟲むしでございますから、迷惑めいわくでございます。ちよつとお山を見せながら小便しをや  
 りませう。爰こゝが木や花のたんとあるお山だツサね、よい〜、よい〜。こゝがどん〜橋はしを渡わたる所  
 だツサ、サア最もうお山からだん〜歸かへる所だよ。サア小便せうべんした、シイ引 あき「おかみさん、もうお歸かへ  
 んなさいましたか はる「アレサ、まだ歸かへらねえ所ところだはな。今お山に居てお花見はなみの所ところだものを●猫をつく女の子こ  
ちらを見 にく「さまア、わアい〜、芥子坊主けしぼうずのおかみさんが何所どこにあるもんか。お冬さんあれお見み、  
はらき箒はらきを折おべしよつて箸はしにして、豆猪口まめちよくで芥かを搔か廻まして、赤あかの飯いでみぢやいまちゆ。おかみちゃん、わ  
 ぢやつと。さまア ト屏をひつくりかへして口眞似 はる「嘘うそ事ことだから、是でも能よいねえお秋さん。●子守の女見かねて おにく

さん、意地わりの悪い事を云いひなさんナ。惣體そうていおめえは少ちひい者をいぢめらア。皆みなが中なかを能よくしてお遊あそび。  
 そんなに別々わかになるから仲間割なまかわがする。一緒いっしょになつてお遊あそび はるあき「アイ にく「いらざるお世話せわだ。  
 構かまやアがんな目腐めくずれめエ 子こもり「ホンニ〜あきれた子だのう。それだから男の子になぶられらア。あ  
 くれたれあまとはおめえの事だ にく「おれがあくれたれが、うぬが世話せわになるもんか。ピヨイ ト唾をしかけて門口へ駈けた  
し、三足ほど歩くと、わつと泣き出して、一目散に内へかけて行く。中途で はる「みんなが私わたしの内へお出でよないか なつ「ア  
は泣き止みながら、わが内の路次から又泣きなほして、ワア〜々々引 ア参まらう あき「わたしも参まらう ふゆ「お春さん、わたしもしんに入れておくれな「ア、お前まへもお出で  
内袴着、ぐうたらべい、利口も馬鹿 「おいらア内うち歸かへる。蛙かへるが鳴なくよ。おいらアうウちイけえろ。蛙かへるが鳴なくよ。  
も一群にかんばしつたる聲をあけ

二編卷之上 終

二編卷之下

女湯之卷

あくたれと呼ばれたるおし  
 やべりかみさまお舌  
 ト云つたば  
 「おかみさんお出でなさいやしたか、モシ筑田屋のおかみさんあいきさうの悪いか「ハイ  
 としてあのお香々のお鹽梅の能さ。ありやアもし、どんなにお漬けなさるか。とんだお上手だ  
 「ナニサ上げるやうなもんぢやアないけれど  
 した「いかな事でも、あれほどおいしい物をや、オヤお  
 泥さん早かつたの  
 しろ「お舌さん、お早うございますネ。どうなりましたエ  
 ト何者か知らず、此の女の  
 言葉おつに説る也  
 「どうないましたエ、斯ないましたヨトトくちま しろ「どうなされましたとサ、能う言答めをする。すかね  
 えヨウ した「すかねえヨウも、馬鹿らしゆざいます。きざでありますヨウ。ト大きな聲 しろ「オヤもう後  
 生だよお舌さん、おまはん何の眞似をさつしやるのだエ した「おめえの口眞似をさつしやるのだよ  
 しろ「ほんにかえ、世話焼性だねえ。おつゝけ治りまさアなえ。ト云ひながら風 した「ようかし、治らうぞ  
 い。滅多に治るこつちやアねえ。コウく、糠袋を貸してやらうか しろ「あります した「よく恥を搔

かせたの。三年忘れねえよ、覚えて居な。お薦さんく、おめえモウあがるか、最ちつとつき合ひな。今にもう一返這入て来て一緒に上らアな。コウく昨夜はお忝け。あのまア、おらが内を聞きねえナ。しだらもなく酔つて来ての、とぼ口を跨ぐが早か、大の字に踏ぞべつて、色々な無理八百ウ言つての、困らせぬいたはな。其上句果は何だと思ひなはる、まだ足りねえからモツト酒買つて来いだ。ナニガおめえ、懐から錢出しての、此の女片言ばかり並べる故、よく振假名に氣をつけてよみ玉ふべしおれが買つて来べいと云ひながら、草履をはくから、わつちが引抱ての、コウおめえといふ者ア悪い了簡だと、の、だりむくれ切つて呂律も廻らねえ癖に、をかしくもねえ、酒なんざア見たくでもねえと云ふが早か、わつちを搔抓て放下込んだと思ひねエ。サア行燈がひつくり返ると、おべそがわアくると吼える。コレエ明りをつけやアがれといひながら、杓の水を打かけにかゝると、其の拍子に薬罐がぶつくり返つたから、茶釜も火吹竹も灰だらけヨ。それから隣のお鮎さんが駆け付て、明りをつけたり何角アすると、太平樂だ。わつちも蟲を持居る人間だから、合點しねえ。なんだ、おしやべりあまもすさまじい。こつちはナ、口も八丁手も八丁だア。山の神の功を経たのだから、よそのおかみさん達とは勝手が違ふだらう。泥水で腹アふくらした女だよ、思案もなくぶち打擲しても、病犬をぶち殺したやうにやア済むめえ、とかなんとかいふと、聞きなナ、しろ箒を振上げて、半死半生な目に合はされたア。今に骸が痛くツてならねえ。コレ見な、こんなに痣が出来たア。夫でも亭主といふ者は位の能い者だのう。皆が寄つて

かゝつて、お舌さんおめえが悪い。何事でも亭主にくつてかゝつて済むものか、勿體ねえことを知らねえ。なんでも誤んなせえと思ふさま手甲すつて、漸々おツつくねたはな。おとび「それやアとんだ事だつけのう。おいらアかたつきし知らなんだ。知つたらとりせえに行くんだものを。した「それが燈臺元暗しとやらだはな。我家樂の釜盥とやらで、内ぢやア我儘一杯されても仕方がねえ。おべそがあんまり云ば強請るから、昨日三絃を一挺買つてやつたら、夫をも踏んびいて撥をば何所かどう迷子にしてしまつた。喧嘩の度に徳は行かねえ。おめえン所の肝右衛門さんなんざア、全體氣前が能いから靜だ。おらん所の氣位とは雲泥萬里の違よ。とび「ナニサ、さうでもねえよ。あゝ見えてもやかましいはな。した「そりやア些らづ、のことは無くつてさ。おらが内ぢやア、ちよいと踏んばづすと、直に横ぞつぼうだ。惣別魂が違はアな。亭主の事だから悪く云ひたくはねえが、あんまりしねえはな。大津畫の福祿壽を見たやうに、天へ届きさうな天窓アして、牙をむき出してにらめ付けらア。とび「オヤくもつてえねえ事をいふのう。おめえがそんなことをいふが悪いはな。した「ナニ構はねえ。おれがことを古狸だといふけれど、てんくは狼だア。百で買った馬か、磁石の劍を見たやうに、横倒に寝そべつて居て、年中堅の物を横にもしねえ。チツト仕事を精出したせえといへば、打遣置え、果報は寝て待つ、なアんのかのと平氣馬士左衛門、何を云つてもしらん顔の反兵衛さんだ。ホンニホンニあんなにいけぞんきな者ア、鐵の草鞋で尋ねてもあるめえ。とび「そんなに云ひなさんな。わつちら

が内へ來なすつちやア、とんだ世辭が能いはな。夫だから方々で請が能いよ。オ、寒い。最一返温らう。した「ナンノ、内廣がりの外すはりよ。おいねえ蔭辨慶だつちやアねえ。ドレおいらも這入らう。オヤ〜お泥さんおめえまだ這入て居るかな、あきれが湯氣に上らア。コウ能い加減に磨きな、垢も身の内だよ。翌の分も除置きねえな。どろ〜ようざいますヨ。すかねえ。した「すかねえ、すかねえでお忝だ。是ですかれてみな、命も背も續かねえ。ハイ御免なさいやしトまたぐ。モ ●「モシ靜におつかひなさい。はねがかゝりますよ。した「アイ、それだから御免なせえと云ひやす。人込の中だはな、些ははねも懸らねえでさ、湯水を遣ふのだものを。かゝるが悪くは遠くへ退居るがいい。是がまた火でも遣つて火がはねるといふ物なら焼痕でも出來ようが、高が湯だ。但し湯がかゝつて熱いなら、水のはねをかけてうめてやらうか。アイ又かゝりやす。はねたら御免なせえ。トヤたらにつかふゆゑ、そばの人もした「いけツ大造な、てめえ獨り買切つた湯ぢやアあんめえし、向三軒兩隣のつき合をしらねえとんちきだ。煤掃ならチツト芥がいたしやすと斷りもせうけれど、湯遣ふ度に、アイはねがかゝりやすと斷られる物か。ノウお貧さん。オヤ最上つたか。お泥さん出たか。オヤお薦さん、こいつも居ねえ。おれを出し抜にして皆出たナ。ア、ごうぎと男湯が騒々しいぜ。氣のきかねえ冶郎どもだ。黄色な聲や白聲で湯の中を五色にするだらう。十二文ばかりが稽古した關扉だか、露のとうだか、震ひ壁で湯屋中を震はせらア。困つた病人だぜ、今日が發り日ださうだ。トひとりごとをいひなが、

▲湯屋の障子をあけてツアと泣いて來るは

娘おべモ「かゝさん、お鬚さんとお鬚さんが打つたア引。した「何だ、此の兒めエ。又泣えてうしやアがつたか、見たくでもねえ。どど、どいつが打つた。お鬚の兒か、何だお鬚と二人だ。あの兒めらア、惣體依怙地悪い奴等だ。なんぞの代曲にやア、泣かしてよこしやアがる。うぬも又うぬだは、あいつらに泣かせられることがあるもんか。益に立たねえ。なぜ向の面でも思ふさま引搔むしつて遣らねえ。ソシテまア、いけ外聞の悪い、湯屋まで泣えてうせることがあるもんか。能い〜、待つて居ろ。今おれが連居て、あの親めらに誤らして呉う。全體また親めらも世間を知らねえ奴等だ。己が兒ばつかり可愛がりやアがつて、他の子はくたばらうと構はねえ。長屋中鐵棒引いて人の蔭沙汰アするのが眉目でもあんめえ。そんなことは棚へ上置いて己が兒の世話アしやアがつたが能い。うぬも又あんまりしやはげるからだは。此の女めエ。ベモ「ナアニ、おいらア、おとウなくあすんで居たものを、やつたらむせうにいぢめちらして、着物がきたねえの、貧乏人だのと、色々なことを云つて、あのウ、ソウしてからに。した「なんだ、貧乏人だ、いらざるお世話さ。あいつが内はどれほど身上が能いのだ。着物を貰つて着せようぢやアあんめえし、そんなことは小兒のいふ詞ぢやアねえ。あの親めらが不斷ぬかすからのことだ。思ふさま鳴込んでやるべい。トいふ所へ、泣かせた娘のばアさま來あはせぬたりしが、ふる

「なんだ此のかみさんは、親めら親めらと、口穢え。そつちの娘のいたづらなことは云はねえで、人の子に返りくじを食はせる。口廣いことだが、わたしらが孫といつちやア、近所で名代のうちば者だ

から、何餘處の子を泣かせようぞ。そして長屋中鐵棒引とはなんの事だ。わたしらが嫁はそんな口松  
 ぢやアごぜえやしねえ。人さまの噂などは是ん許も仕たことのねえのだ。アイそれやアわたしが見上  
 げて居やす。能いかと思つて大勢の人さまも聞いてござる中で、いけふさくしい。そつちの子こそ  
 常不斷おらが孫を泣かせてよこすは。コレ鳴込んで能けれやア、こつちから鳴りこむのだよ。した「コ  
 レコレ、やかましい、チツトだまるが能いはな。年老のくせに出しやばつてからに、コレおらが兒が、  
 あくたれ女か、うぬが孫が根性悪か、人さまが御存じだは。着物がきたねえの、内が貧乏だのと、兒  
 の口からいふ言葉ぢやアねえ。てめえたちが云つて聞かせるから云ふのだア。塵葉一本、箸片、御合  
 力は受けたことはねえよ。アイ、そりやア最貧乏しても、こんな衆の厄介もつけえにやアならねえ。  
 そばにゐる「コレサ、お前方はどうしたもんだえ。子供の喧嘩に親が出ると譬にさへ笑種だ「コレサ、お  
 舌さん、おめえまあ。した「ハテいゝはな、打遣つて置きねえ。貧乏人だの何だのと。ば「ハテ云つた  
 か云はねえか、子供のいふことに證據があるものか。そばの人「ハテおばさん、おめえもマアあぶねえは  
 な。マアく上んなせえ、逆上せて毒だよ。ト引き連れて戸棚の。した「泣聲交りの甲はしナニサ、年老なら年老  
 らしく引込んで居れやアいゝのに、若者並にしやべくるからのことさ。澁紙へ兼房小紋をおいたとい  
 ふ面で、口ばかりむぐくしたつて、齒が立つもんか。「アレサ、あの子が泣くはな。靜にしなせえな  
 ト口をとがら跡で云つても濟むことだはなトヤうくな。お舌は子の方を。した「よく泣える兒だア。ヤイ見やア

がれ、親まで血道をぶちあげて騒ぐは、何だと思やアがる、皆うぬから發るはト着物を着「チヨツ、さき  
 へ歩行がれト子を叱りながら出で行く。ばあさま。●「こはいおかみさんだネエ。ほんにくおつかない「左様さ  
 ねエ、一體また子供の喧嘩をとり上げるは悪うございます。總て手前の子に理を付けては濟みません  
 「ハイサ、左様さ、私どものあたりでも泣いて來ると叱ります。云告口をとり上げては方圖ござい  
 ません。理も非も構はず我が子を叱るのが一番能うございますよ。ひよつと餘所のお子さまが云告に  
 お出でなすつたら、我が子を懲りるほど折檻する事さ「憎い奴でございませす。堪忍しておやり。今に  
 歸つたら大きな目に逢はせて遣りませう、など申すと、先のお子も納得致します。イエサ、その内  
 にもよく云告口をする子がありますヨ「あれも癖さネ。どれもく一人前のいたづらでございませすか  
 ら、皆能いことばございません。その内にも殿のお子はおいたづら計りでございますが、女の子は意  
 地の悪い者でございます。さうも申されません。女蕨のお子は大體お大人しうございませすけれど、  
 男の子は悪あがきが過ぎます。何でも嚴しいに若くはございません。オホ、、、、「ホンニ只今の様  
 なもので、子供の居る前では、めつたなことは申されませんよ。オホ、、、、「いえもう餘所のお子  
 に怪我でもさせ申しては濟みませんから、負けて歸る方が能いのさネ「アイサ、弱蟲が世話なしで能  
 うございます。トいふ所へ、廿四五の嫁らしき女、七十餘りの首婆さま、姑と見えて法體したる。よめ「お危うございませすヨ。お  
 靜に遊しまし。しうとめ「アイく。ト留桶のわきへ。よめ「留桶の湯をかき廻。マアすこしお待ち遊ばせ。お前さんに

はチトお熱うございませう。彌壽か、どうぞの、爰へ水を少しお呉れ。下女おやす「ハイ」ト汲み来たり、とめ桶へあける

よめ「オットく待つたりヨト掻き廻サアく丁度能うござります。お前さん是をお浴び遊ばしてお上り遊ばせ。しうとめ「アイく、最うあがりましょ。今日はあなたが能く流して呉たで、さつぱり仕ました。わたしは上るが、こなたはもつと這入るが能いよ。よめ「イエもう私もよろしうございませう。しうとめ「よいかえ。能く温まらぬと跡で寒いによ。私に構つて風を引いてはならぬ。よいかえ「ハイよろしうございませう。彌壽か、常の言葉なら彌壽やと呼ぶ所なれども、此の嫁はいまだお屋敷▲下女おやすも此の嫁が屋敷勤めの頃より、部屋方に勤めたるが、嫁人について婚禮付の腰元と見えしが、旦那様の名を呼ばず。あな彌壽かと、かの聲に呼ぶなり。

お出で。わたしがお供するから能いよ「ハイく。ト戸棚の方へ勝どんヤ、お上り遊ばすよ。着物のばんに來てみる丁稚

「アイ。ト見かけてみた合巻繪草紙を急に懐へおしこみ せつち「ハイく、こちらへト百婆あさまのよめ「同じく背中とかた手を引く おあぶなうございませう。やす「あなたえ。よめ「アイ。やす「お浴衣がト後よりをもちそへて 御隠居様エ。お静に入らっしゃいませ。しうとめ「アイく、おのしはよく温まりやれよ。やす「ハイく、へいあなたお静にト嫁にも挨拶して残る。せつち「オットお危うございませう。御新造さんエ、お糠袋は。よめ「ア、彌壽が跡から雪いで来るから能いよ。モシエ、お風でもめしてはお悪うございませうから、直にお着物を召させ申しませう。トト着物を着せて、手を引出る。丁稚はあ ●あとは下女。女房「アイお忝け、オヤおやすどん、今日はお早かつたの。やす「ハイ、お供で参りましたから今日は早うございませう。

お夜食を仕舞つてから参じますと、気がせかく致しますから、落着いて流しては居られませぬ。女房

「さうさのう、お前の所もお人が多いから大體ではないのう。お前の所の御隠居様はお目が御不自由だが、御不足のないお嫁御様をお貰ひなすつて仕合せだ。鐘も撞木の中りからとやらで、なんぼ結構なお方でも、お嫁御さんが悪いと、是非しつくりといかぬものさ。親孝行で御器量はよし、人あたりは云ひ分なし。何所と云つて難の無いお方だ。お羨しい事だよ。やす「ハイ、いえもう私の旦那をお譽め申すもいかがでございますが、惣別お氣立のよいお方でネ、お前さん、あなたがお屋敷にお出で遊ばす時分は、お部屋中で評判のお結構人でございます。私が一體兎相かしい性で、ぞんざいものでございませぬに、ついしか、ぶつとりとおつしやりませぬ。夫で私もあんまりの有難さに、せめて御婚禮までお付き申さうと存じまして、只今までたうとう長年致しましたが、是からはどうぞお子様でもお出来遊ばすのを見て、何所へぞ片付きませうと存じますのさ。女房「それは能い心がけさ。

ホンニおめえも最う片付きなすつても能いのう。やす「ハイサ、有難いことには、私のやうな者でも、あちこちからお世話遊ばして下さいますね、マア遅からぬことでございますから、氣長に致して何所ぞ見定めます積りさ。有難い事には、旦那様から支度をして遣はさうから、相應な所を見立てるとおつしやいませうが、私は姑の面倒は随分見ませうけれど、田舎出の人か何か、當世めかぬ律義な人の所へ参りたうございませう。女房「その事さ。當時はモウ色男より持男、それが大丈夫でよいにヨ

「イエもう恥を申さねば理が聞えぬとやらで、私の姉がお前さん、男望みでございましてネ。小綺麗な男を亭主に持ちました、サアお前さん、その人がネ、兎角浮虚が止みませんで、大きに苦勞致します。それもお前さん、遊びに参るならまだしもでございしますが、意地のきたない人で、兎に角近所の娘御や何や角やいちぢり散らしまして、人間も悪うございませうのさ。女房「さうサ、それが第一の疵さ。女郎買は大概程があるから能いけれど、地の好のぼろツ買といふ者が性悪でいかねえものさ。わたしらもきつい嫌さ。マア一體男らしくねえネ。男なら男の様に金を遣つて賣物買物が能いはな。何所にもそんな人の多いものさ。トおのが身に引き。ヤア「ハイ左様でございませうねエ、モウ／＼／＼それを見ましては、私どもはどんな男でも正直で律義まつとうな人が能うございませう。女房「さう仕なせえ。必ず好男を持ちなさんな。好男だと思つたのも其の當坐ばかりさ。世帯染みてお見、毎日能い顔もねえものだから、両方で面白くないはな。そして好男ほど浮虚で飽ツぽい物さ。その筈だものを、方々から引ばり尻にするから、己惚で身持が悪いはな。なんでも好男は傍から身を持たせねえ。わたしらも女の端だが、全體女といふものは男の爲には悪いものさ。芝居でする忠臣藏をお見。もとは何から起るといへば、師直がかほよ御前に惚れたから事が發つて、あれほどな騒動になつた。小波が力彌に惚れたばかりで、親の本藏が命を捨て、夫婦にして貰ふの、親馬鹿とはよく云つた譬さ。あのまア勘平を御覽。旦那のお供に來ながら、腰元のお軽と色事をしたばかりで、あの大騒動にも間に合は

ず。是も色事の所爲だ。伴内もおかるに惚れるか、何でも角でも原の起りは女からさ。今は役者最負もひねつて、濡事師よりは敵役や半道をひく世の中。女郎も好男を棄て、醜夫を見えにするさうだから、人も段々えぐりとやらになつたのさ。それだが、あの勘平は役に立たねえ男だよ。わたしがお軽ならば伴内の方にするは。マアなぜ云てお見。主人の一大事にはづれて狼狽へ廻つて切腹せうとするを、お軽に止められて切腹も仕得ずサ。女の智慧を借りてその上に、いけまじまじとお軽が親里へ行つて居候になつてゐるはサ。それも能いけれど、主人から頂いた定紋付を胴着にして着て獸ツ臭い身に付けて、猪や猿を打ちに出る。そしてマア兎相かしい定九郎が足を拿へてから喫驚するところが何處にあるものか。猪だか人だか大概知れさうなものだ。獵人が火繩を消す様なことで、どうして渡世がならうぞい。最う疾くに死んだ跡を、薬は無きか何の角のと探り廻るが、鐵炮で打殺した物が薬位で届くものぢやアないはな、つもりにも知れたもんだ。掴んで見たる金財布、天の與へとおし頂きツサ、天道さまが人を殺して取れと何教へるものか。ソシテまア猪は最前樂屋へ引込んでお食をたべ居る時分だのに、猪より先へ一散にツサ、どうして人の足で一散に駈けたとて、猪に追ツつかれるものかナ、あてこともねえ。切腹だつても其の通りさ。一體兎相かしいに狼狽へるから悪い。まづ氣を靜めて與一兵衛の死骸を改めれば、鐵炮疵か、ゑぐつた疵か分るもんだから、その上で昨夜の咄をすれやア、そんなら斯々で、親の敵定九郎を直に打ちとめたと云つて、却つて譽められるのみならず、痛い腹も



切らずに済むことだ。あんまり馬鹿らしい男さ。お軽もお軽だ、働きのねえ、あんなにくぢなし男に情を立つて、女郎に賣られることはないはな。可哀さうなもののはあの婆さんさ。島の財布の島黄金、四十九日や五十兩、合せて百兩百ヶ日と、とんだいそがしい所で洒落を云つて残して歸つたが、あの五十兩で一生は食へまいよ。與一兵衛は死ぬか、勘平は腹を切るか、平右衛門が敵討の供をして歸つた所が、永々の浪人ものなりサ、お軽はお比丘尼になる。三人口を養ふに四十九日や五十兩所か、どうも暮しやうが無かつたらうよ。ヤ「左様でございます。お軽も身請されました所が、年明といふものは借金が多くて、丸の裸で出ますさうだから、せつなうございましたらう。女房「さうサ、それに急なことではあるしの、併し由良之助が如才ないから、内證で手當もしたらうのさ。ヤ「そして女郎になつても名が變らず、ヤハリお軽で居りましたネ。女房「その代りにお比丘尼になつてから名を更へたらうよ。ヤ「成程ネ、さうおつしやれば勘平は働きのない男でございます。女房「伴内がいくら能いか、マアわたしなら二ツどりは伴内さ。男が悪いといふけれど、苦みのある能い男さ。先づ第一忠臣でネ、旦那の身の上を案じて一力へ牒者になつて入り込むか、三段目では若狭之助の機嫌を取つて主人をかばふ。萬事抜目なく奉公を勤めて、仕舞は主人のために討死とやら十一段目で死んだが、勘平に比べては大忠臣さ。左様さネ、あなたも能くお覚えなすつてお出で遊ばすネ。女房「アイサ、それだからなんでも女さ。アノまあ琴責なんども、岩永はほんたうの役目を守つて景清が行方を詮議する

けれど、重忠は半半尺で役目を鹿末にするはな。琴だの胡弓三絃だのと、あんな優しい事をしてゐる。あれで間尺に合ふものかネエ。岩永がいふことが皆尤もさ。あれも岩永は女にびろつかねえから眞直だが、重忠は阿古屋に現をぬかして、あの琴を聞く顔を見な。さも〜涎が三尺ばかり下るやうだ。萬事女が毒だのう。ヤ「ハイ左様でございます。オホ、、、女房「それだから、おめえも亭主を持つたら油断をお仕でないよ。男といふものは小面の憎い。皆あの通りだ。ヤ「いかなこつてもあなた、アハ、、、左様だが私どもの旦那様は好男と申しても如何でございますが、御器量の好いに似合はぬお堅いお性でございます。お寄合參會がございまして、一番にお歸り遊ばすし、お弔ひや何角にも道寄りなしに、すいとお宿へお歸り遊ばして、今日は茶代が十二錢、お賽錢が七錢なんぞとお算へ遊ばして、お小遣が漸々三十二錢位で済みます。店の衆が、生姜だ生姜だと申しますが、生姜とは何の事でございますか。大方御實體なことでございませう。其の代りお友達づき合が悪いさうで、旦那が折々御異見でございます。モチつと若い者らしくして、物見遊山にも出るが能い。どうも外嫌で困るとおつしやつてでございます。女房「お羨しいのう。わたしらが内なんぞは出好での、内には尻が居る間無しさ。わたしが異見めたことをいふと五月蠅がつて、ハテ奈何之町の湯豆腐も食つて見ねえぢやア行渡らねえの、膳を居るものをお辭儀は無駄だのと、能いやうな事を云つて出かけるのサ。アノもうお幫間だの神だのといふものが染々憎いよ。主がおとなしくせうと思はしつて

も、湯の行返や髪結床あたりにはぶらついて居て勤め出すだ。マア初めは料理茶屋で、それから一つあがるとお船かお駕籠さ。ホンニ〜おめえの所の旦那を煎じてあげたいよ。オ、長談して骸が乾くのも忘れたト留桶を浴びる。ヤす「私が汲んで上げませうト小桶へ三杯汲んで来て、留桶の中へあける。女房「これはお憚り、頂きますよ。サアお這入りな。ヤす「ハイ〜、まアあなたお先へ、ト風呂へ入る。●「おかみさんどうしなすつた。おめえの内ぢやア皆お達者か●「アイサ、捨てる神あれば助ける神ありとやらで、内で亡つても、どうやら斯やら食べ續いて居ります。▲「それやア仕合だのう。聞きなせえ、おらが所はのや、ぢい様がどうど床に着いて十死一生だはな。はじめの内は今流行る中風といふ鹽梅だつけが、のや、サアおめえ、此の頃は立居もひとり出來ねえから、尿管もおまるでとる。イヤハヤ粉になるよ。●「オヤオヤ、それはほんに能く〜の大病だネ。▲「それで一倍我儘を云つて、やかましくてならねえ。●「此かみさまつまらぬ所へ、夫でもおめえ、泣く子と地藏にやア、かなはねえといふから、病人のいひなり三寶にして上げなせえ。一寸延びれば尋延びるとやらで、寒さの内を凌いだら、また能からうヨ。案じるより産むが易いと、思ひの外にすら〜と治ることもあるからの、一寸先は闇だはな。是が斯と煮て固めたことはねえ、蟻の思も天に届くとやらでの、一心に介抱すれば又能い日の照ることが無くつてさ。兎角神佛を信心しなせえ。鯛の首も信心がらで、聞きなせえ、斯ういふことがあるはな。私等が親方の出入場の旦那どのさ、三ツ子の魂

百までと譬の通り、小さな時分から氣儘八百に育てたものだから、大きくなつても盲ら蛇物に畏ぢずだ。何がおめえ、身上も構はずに遣つた程にの、地獄の沙汰も金次第で、人に持長じられるが面白さに、たうとう大身代をつぶして、百貫のかたに笠一蓋となつただ。サアさうした擧句が悪い病ひを病み出して、二進も三沈も行かねえはサ。兄弟他人の始りとは能く云つたもんで、大勢兄弟衆もあるけれど、馬の耳に風で、さつぱり音信不通。サアどうも仕方がねえから、寶は身の指合せだと、残つた道具諸式を賣つては藥、賣つては藥とした所が、三年越の長煩だから、仕覺がねえと思ひなせえ。子を捨てる藪はあるが、身を捨てる藪はねえとやらで、たつた一人の女の子を他所へ呉れて、夫婦兩口となつた。流石御新造も惜しかつたらうが、負つた子より抱いた亭主だはさ。背に腹は換られねえから、其の子を遣つてしまつて、しつめもしねえ人仕事をして主を看病したよ。其昔は一寸出るにも乗物で、眷族の五六人も引連れて出たお人が、味噌漉を持つて豆腐を買ひに行つたり、朝晩の介抱から口食物、縫針の餘計に人仕事だ。あだやおろかの事ではないによ。サアその御新造の一心で淺草の觀音様へ朝参りの日参をして、一年が間、精進潔齋したらば、こはい物だの、夫ほどの大病が漸うに能くなつて、此頃はすつぺり素の通りさ。それだから、一心に凝り固まるといふものは強いもんだの。おめえの所も随分信心して看病しなせえ。貴い寺は門からといふけれど、醫者様ばかりは見かけによらぬものよ。裏店に居る貧乏醫者に巧者なお人があるものさ。藥紙を袂へ入れて自身に持運びをし

てくれて、第一ア手が懸らねえで、貧乏人には能い利方だ。アノまア薬取りに半日づゝかゝるのは、人少な者は難義仕果てるよのう ▲「さうさ、お医者様も今度で九人目だ。今度のお医者さまは、アノそれ、豕右衛門さん、のや、あの人がよいゝがゝつて、一しきりぶらゝしたのを治さしつたツて、巧者な噂だからかけて見たが、タツタ一返お駕籠でござつたが、夫からは一日置に代脈だはな。●  
 「フウ、医者様の方ぢやア、代脈でも承知だらうが、素人の目からは安堵しねえものよ。▲「その筈さ、お医者様ばかりが便だものを、のや、夫に又かてて加へて妹のお糠が屋敷から病氣で下る。息子は息子で便毒を踏み出して、うんすんと寝てゐる。此頃は生憎に商が隙でのや、小遣ひにも追はれ切るはな。高きは云はれねえが、質八を置いて暮らしてゐる所だ。その上でのや、姉娘のお粕は片付いた先から、出るの引くのとやつさもつさが發つて、家内中こねつ返すはな。年老つて能い耳を聞かねえで、ホンニゝゝ長生すれやア恥多しと、よく云つたものなのや、おかみさん、それでお粕にいふことさ。我が好このんで持つた男だから、此の後まごつかねえやうに分別して、どうとも好きにするが能いと、親の持たせた男を嫌つて、手前細工の亭主だから、どうでろくそつぼうな事はねえ筈だ。わが目の覺めやうが遅いと云ふことさ。違えあるめえのや、おかみさん ●「さうさ、あの子も大不出來しさ。女賢くして牛を何とかやらで、女の利口は役に立たねえ ▲「惣體情のこはいから發るはな。ホンニゝゝ何で苦勞するかと思へば皆子故だによ。世間の親は子を持つて樂をするに、大きな反對だ。

こちとは樂はせずといゝから、切めて苦勞の薄らぐやうにしてえ。それより外に願ひはねえ。此中もお寺さまが大概若經建立するから志を附けると頼まつしやる。わたしらがお寺様は、つひしか勸化事をさしつたことがねえから、澤山奉納しても能いけれど、自由にならねえもんだのや。それにおめえ、田舎からは居候が来る。日掛の錢は毎日金毘羅様、成田様、江の島、大山、鹿島講、御湯花講、何や角やで壹貳三百の出入だ。生やさしい事ぢやアねえよ。どうしたら樂になるだらうか、のやおかみさん。ア南無阿彌陀佛 引きちがへて、太つてうの下女一人、柘榴口よ 「オ、あぶねえ。ヤレゝゝ痛かつたらう 友達の  
 「オツトあぶなし。お開張南無阿彌陀佛 しゃれ所ぢやアねえはな。ア、痛えといひながら、顔を眞赤にしなとる  
 ▲「オヤゝゝ轉んでも只起きねえとはおめえの事だの ▲「さうさ、チツト違ふよ トまけ惜みにて、湯  
 ゆくみの男「湯をのろりゝと 汲んでゐる  
 ■「きりゝゝ汲みな、日が短いよ。何日だと思ふ、十月の中の十日だぜ  
 ゆくみ「なんだ氣のきかねえ、湯屋へ来てゐるやうな古風なことがあるもんか、乙姫時代のことだ。ト此湯汲、珍しいことには、江戸ツ子の氣の利いた奴なり  
 ■「能いよ、打遣つておきや。其の隙に流板を砂で磨くが能い。いけ無性な  
 ゆくみ「ハイゝゝ畏りました ■「ナンノ、それほど平坐をかいて居ながら ゆくみ「そんなら平坐かきました。おれは平坐かきましただが、おめえは寝轉ばりましただの ■「やかましい ゆくみ「しかし能い音だつけ、すつしりと地響がして、格別なもんだ。お蔭で居眠の目が寤めた。どうぞ翌も眠つてえ時分に、ナソレちよいと湯屋轉び寝起さ ■「エ、しやれすと早く汲まねえか、じれつてえト小桶をさげ お丸ど

ん髪を結つたの、とんだ能い、おめえか ●「ウンニヤ、おかみさん」道理だ、別に女ぶりが上ツた ●「なアんのかのと、ヘンよくいふもんさ」ほんとうにヨ ●「コウおめえン所のおかみさんも、お髪はお上手だの ●「なんの、しやらツくせえ、お髪だの、へつたくれのと、そんな遊ばせ詞は見ツとむねえ、ひらつたく髪と云ひなナ。おらアきつい嫌だア。奉公だから云ふ儘になつて、お前さま、お持佛さま、左様然者を云つて居るけれど、貧乏世帯を持つちやア、入らねえ詞だ。せめて湯へでも来た時は、持前の詞をつかはねえぢやア、気が竭きらアナ ●「そんならうぬが所のか、アめは、髪を引束ねやアがることが上手だナ ●「オイ、上手だがどうした。うぬが所の旦那めは、今おらが内へ來やアがつて、おらが親玉めと一緒に酒を食つて居やアがるが、まだ滅多に任舞やアがらねえから、か、アめに預けて置いて、おれ一人で湯へ來やアがつたら、いつの間にか、うぬも來て居やアがる。そつちらを向きやアがれ、背中をひつこすつてやらうから、跡でおれが背中も引ツこすりやアがれ。うぬ又痛く引ツこすりやアがんな、ア、息が切れた、オ、せつねえ ●「待ちやアがれ、うぬがいくら引ツこすらうとぬかしやアがつても、おらア垢摺を落したから、うぬが垢摺でおれが背中を引ツこすりやアがれ。湯が熱くば水をうめやアがつて、うぬ又江りやアがらねえやうに、そろ／＼と流しやアがれ。オ、息が切れた。オ、大義だ ●「是ぢやア喧嘩をするやうだ。ア、是でさつぱりした。モウ／＼／＼内に居ると、あなたどう遊ばせ、斯遊ばせで、恐れぬかせるのう。しみ眞實否だ ●「さうさのう、

コウおべかどん、おめえの笄はモウついで來たか ●「ウンニヤまだ。コウ先刻油をとられたのは何だ ●「戸張をしたら大首先を張り曲げたといふ小言さ。解物をする時、襟かたを引裂いた事と、火熨斗摺を出來したことが、小言の度に出るだ ●「おらが内ぢやア、南京の鉢を割つたことが、いつの小言にも附祭だ。うるせえのう。思ひ切のわるい、小言を並べたつて、割れた鉢が歸る物ぢやアねえ。おらが所の悪婆は、ホンニ／＼いび／＼小言の本家だらうぞ。此間三馬が作で、早變り胸のからくりといふをかしい繪本が出たが、その中にある姑婆の口眞似は、あの婆に正だよ。ソシテおめえ達や、おいらが事も書いてある。何でも其處へ出たやうだ。今年中でのをかしい本だと云つて、店の衆はてん／＼に一冊づゝ持つて居るよ。借りて見な、をかしくてこてえられねえよ。 ●「ム、あれか、見た／＼。此られた小藏が直に番頭に變つたり、嫁が姑になつたり、しかも豊國が繪で、あの繪はよく書いたのう。見てゐるうちに吹き出すのう。そして直が安いから年玉に能いとつて、おらが所ぢやア、いかいこと買ったよ ●「こんな事をいつて、又繪本にでも書かれねえうちに止めよう。サアお丸どん這入らねえか ●「ム、這入らうト續いて入 此所にて嫁姑をそしる事、嫁をいぢめる姑のこと、主人をそしる下女のこと、早がは珍しき嫁姑の臺詞は追つて 東西 三十四五の乳母、四歳ばかりの唐子監の子を、留桶の中へ入れおき、 子もり 「お乳母どん、その跡三編にお目にかけます だましながら月代をそつてゐる。かたはら十三四の子守女 口上 はり胸のからくりと申す小冊にくはしく記したるゆゑこの草紙には省く、な でわつちの襟を剃つておくれナ ち 「ヘンあきれらア、襟や顔を剃りつけるよりは、小鬢先の兀ツちやうでも治すが能い。廣島藥罐の口をもいだといふ額だ。髪といへば赤く縮れて油揚と一緒に煮さう

なごまで、なんの洒落臭え、おきにするがい、子もり「コウ御乳母どん、剃らずは剃らねえで済むはナ。なにもそんなに棚卸をするには及ばねえヨ。わつちが天窓が昆布に油揚なら、雲脂の溜ったおめえの天窓は、鼠尾藻の白和だ。成程あなた様はお美しい。ト解をつきたし、子もり「チツト違ふよ、子もり「道理で人並とはチツト違ふのさ。鼻が仰向いて二階がきなツ臭いといふ、齒は返齒で縁の下を覗かうとする、口はかゝつ居て鐵棒曳いても、耳は遠い、子もり「此の女め、覚えてゐる、子もり「覚えて居ねえで。そんなら何故おれがことを悪く云つた、子もり「悪いから正直をいふのよ、子もり「こつちも其の通りさ、子もり「まだ負けねえか、口ばたきめ、子もり「おれが口ばたきなら、そつちは尻ばたきだ、子もり「ナニ風ツたかりめ、子もり「狐臭ぶんくめ、子もり「おれがいつ狐臭がある、子もり「おれがいつ風がある、子もり「鍋屋薬を附けるぢやアねえか、目腐めが、子もり「茄子薬を附けたぢやアねえか、猿眼めエ、子もり「なに、此のぢぢむさ女め、子もり「エ、おしやらく御乳母めいけもしねえ、子もり「また泣えようと思つて、ネエお嬢さん、あんな筈棒には構はねえが能い子。お嬢さん、ぢつとしてお出で、ソリヤぞりくくく、こもりくちまお嬢さんぢつとしてお出でツ。さまア、ソリヤじよりくくく、子もり「やかましい。邪魔になるは。うぬに構ふと肝癢がつつぱりけえるはい。じれつてえ、子もり「そつちの肝癢は三年もこてえるは。お嬢さんお嬢さん。ぢつとしてお出ででないよ。つむりをかぶりくくくしてお動き。さうするとお前さんのおつむりを思ふさま痛々にして、御乳母が大きくじりだ。ア、能い氣味だ。早くふりま

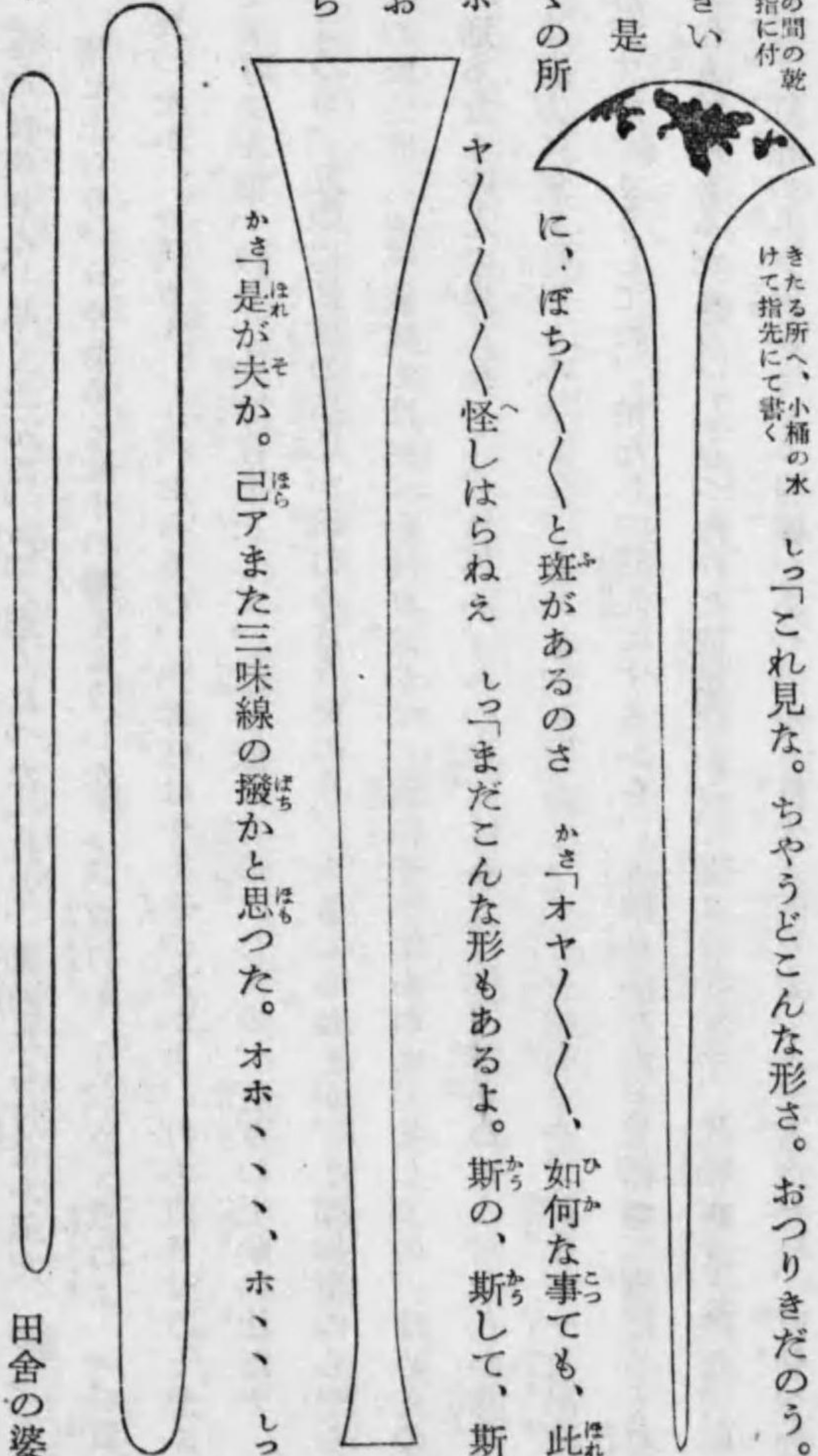
はしてお動き、子もり「いやくだねえ。天々をお動かしたと、ぞりくくが剃れませんネ。剃々を剃つて能いお姉さんになつて、おツかささんに譽められませう。ソリヤお後の方をチヨイト一剃刀、オヤ能い子におなりだはえ、子もり「オヤ、ばゞツ子にお爲りだはえ、子もり「やかましい。是ほど能い子におなりだものを、ネエお嬢さん、大方今日は神様へ連れてお出でだらうぞ、子もり「ばゞア痛え。モウ御仕舞にせうよ、子もり「ハイ、最うちいッとでございますよ。オ、く、是く、毛蟲がたかつてサ。今ばゞアが毛蟲をぞりくくと取つて、ネエ、オヤくにくい毛蟲だねえ。オ、オ、ばゞつちい、エ、きたなエ、穢な。ホイ、また毛蟲が、子もり「お嬢さん嘘でございますよ。毛蟲ではないよ。最否くとお云ひ、子もり「また口を出すか、是程長くお剃りだものを、ネエお嬢さん、この御褒美には常人形に、何でも四文の人形か、子もり「ムウ、番太のよ、子もり「番太の炭團かえ、子もり「アイ、子もり「お嬢さんは直だから、アイとお云ひだ。ナニ炭團な物かネエ。番太で見た達磨に乗居るお小僧だねえ。上げませうとも。ソリヤ最うきよ剃だから、そろくとおさすりばかり、子もり「がりくと痛いねえ、子もり「ナアニ、ばゞアの剃るのは痛くないねえ。サア能いぞく。ア、奇麗におなりだ。能いお子だぞ、子もり「穢なくおなりだ、ばゞツ子だぞ。お嬢さんばゞツ子だね、子もり「ウンい、子だ。ばゞツ子ぢやアねえ。坊は能い子、愚太さんはばゞツ子だ。のう乳母、子もり「左様く、子もり「イ、エ、愚太さんは能い子、お嬢さんはばゞツ子、ウウさうぢやアねえ、子もり「また世話をやかせ申すよ。ホンニ、片時だまつちやアわねえ。



るにかゝつてゐるから、今年ことしは絹袖けんそでにしたら、いつそ丈夫でいよ。おめえの所ところの不我ふがはら八はちさんにも、さうして着せなせえ。かき「それやアほんによからうよ。しつ「コウお瘡かささん、つかねえこつたが、先刻さきごときの簪かんざしの事で思ひ出したがの、惣別さうべつ昔むかしの形かたちが流行はやりるによつて、笄かんざしもおツつけ昔形むかしがたといふものが流行はやりるだらうといつて、小間物屋こまものやが形かたちを見せたよ。これやア、マア、おれが書くのだから能くはねえがの、形かたちばかりさト板の間の靴を指に付。しつ「これ見な。ちやうどこんな形さ。おつりきだのう。モツト長い大きいのもあるとヨ。是は鼈甲べつこふさ。こゝの所が昔むかしの笄ほうがい。ホして、斯かしさ、おつだのう。へらのやうだのう。

「まだこんなのも、こんなのもあるとさ。

に、ぼちくくと斑あまがあるのさ。かき「オヤくくく、如何いかな事ことでも、此これヤくくく怪あやしはらねえ。しつ「まだこんな形もあるよ。斯かしの、斯かしして、斯かしかき「是これが夫そか。己おれアまた三味線さんまいせんの撥はちかと思おもつた。オホ、ホ、ホ、しつ



田舎の婆

此笄之圖は貞享四年印本  
 女用訓蒙圖彙にあり  
 今文化七年迄百二十四年に及ぶ

アさまが挿さしさうだのう。かき「ほんにのう。古風こふうなもんだ。新形しんがたをしつくしたから、また昔むかしへ歸かえつておツつけ此この様ような笄ほうがいが流行はやりるだらうよ。しつ「アハ、ホ、ト指ゆびでかきまはして、消けしてしまふ。かき「はかりの島田しまだくづしにして、浴衣ゆいをかへ入い来きり、二人の女に向ひ。「オヤくくお出いででなせえしたか、大分だいぶお靜しずでござえしたネ。二人「此この間まは暫しばくお目めにかゝりません。御機嫌ごきげんようございますか。かき「アイサもう、何なんだかいろく目出めで度たい事が重おもつてね、まア聞いておくんなせえし、大隱居おほいんきよの夫婦ふうふが百五ひゃくごつと百三ひゃくさんつになり、又改まためてお祝いわいひさ。かき「それはお目出めでたうございますね。かき「それから中の隱居いんきよが八十八やっぴちの米こめの守まもりを出いしますネ。かき「それはお目出めでたうございます。かき「それから聞きなせえし、次の隱居いんきよは七十しちじゅうの賀が▲「それはおめでたう。●「そのつれ合あひは六十一むそいちの本卦ほんけがへり▲「重おもねくお目出めでたう。●「その妹いもうとが六十むそじゅうの賀が▲「借かもくおめでたい。●「わたしの宿やどが五十いその賀が▲「やれもくおめでたい。●「惣領そうりやうの孫まごが七ななつの祝いわいひ▲「やれさて、それはおめでたい。●「次男つぎなんの孫まごは五ごつの祝いわいひ▲「さてくこれはおめでたい。●「末子すえこの孫まごは三さんつの祝いわいひ▲「さて又またそれもおめでたい。●「重おもねくおめでたさを、これから拍子ひょうしでやつてくりよ。▲「やれこれ拍子ひょうしでたんのむぞい。●「髮かみ置おき、袴はかま着き、帶おび解とけ、元服げんぷく、嫁取よめとり、鞆取たんとりさて誕生たんじやう▲「めでたいく、さつても目出めでたい、こりや又またたらに目出めでたいな。●「七珍しちちん萬寶まんぼうしつかり詰つめたる土藏どざうの數かず々と十じゅう千萬まんげん軒げん▲「さつても目出めでたい、しつかり詰つめたる目出めでたい數かずが十じゅう千せん目出めでたいと、口に餘あま

りし目出たさを、めでたき春の笑ひ初に、目出度述ぶるぞ愛たかりける。

二編 終

三編

自序

丹前風呂の風流は古に廢れども、浮世風呂の滑稽は今行るゝお蔭にて、今年も毫をとりがなく吾輩の關東べい、べいべい詞が書けべいなら、借りても三編つん出すべい、と書林の欲心増長して需むる事頻なり。オット承知の幕湯に浴る、趣向有馬の温泉はしらす、三寸週圍の胸の中、九尺四方の風呂の裡、筆おつ取りてかき廻すとも、工夫の出づべき筈もなし。假令楊雄が方言を聞記じ、半二が隠語を鵜呑にするとも、諸國へ見する諸國の言語、うかめだての謬誤だらけが、便ち一興の端ともなるべし。江戸の奶々が唇紅兀して礫野郎とは似氣なき惡態、京の老爺の鼻鳴呼めかして、あのおしやんす事はいな、と弱氣た言もそらかぞふ大阪の壯夫が、何ぢやいとけつかる迄、書き古したる蹟なれば、こゝらで留湯と固辭すれど、宥す氣色もない智慧を、絞り出したる糠袋、四文と出たがる安作者が十文の湯氣にあがりて、讒言を吐く事しかり。

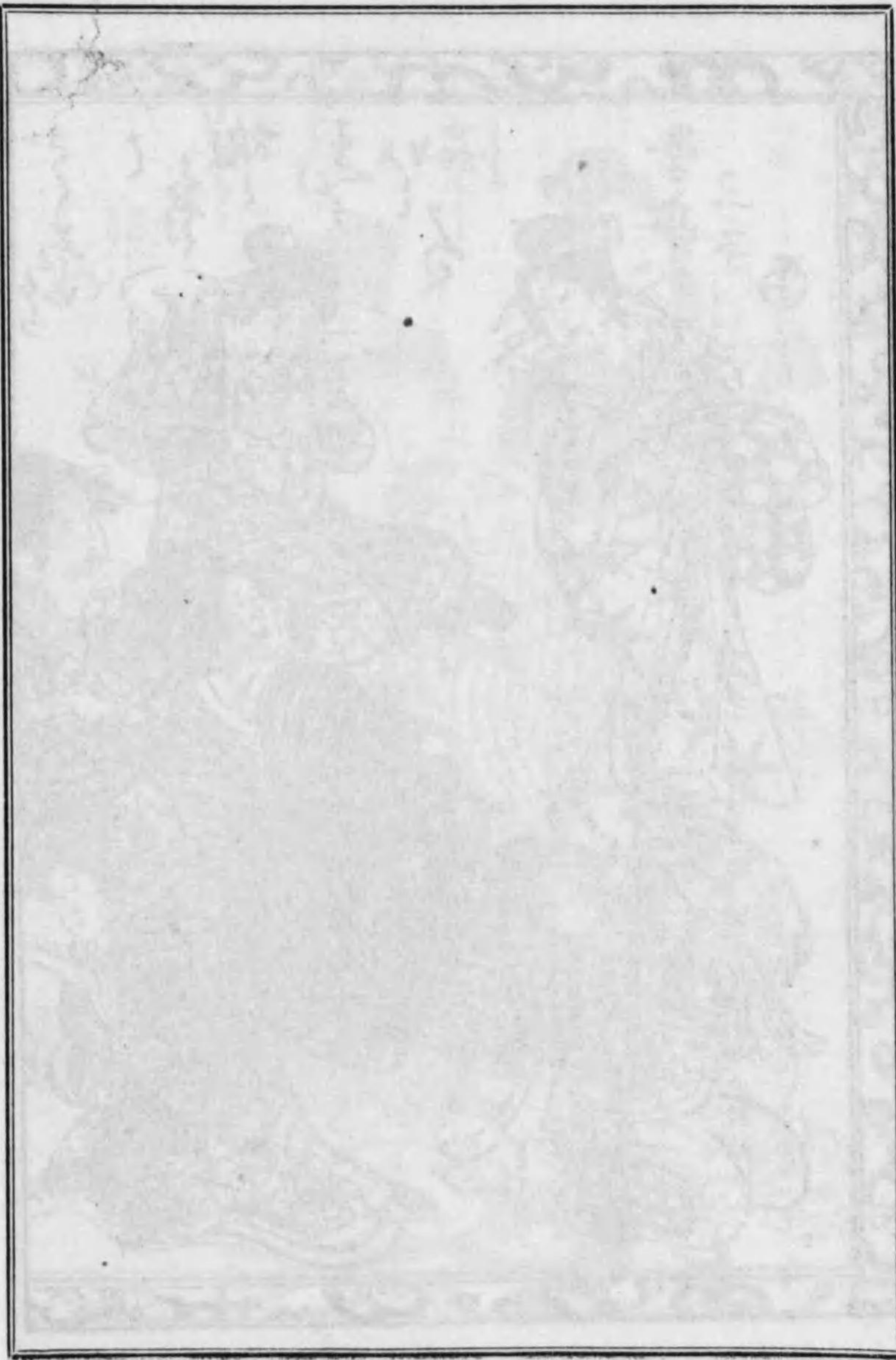
文化八年辛未の夏四月本町延壽丹藥店において

式亭三馬戲題









三編卷之上

女中湯之遺漏

春は曙、やうく白くなりゆく洗粉に、ふる年の顔を洗ふ初湯の煙けぶり、細くたなびきたる女湯をんなのゆの有様、いかで見ん物とて、松の内早仕舞ちふ札かけたる格子のもとにイみ、障子さうしの隙ひまよりかいま見るに、その様をかしくもあり、又己が身のぶざめいたるは、あさましくもありけり。(をみな湯、ぶざめいたる、など、さるたぐひの古言は、御國みくに學びの大人うらし達も未だ知らせ給はざるべし) 白き物は初湯の三方とかいふも、ものはづけとやらんも宜なり。御祝儀の十二銅、男衆への水引包は、二つの三方にうづ高くして、雪消えぬ不盡と筑波山をあらそへりそもくこ、には神代の有様をやらうつしたりけむ注連縄引きたせる柘榴口の後は、榊葉ならぬ松真木もて、風呂焚く男の庭火燃すありて、湯汲場の天岩戸をさと開きてより、常關にまがへる朝湯の湯氣はや、はれわたり、人々の面白やといふ頃ほひ、髪のかざしも少しうすめの命めきたる女の、指の爪に糸道と、物の残れるは、世にいふ舞子白拍子のたぐひとおぼし。彼の太政入道殿の世にめでたくおはさば、あそびの者の推参は尋常の事に候、などいちらて見参申すべき難者にこそ

●豊猫といふ十八九のぼつとりもの、看板に偽なしの浮世にて、オツトきなさいのとびあがりなるべし。顔をいびつにそ うた「お客の嘘はむけて下目をつかひ、指二本で左の耳をひつぱり、指すりて耳のわきを洗ひながら小聲にて、上方下りの流行歌」

引かして女房ぢやうぼうにしよ、女郎衆ぢやうじゆうの嘘は惚おぼれました、藝者げいしやの嘘は客とらぬ、幫間たゐこの嘘は酔よひました、茶屋の嘘は遅おそてもお早うござりますツ 今一人は、おはねといふ廿一二のやせつぼち、目をねぶりに額に八の字を現はし、口を結びて鼻入来る。この名「オヤおはねさん、お早いのはね」婆文字はなもじさんか、今朝は早かつたのう 豊ねこ「婆文字はなもじさ

ん、私わたくしにもお詞ことばがありさうなもんだネ。さうするがいゝのさ。ば「此の子は恨うらみッぽい事をいふぜ。まだ此方こちの挨拶あいさつも切れねえうちに。ね「フウ、さうか。ば「ハイ豊猫とよねこさん、明けまして結構けいこうな春でございます。ね「是はお早々はやとねつからお忝かたじけ。ば「トキニ舊冬きゅうとうお仕舞しまひはいかゞツ。は「オヤきさだのう、コウ、婆文字ばもんじさん、おめえに逢あつたら咄はなさうと思おもつてゐた。ば「なんだ、マア待ちな。寒いさむいはな。ちよつと温あたたつて聞きかう。オ、寒さむい、ト柘榴つげり口くちへ遣や入り、からだをしめしな。作者さくしや曰い、二編にへん女中湯にゅうちゆうとうの發端はつたんも此群こゝろも同じおなたぐひを出いせるは趣向しゆきやう珍めづしからねど、すべて女中湯にゅうちゆうとうの朝あの間まは、町殿ちやうてん舎やか、料理家りやうりやの娘むすめ、ば「はの字あ、何なんの咄はなだ。は「ああ、或あるは鹿懸かなどの多く入湯いりとうするゆゑ、止とむことを得えず、古ふるきを用もちひて趣向しゆきやうは新あらたしきを述べたり。ば「はの字あ、何なんの咄はなだ。は「ああ、の、先ま「昨日きのうの晩ばんの、オヤ、先ま「昨日きのうと云いちやア最もう去年こぞだのう。去年こぞと云いふと、とんだ久ひさしい様ようだが、大卅日おほみそかと元日げんじつと夜よが明あけた計はつた、去年こぞもをかしいぢやアねえか。ば「なんだなおめえの咄はなは、いつでもくだらねえ事こと計はつた。肝心かんしんの用向もちやうはいはずに、去年こぞの講釋かうせきか、エ、じれつてえ、夫おれがどうしたな。は「うんにやよ、暮くれの廿九日にじゅうくにち大雪おほゆきの降ふつた晩ばんにの、とつちり者もので工左衛門くざゑもんが來きたはな。ば「何處どこへ。は「物川ものがわへさ。ば「フム。ね「工左衛門くざゑもんとは役者やくしやの様ような名なだのう。は「さうよ、大阪者おほさかもので浪花ななわさんといふ表徳へうとくさ。その人の形かたちが工左衛門くざゑもんの善六ぜんろくに生寫いきやうしだとして、婆ばの字あが譚名だんなを號なづけたのよ。ね「フム、さうか。は「おめえを呼びに遣やつたら、桃林たうりんだと聞いて例れいの小言せうごんさ。いま、しいがきぢや。あないな、ごくどう奴めは無い。わしが呼よぶたびに、うせをらぬ。へげたれめが。ば「オヤ正ただだは。おめえの上方詞かみかたことばは浪花ななわさんが出いたやうだ。大方おほほう悪口あくぐちを腹はらさんざ云いつた跡あとが、駄味だみ噲その拳けんだらう。ホン

ニ見る様ようだ。は「拳けんがきつい鹽屋しほや（已惚おぼのこと）さ。オヤ又また忘われたは、肝心かんしんの用もちを云いふのだつけ。ば「それ見みな、いはねえ事ことか。は「夫おれだつても口數くちかずが多いから、竟つひおそくなるのだはな。あの、正月しょうげつはお屋敷おやしきのお禮れいを三日さんじつまでに仕舞しまふから、五日ごじつの日ひには舟ふねで妙義めうぎ様さまへ參まゐらうと云いひなすつたよ。其事ことをおめえに忘われずに云いつて置いて呉くれれツサ。大體たいたい間違まちがはねえけれども、約束やくそくも大騒たいさうらしいから心待こころまちにして居ゐなと云いひなすつた。其代そのしろりに恨うらみツこいのねえやうに、おめえとおれと、ねの字あと、豊家とよやさんと、黒文字くろもじさんと、斯か五人ごにん連れて行く筈はずだ。ば「フウ嬉しいのう。初はつ々としく能よからう。しかし酒さけが恐おそれるのう。は「その代しろりに氣きが張はらず、三味線さんまいせんなしの心こゝろやす立たて能よいはな。ね「浪花ななわさんは、いつか太鼓たいこ庵あんで隣座敷りんざしきに居ゐたお方かただの。は「さうさ、氣きさくでわかつて居ゐるから妙めうさ。ば「よつほど灰汁あかじのぬけた人ひとだから、氣きめえが能よいよ「二本目にほんめエには庭にわの松まつ」ぢやアねえはな。ね「あのモウ、松まつづくしを唄うたふ上方者かみかたものならお里さとが知しれるはな。ば「あれと伊勢音頭いせおんがしらが上方者かみかたものの押物おしものだよ。シカシ拳けんは強つよいのう。自慢ひまするも無理むりぢやアねえ。夫おれだから他ほかの拳けんを見みるとの、的てきさんの。○ヤ拳けんぢや、ありや益やくだ、ぬ○や拳けんヤ。○で拳けん殿どんは、あほらしうて對手あひてになられんはい。なんぞと三下さんしたに見みてゐるはな。ね「○や拳けん。○で拳けんとは何なんの事ことだの。ば「六むや、五ごや、と、やの字あを付けるのが「や」拳けんさ。三さんで、七しちで、九くで、と、どの字あを付けていふのが「で」拳けんだツサ。ね「そんなら何なんといふのだらう。は「おめえや、おいらのは、皆みな其そのの連中れんちゆうだ。夫おれだから勝兵衛かつべゑさんの拳けんを見みな、「で」も「や」もねえは。ば「マア大概たいがい

な人はその組さ は鳥そしておいらが九かいしゆといふと笑ひなさるが、眞ほんとうの拳こぶしと云ふ物は一二三四五六七八九といふものだツサ。五ごだの七ちだのといふは大すかまたさ ね「無手むてと十とは打つもんぢやアねえと、おとつさんが教おしやなすつたが、おいらが様なへば拳こぶしさまぢやアはじまらねえのう、一いち一いち三さん四五ご六ろく七八はち九くと打つのはどういふもんだ ば「ありア古風こふうさ。一本をいつこう、一いつけん、といふは悪いツサ。拳こぶしの詞ことばの外ほかに、五ごツ六ろくツと常つねの數かずでいふのはかまはねえさうさ は「なんの道みちにも理窟りくつがあるのう、面倒めんどうらしい。兩方りやうほうから指いびを出だして數かずが當あつたら勝かちで能あたさうな物ものだ ば「さうだが、あんまり負まけると腹はらが立たつよ。お客おきゃくでも構かまはねえ。口惜くわしくなつて來きるは は「おめえは意地いぢが張は居つるからどうでも上手うでだ ば「なんだな、譽ほめるのか、悪わるくいふのか分わらねえ。浪花なげなさんも奇麗きれいな拳こぶしぢやアねえ。聲こゑが早はやいに手ては出だし切りで、指先いびさきをおつにごまかすはな は「オ、寒さむくなつた。ねの字じ、這へ入いらうぢやアねえか ね「サア這い入いらう ト柵欄さくらん口くちへ ば「おめえ達たちが這い入いるなら、おいら出でよう は「オヤしよにんな子こだの ば「夫それでも逆さか上さるはな。初春しよしゆん早はや々々ゆだるも智惠ちゑがねえ ね「ゆでたき春はるの御壽ごしよきぢやアねえかツ ば「へん、宜敷よろ申ましておくれ、能あたい口くちだの は「おいらア風かぜを引ひ居いて、今日けふが初湯はつゆだよ。夫それだから漸やつと禮れいに出でるはな ば「おいらア元日げんじつに出でた は「違ちがつたもんだの、チトお衣裳めしものを拜見らいけん致いたしたいネ ば「長持ながぢ七棹しちせう、簞笥たんすが四棹しよせうで、目移めうつりがしてならねえはな は「それやアさうと、彼かのに極きめたか ば「さうさ は「あれがおめえには似合にあふよ ば「帯おビもいつか中咄ちゆうぶつした通りさ

は「ム、あれやアよからう ば「ハイ御免ごめんなさい、出でます〜 ト云いひながら、柵欄さくらん口くちを出でて、 ば「そんならきつと五日ごにちだの は「ア、**作者曰**此ア、といへるは女の返詞也。勿論江戸 同に限り。以下推してしるべし。 ば「よし〜、又一日いちにちからかつて遊あそばう は「その代り口くちは悪いのう ば「毒々どくどくしく云いひなさるけれど、癩かな事ことはいはねえはな は「そこへかけちやア三徳さんとくさんだらうよ ね「わたしは初めての座敷ざしきの時とき、がうぎといぢめたはな。反吐へど鯨けい舎しゃだ、なんのかのと、ひどい事を云いつて、癩かにさはることだらけさ。それから居溜ゐたまらねえから下さらうと云いつたら、桃林たうりんの内うちでいふには、ナニあれやアあゝいふ癖くせで、氣きには何なんにもねえが、口くちに悪あくを持も居もつて居ゐる人ひとだと云いひなすつたが、段々だんだんつき合あつて見みれやア、今いまぢやア株かぶだと思おもふ所ところ爲なるか、耳みみに留とどまらねえ ば「なんの、あの爺ぢいさまは口計くちがかりさ。おいら常じやう不ふ斷だん喧嘩けんかをするはな。人をきざがらせて面白おもしろがるのだが、悪わるい洒落しやれさ。此中こんぢゆうもおれがことをの、ためえまア、百七ひゃくしちツの帶解おびとぎでも祝いわはうといふいけ年仕としツて、其そのの眉毛まゆげは何なんの眞似まねだ。些ちとは鏡かがみの手前てめえをも恥はぢたがい。其そのの眉毛まゆげは癩か疹しんに三度さんど、善光ぜんこう寺てら様さまのお開ひら帳ちやうにやア七度ななど半はんも引廻ひきまわつたらう。肌理きり皺じわの間まへ白粉おしろいが身みを投なげて、まじイリ、まじり、してゐることの、ヤレ橋詰はしづめで箔代はくしろ建立けんりつがあきれる、とんだばくれん尊そん者じやだ、なんぞと云いふのよ ね「憎にくいのう ば「こつちも負まけずに、アイサ、どうで婆ばああはあたりめえさ。夫それだから賀がの祝いわと一緒にいっしょに赤飯あかめしを配ひツて引込ひっこむ覺悟かくごだが、おまはんも入いらざる世話世話やき爺ぢいだネと云いつたら、口くちのへらねえ事ことを聞きな、客きやくが世話世話やき爺ぢいに、鯨けい舎しゃが百ひゃくなり婆ばあぢやア、昔々むかしあつたとさだ。道理道理で料理茶屋りやうりやも桃川ももがわだツサ、まあ呆おろれた口くちぢ

ヤアねえか はね「面の憎い人だのう ね「ア、暖まつた。モウ出よう ト跨ぐ所へ、外から入り来る婦人あり。これ  
つりきなる女、唐懸と見たは僻目にあらじ。口に水を一杯含みて、そつ ね「オ、つめてえ、誰だな、悪い事をする。オヤ  
と入り来り、黧ねこが腹のあたりへ、ふつと吹きかけ、笑つてゐる」  
お圍さんか、悔りしたはな。にくいよモウ、覚えてゐな か「オホ、、能いきび、。ちつとさう  
もござんやすまい。此中の遺趣返しだよ はね「お圍さんか、久しいものさ か「オヤおはねさんか、  
棒組お揃ひだね トいふうち、豊猫又水をふく来りて、おかこに吹きかけ、栢樋口にて平手でぶちあひ、  
黄色な髪を上げて、キイ、といつてどち狂ふ。婆文字はをか湯を浴びながら は「又初まつた。ホン  
ニ、能い氣ぜんだのう トいひながら風 呂へ入る おかこ「おはねさん、おめえ昨日は何故来なんだ、恨みな者だの  
う。あれほど約束したのに、昨日は、且那様が一日御入りだつたはな は「ほんにか、其の癖に昨  
日はうちに居たけれど、朝ツばらからふさいだ事があつて、寝て居たはな。やつと今日禮に出る位  
だから、是にて御推もじさ かこ「そんならお初を呼びに遣ればよかつたのう。惜しいことをした  
は「何さ、口ぢやアあ、云ふが、正はといへば邪魔になるのさ は「さうだらうよのう。おちん、  
で かこ「へん可愛さうにそりやねえよ。きのふは、酒孝さんと、雅文さんとわつちらが且と 且とは且  
那をしや  
詞れたる 三枚が何所で落つたか、おひやる手合（おひげのちりをとる人の事也）を四五人引連れて押  
しかけたといふもんだから、大酒となつてだり切つたはなり だりむくれの方言を、だりと略し、むくれと約めて通用するな  
だりむくれの方言世に弘まりて今は又へちむくりといふな  
最う昆布鱈に鱈の麴漬といふお定まりでもあるめえとかいつて、種々取寄せた舉句に、且の思ひ  
つきが能いぢやアねえか、去年の暮には年忘れをしたから、今日は目出度年覺をせう。斯又能い顔の

揃ふ事もねえ。何でも手々爾々に一番宛趣向して、穢細工の料理をせうと云ひ出すと、これやア妙だ  
 とか云つて、手々爾々に何處か行つて案じて來た所が、モウモウ穢くてたまらねえのよ は「いやだ  
 のう、ついぞねえ かこ「まづ雅文さんが新しい煙草盆を提げて出たから、ト見るとの、火入れの中へ  
 はむしり海老をこまアか（細）にして櫻灰と見せて、中にちよんぼりと火のいけてある形が、海老の  
 殻の赤い所さ。傍の灰吹の中が雲丹 は「エ、きたな かこ「夫から酒孝さんが買立の耳盥の中へ、  
 えまし麥に海苔のどろ、交つたのさ は「オヤ、、穢え。それやア小間物店に見立てたのか  
ね「さうだらうよ、いやだのう。聴いても胸がわるいよ かこ「さうすると且が新しいおまるをすつと  
 持つて出て、穢さうに蓋を撮んで傍へ置くと、其の中が汗澤山の鶏卵のふわ、さ は「エエいやだ  
 のう、行かねえで仕合。なぜそんな悪洒落を始めたもんだらう かこ「時々あんな事が始まるはな。器  
 はいづれ新しいから、奇麗な事は百も承知で居て、どうも食ふは否だ。其の外に五六番あつての、流  
 石に各位も否ださうで、冷めちやアいかねえ。最うお止め、と云つて、眞の料理になつたはな。  
 アハ、、。おめえ達も最うおあがりか は「ア、 かこ「最う一遍つき合つて遣入んな は「い  
 や、 かこ「しよにんな子だのう。  
此内婆文字はじめ三人とも、糠袋を水槽のわきであげ、よくす  
すいで絞り、皆々浴衣になりてあがり、着物を着かへて 三人「おかさんお静  
 に かこ「おさらばよ、後に必ずよ「アイヨ ト浴衣を抱へて駒下駄をはき、障  
子をあげながら番頭に向ひ は「久しくおゆかり屋のお文を見  
 ねえの ね「松葉熨斗の付いた初文が來たらう は「此の番頭さんは色男だよ。何を見る、見せな

ばんとう「それ御覽なさい。大卅日おほみそかの書出しかきだ。エへ、、、ト鼻の先へつき出し是だものを、いくぢはござい  
 ましねえ。ホンニ此頃このころは鍋鶴なべつるさんが久しくお見えなさんねえね。ぼ「ア、あの子は病氣びやうきだはな。お  
 めえ見舞みぶえに行つてやんな。ばんとう「ヤレ／＼それやアほんに、フウ、道理か久しくお見えなさらねえ。  
 私わしが見舞みぶえに行つたら直ちかに本復ほんふくさ。ハイさやうなら。三人「アイト出て行い。  
内は茶を出せり。さるたぐひの些細なる ● 年の頃十か十一ばかりの小娘、こましくくれたな お丸「お角さん、此間はお稽古が  
穿ちは、ものうしとてこゝに記さす りにて、二人着物を着ながら咄すを聞けば 作者曰すべて女中湯は常に茶を出す家あ  
りて、二人着物を着ながら咄すを聞けば 作者曰り。又常に出さぬ家にては、松の

お休やすみでよいねえ。お角「ア、おまへもかえ。わたしもね、お稽古のお休やすみが何よりも／＼最もう／＼／＼  
 不景氣ふけいきだねえ。もつと、いつウまでも松を取らずに置けばよいのに、何所の内でも直ちかさまお取りだね  
 え、否いやだつちやアないよ。角「ア、おまへはね、お正月がよいかね、あのウ、お雛様ひなさまがよいかエ。丸「ど  
 つちもよいよ。角「マアどつちか一ツお云ひな。丸「マアお前お云ひな。角「わたしも兩方りょうほうよいよ。丸「それ  
 お見。角「そんならね、お丸さん／＼、毬たまごと羽根はねではどつちがよいエ。丸「毬たまごと羽根はねでかえ。角「ア、  
 丸「どつちもよいがね、羽根はお天氣あまぎが悪いとつかねえから、毬たまごの方がよからうか。角「イ、エお天氣  
 が悪わるくてもね、私はお藏くらの前まえで突つくからよいよ。お藏くらの前まえはね、高たかアく家根いへねが拵こしらえてあるから。丸「わ  
 たしの所ところには藏くらはないものを。トいひながら懐から手 物をとり出し。これ御覽ごらん、お屋敷いやくのね、伯母おばさんの所ところからね、お年玉  
 にお呉くだよ。角「よくかどつたねえ、これは板毬いたたまごかエ。丸「いゝえ疊たたみの上うへで、よウくはづむよ。角「お前の

伯母おばさんは能あたい伯母おばさんだね。そしてお前のおツかさんも氣きがよいからよいがね。わたしのおツかさ  
 んはきついから、むせうとお叱ちりだよ。まアお聴ききな、朝あさむつくり起きると手習てなれんのお師しさんへ行いつて  
 お座まを出だして来て、夫おつから三味線さんみせんのお師しさんの所ところへ朝あさ稽古きこに参まつてね、内うちへ歸かえつて朝あさ飯いひをたべて、踊おど  
 の稽古きこからお手習てなれんへ廻まわつて、お八やちツに下さつてから湯ゆへ行いつて参まると、直ちかにお琴おんの御師おんし匠しやうさんへ行いつて、  
 夫おつから歸かえつて三味線さんみせんや踊おどのお浚あらいひさ。ト此内息をきらずにスウ／＼と云ひながら続け 其内そのうちに、ちイツとばかり遊あそんで  
 ね。日ひが暮くれると又また琴おんのおさらひさ。夫おつだからさつぱり遊あそぶ隙ひまがないから、否いやで／＼ならないはな。  
 わたしのおとつさんは、いつそ可愛かわいがつて氣きがよいからね、おつかさんが、さらへ／＼とお云いひだと、  
 何なにの、そんなにやかましくいふ事ことはない。あれが氣き儘ままにして置おいても、どうやら斯かやら覺おぼえるから、  
 打遣うちぢやつて置おくがい。御奉公ごほうこうに出いる爲ための稽古きこだから、些ちかと計はか覺おぼえれば能あたいとお云いひだけれどね、おツ  
 かさんはきついからね、なに稽古きこする位くらいなら、身みに染しみて覺おぼえねえちやア、役やくに立ちません。女おんなの子  
 は私わたしのうけ取とりだから、お前まへさんお構かまひなさいますな。あれが大きおほくなつた時とき、とうかいとやらを致いたし  
 ます。お前まへさんがそんな事ことをおつしやるから、あれが、わたしを馬鹿ばかにして、いふ事をこときまません。  
 なんのかのお云いひだよ、そしてね、おつかさんは幼おひさまい時ときからむしつとやらでね、字あざはさつぱりお知  
 りでないはな。あのネ、山やまだの海うみだのとある所ところの遠とほの方ほうでお産うれだから、お三絃さんげんや何角なにかくもお知しり  
 ないのさ。夫おつだから、せめてあれには藝ぎを仕込しこまねえちやアなりませんと、おツかさん一人ひとりで、じや

じゃばつてお出だよ。ア、ほんとうに丸ほんにかえ、わつちのおツかさんは何でも知つてお出だから、些でも三絃の弾様が違ふと直にお叱りだよ。わたしのおツかさんは、七の歳に、踊でお屋敷へお上りだと、それだからネ、地赤だの地白だの地黒だの紫縮緬の裾模様だの、惣模様だの大振袖だの、帯は黒天鷲絨のや、厚板のや、何角をお長持に入れて、たアんと持つてお下りだけれど、わたしのおとツさんが道楽だからネ、皆お亡しだとさ。ア、お婆さんがわたしにお話だよ。夫でね、お婆さんはおとツさんの事をどら殿と計お云ひでね。いつそお憎がりだよ。わたしは夫だから稽古はなんでもする筈だが、お婆さんのお云ひには、お丸は病身だから手習と三絃計で外の事はさせねえが能い。其代に女は縫物をよく覚えさせるが肝心だと、此間はネ、繼物を致すよ。お前もお仕か 角いゝえ丸わたしは此間もネ、人形の衣を二ツ縫ひました。アイ、アレノ、お角さんノ、ト耳へ口を密せて、中に流して居る女を横目で見ながら小聲で叫 アレ、あのをばさんを一寸お見。子が三人有りながら淺黄縮緬の裁をかけてさ 丸オヤほんにねえ、若い作りだね。あのアレ、ぐるり落到結居るおかみさんの頭を御覽か 角イ、エ 丸黒油で禿ツてうを隠してさ 角アレ小さな聲をお仕、聞えては悪いよお前 丸サア参らう。オヤお前の袂から何だか落ちました 角ホイト拾つ オヤノ、鬚結ひの裁だ 丸一粒鹿子かエ 角アア 丸麻の葉もよいねえ 角あれは半四郎鹿子と申すよ 丸私はね、おツかさんにねだつてね、あのウ路考茶をね不斷着に染めて貰ひました 角よいねえ、私はネ、今着て居る伊豫染を不斷着に致すよ 丸お前のも太織

かエ 角ア、是はネ、田舎から掛の抵當に取つたから安いとさ。ア、おとツさんがいつか中お云ひだトくぐりを明 丸お角さん後にお出でな、歌がるたを取つて遊びませう 角ア、参らう ト出て行 丸人柄の上きけながら 丸お角さん後にお出でな、歌がるたを取つて遊びませう 角ア、参らう ト出て行 丸人柄の上き水舟のわきにて小桶に水を汲みみる。これはそらながみにて、調づかひも遊ばせ盡しなり ●お袋さんお早う入らつしやいましたね 丸六十近き婆 ハイ是はしたり、どなたかと存じました。先づ明けましては結構な春でございます ●ハイあなたにもお揃ひ遊ばしまして御機嫌ようお出で遊ばし ●ハイお前さんにもお揃ひなすつて ●ハイ有難うございます。夫でも至極お皆變りますこともございません。ホンニお孫様が痘疹を遊ばしたさうでございますネ。夫でも至極お軽い御様子で、別してお愛たう ●ハイサお前さんネ、暮におし詰めて人手はございませずネ、大きに苦勞致しましたが、仕合と輕うございまして、ホンニノ御方便な物でございます。母親がお前御存じの通りネ、痲瘡が重うございましたから、どうかと存じましたが、案じるより産むが易いで、顔にはわざつと五粒ばかり、手足に漸々算へるばかりでございます。あれを思ひますれやア、神佛のお力もございませぬ。馬橋の萬満寺の仁王様のお草鞋をお借り申して、丁度三年になりましたが、其御利生でございませぬ ●それはホンニ有難い事でございますね。私も舊冬から一寸お見舞なからお歳暮にもあがりますのでございましたが、御存じでもございませうが、娘をお屋敷へ上げますので、何か世話ノしうございまして、存じながら御不沙汰致しました ●ホンニ左様だツサネ、おめでたうございます。お宿へお置きなされるとお心づかひだから、夫がようございます。タシカお十六か



ネ ●ハイ左様でございます ▲いえもう近所の若い衆が騒々しうございますから、何事も無い内に御奉公のことさネ。お屋敷はどなた様でございますエ ●ハイ、やはり私のお勤め申した旦那様へ上げました ▲それはホンニ御重縁で、別しておめでたうございます ●此まあお寒さは、どう致したものでございませうネ ▲左様さ、今年には餘寒が強うございまして。あのまア雪を御覽じましたな ●左様でございます。雪の所爲かして兎角病人が多うございますよ ▲左様さ、いつも寒明には、ちつとづゝ病ひ勝でございます。シタがお前さんはいつも御丈夫でようございます ●イエモウ是でも病身でございますがネ、本町二丁目の延壽丹と申す鍊薬を持薬にたべます所爲か、只今では持病も發りませず、至極達者になりました ▲ハイそれはお仕合せでございます。あの延壽丹は私の曾祖父の時分から名高い薬でございますのさ。あれは一丁目でございますましたツけ、私も暑寒にはたべますのさ ●ハイ只今は二丁目の式亭で賣ります ▲エ、何かネ、この頃流行る江戸の水とやら、白粉のよくなる薬を出す内でございますせう ●ハイ左様でございます。私どもの娘なども、江戸の水がよいと申して、化粧の度につけますのさ。なる程ネ、顔の腫物などもなほりまして、白粉のうつりが奇麗でようございます ▲私どものりんが田舎育だけに根から白粉がのりませんが、成程よくのります。嫁などもつけますがネ、翌の朝、顔を洗つた後で、ちよいと紙で拭ひますと、薄化粧でも致したやうに、昨日の白粉が出るさうでございます。種々な調法な事が出来ますよネエ ●ホンニあなたの女中衆は、

がせいに能く働きますネ。水ぎれの時にも擔桶で水がかつがれますが、さつ／＼と氣味のよい人でございませう。私どもあたりの三などと申しては、意氣地がなくて世話ばかりやけますな。それに此間は風だと申して臥つて居ります ▲それは御不自由でございます。女中衆と小僧の鹽梅の悪いのが一番わるうございます ●ハイサ夫にあなた、兎角お薬が嫌ひで、どうも成ません。随分臥つて居るも病なら致し方もございせんが、御膳をたべて、そして寝て居れと申しつけますが、替つたもので、何の奉公人も兎角さう致さぬものでございます ▲ハイ左様さ、奉公人根性とやらで、お飯をたべては寝て居にくい致して、どこのも左様さ。達者な身でも一かたけお飯をたべねえと氣色が悪くなりまして、ましてや病氣の時は、それだけに養生を致した方が能うございます。つまるところは面々の損といふ所に氣が付きませぬ ●イエモウいかい事人も使つて見ますが、使ふではございません、使はれるでございます ▲ホンニ去年まで居つたお三どの、至極柔和に見えましたツケ ●ハイあれは久しく年季に置きました、相應な縁がございましたから、かたづけして遣しました ▲それはよくなさいましたネ ●今度のは、がんさい者でこまり切ります。此ればあたけちらして物を毀します、だませばつき上りが致す。あのモウ顔付をするのと、ふて寝を致すのが第一にわるうございます ▲イ、エサ、私どものりんめが、やつぱり左様さ。大の差出もので、口をきけば手許がお留守になります。朝飯を仕舞つて、そこらを撫でまはすと、二階へ上つて髪に半日かゝります。お晝の支度を仕

やよといはぬ内は、物干へ出てばかりくむだ口をたゝいて居ります。毎日知れた事に世話をやかせて、泣いても笑つてもせねばならぬ事を骨惜をした物さネ。サアお前さん、水を汲候と申して井戸端へ出ると、ちよつと一手桶提げて来るのも漸一時かゝります。其筈でございますはな、お長家中の男衆を相手にどち狂ふ隙には、同じ女中達と寄湊つて内の事を諺はしりさ。此間も何をいふかと存じて雪隠の蔭で聴いて居つたら、先の主人を譽めちぎつてネ、ナンノ世界中が白壁造りだ、三月が来れヤアおさらばさ、お願い申しますと手をついても、こんな不吉な内に居るもんか。他人宿に雑用を拂つて、まごついて居るには増だから居てやるのだ、なんぞと太平樂さ。お前さん、ホンニく面の憎さくとしたことが、ネエマアさう申しますはな、立聽をすると三尺地の下の蟲が死ぬと申すが、いらざる罪を作りますのさ。●ハイサきけば聽腹で、つい一言もこゝとを申しますと、口三絃で、いけもしない鼻唄さ、お前さん、夫に又私共も直ではございませんが、薦の羽をひろげた様に髪を出して、あの貌へべたくとなすりますから、半襟は白粉に染つて地が分りませんはな。賤しいお話でございますが、十六錢や廿四錢の紅粉は二日か三日になめてしまひます。夫につけては元結油も鹿末に使ひますから、孔方の遣ひ方が荒うございます。▲イエモウ何方も同じことさ。着替もないくせに能い物好で、釜元を働くにもなけなし殿で、やつぱりおしやらくをしたがりますから、おのしは釜元を立廻る内は古い着物を着て、足袋も古いのと履替へやれと、毎日く口の酸くなるほど申すがきませ

ん。さうしては新しい足袋も、襦も濡臭つたので座敷をのさく踏んで歩きます。●其襦もネ、四尺裁つて貰つて二布に致せば、つい通りでよいのに、七尺も買つて三布に致すから、サア紐も裁端を集めて縫ふ氣はございません。佛地も松坂はいやだとか申して、廣棧を買ひますから、紐も茶鹿子の縮緬を幅廣に仕立て、大きな尻へ巻きつけます。何處の國にかお前さん、茶屋子屋の女中衆ではなし、商人家のお飯焚が、それでは濟みません。▲左様さ、ホンニ能く似たお話でございます。私どもの嫁が、湯具を縮緬の中幅を二布に致して、居るにも立つにもびらく致すから、貴様はあまり無様な人だト、女の湯具といふ物は白木綿二布に規した物で、膝から下へ下げる物ではない。上つ方の御奉公する女中衆を見さつしやい、羽二重だらうが絹だらうが、皆短く遊ばすネ。長ゆもじといふ物は下鄙た人のする業でござるツサ。女郎ですら好薬は昔の風を廢てず、萬事長しやかだから長湯具などいふ事はないといふ事だ。早々止めさつしやいと申して、異見致しましたが、それをも知りつゝ、りんの馬鹿めが、幾布に致した事やら、木綿の長湯具をちゃんとしめましたはな。●いかな事でも、オホ、、、●オホ、、、ホ、、、●あんまり呆れて叱るにも叱られません、アハ、、、ハ ●イエモウほんに呆れた物でございますよ。着物なども手まめに洗濯でも致して、夜なべに繼いで置けば、さばさばとした布子も着られますのに、穢れたらその儘に葛籠の隅へおし込んで置きますし、兎角針さへ持てば晝も居眠りますが、ホンニく仕様仕方のない物でございます。▲アハ、、、

ハ、ホンニ了簡のない物でございます ●最うあなたお上り遊ばしますか ▲ハイサ ●私も御一緒に参りませう ト着物を着て出行くあとへ、下女二人風呂の中より出て来り、をか湯をつかひみる折か



猿どん、今のを聞いたか 今一人おさる ▲ウ ちギリ／＼／＼ 下女おべか お

べる婆さんだの さる「さうさ婆は當然だが、金溜屋のおかみさんよ、人品の能い風をして居て、とんだ目口乾だの。遊ばせの、入らツしやいのと、たべつけねえ言語をしても、お里が知れらア。あれだから奉公人が居着かねえはな。マア試してみな、去年まで居たお三どんは、六十四文ばかり置いて来た人だから、久しく辛抱もしたらうが、あの後で幾人出たとおもふ。たつた十月ばかりの間に丁度五人かはつたぜ べか「どうせ又あの手の氣に入らうとすれば、直さま勞瘁だ さる「知れた事さ。何又あの家でも貰はうぢやアあんめえし、高が一年限で、ふい／＼と風任せの奉公だものを、同じ直ならば氣散に暮す方が徳さ。針を持たうと持つめえと、こつちの量見づくだ。縫物が出来ねえで打遣られた女もねえもんだはな。こちとらは、どうで着た限雀ときてゐるから、氣に入つた着物をさつ／＼と着殺すがい／＼のさ べか「その方がさつぱりして能いはな。見たがい／＼、てん／＼が奉公人を悪くいふから、又奉公人の方でも悪くいふ筈だア。差引いて見れやアお互ツこだから、損も徳もねえ咄だ。オヤ損も徳もと云へば、お猿どん聴きな、頃日まで挿した京琴柱の簪の さる「ウム べか「あれを下に遣つて挿入みのある簪と取替えたがの、二朱と六百いくらか足したはな、餘程な損をしたよ さる「それや

アおめえ些とは損をせざらにさ べか「しかし流行だから能いのう さる「コウ／＼聞きな、おべかどん、昨日小間物屋のお車口が持つて来た鼈甲の櫛さ。散斑で甲の能さとした事が、山の恰好から何から今風で、最う／＼ふるひつく様だつた。御新造さんの不斷挿になさる櫛を下に遣つて、三兩いくらかか打てと云つたつけが、昨日は相談が出来なだ、あの人はちやらツぼこ者だから、御新造さんにきつと賣りつけるのさ べか「おめえん所の小指も派手者だの さる「派手者所か、髪は髪結のお櫛さんが常話か、小間物屋は四五人遣入込むはな。アノマア親玉のあたじけねえに合しては、不思議に買つてやるよ。ヤレ薪が入り過ぎるの、炭が多いのと、おいらには小言をいふけれど、御新造さんには御意次第、何でも角でもオイ／＼さ べか「よつほど、のろい男だの さる「のろいばかりぢやアねえ、生が入舞だのに、店者上りだから女珍らしいのよ。二朱や三朱の女郎にばかり、だまされ居た擧句に、艶な女房を初めて持つて見た物だから、それやアおたまりやアねえ べか「尤だの、全體能い御器量だ さる「ちつと嶮があるよ。あれで愛敬があれやア鬼に鐵棒さ べか「餓鬼に芋藪とは、おいらが事だらう。そんな櫛や簪を見ても買ふ事もならず さる「きつい事はねえ、おいらが三年ぶりの給金が不斷挿さ。それやアさうと、おらア伯父さんの来るのを待居るが、さつぱり来ねえ べか「又ねだるのか さる「さうさ、伯父御でもいたぶらねえきやア、出所がねえはな。鮪が大分取れたから、川岸の間屋へ仕切を取りに出る筈だが、なぜ来ねえ知らん。そして、内で給金を借りようといへば、最う遣ひ切

つたか、錢遣ひが荒いの何のと、只でも呉れるやうだ。べか「おめえ又さういへばい、こつちは錢遣ひが荒い、おめえ方は人遣ひが悪いツ。さる「違ねえ、おべかどん、おめえン所もやかましからうよ。う。べか「やかましいの何のぢやアねえ。へん、そこへ行つちやアやかましいを初めた内だ。其辭にあたじけなくつての、云はう様はねえはな、三年前の酸くなつた澤庵二切、たま／＼惣菜といふ所が鼠尾藻の中へひしこを三疋、精進日が荒和布に油揚の細引たのが二切さ。店の衆はてん／＼に料理茶屋這入をして、甘い物のくすね食をするから能いが、こちとらは詰らねえはな。其辭夫婦して甘い物は食ふけれど、内の者には見せたばかり、あれが悪いはな。いつそあたじけねえなら、てん／＼も食はずに居れやアよし。似た者は夫婦とやらで、どれも／＼憐みのねえ代物さ。それに又あの兒めが、いび／＼泣えて、びりつ子で我儘育ちときてゐるから、子僧どんはみじめよ。何でも角でも云ひなり次第。放し飼といふ物だから、悪く甘やかしていけるもんぢやアねえ。能く育てれやア相應に可愛氣のある子だけれど、猫撫聲の親めらと、舌ツ足らずの眞似をする兒は、見ると面が憎い。あれ程な夫婦だが、親馬鹿とは能く云つた物だよ。今の分で大きくなつたら、あの兒はろくな者にはならねえ。いけツ吝くして溜めた金は、さ／＼ほうさにされるのよ。ホンニ／＼見る様だア。さる「子にはあまいものよ。う。べか「聴きな、どう思つたか歳暮に足袋一足、年玉に孔方を二百呉れたがの、大分氣でも違つたらうよ。其代に元日しまから小言だ。三日でも節句でも未練みしやくはねえ。いび／＼いび／＼

と箸の上下しだからうるせえ。イヤうるせえの瓢箪のと、御沙汰にも及ばうと思ふか、かたつきしあけしい間はねえはな。それから見れやア、お猿どんの所なんざア、能い旦那様だ。何だつて不自由がなく、第一氣がつまりねえで勤め能いはさ。さる「なアに、他から見れやアさうだけれど、あんまり能いこともねえのよ。いづくも同じ春の夕暮とやらさ。せめて正月だから、晝の内湯へ來ようと思つて云ひ出したらの、小指のいふ事を聴きな、正月と云ふものはいそがしい物だから、用でも仕舞つて行くが能いとぬかさア。それやア百も承知だけれど、松の内は早仕舞なり、そちこちする内這入り損ふから、こつちは手廻しをする氣よ、不斷夜ばかり這入つて居るから、たま／＼は黙つてよこしてもよささうな物だが、依估地悪い人よ。おらが内なんざア、親指が是式といふもんだから、ト左の手で飲む仕 他か  
らうせる客めらが皆酒ツくらひよ。見たくでもねえ。日がな一日皿鉢を拭いたり返したり、あれにも恐れるぜえ。下手な料理茶屋の様だはな。全體酒客といふ奴は、人の同情のねえもんだヨ。他の奉公人をば、うぬが飼つた狎兒の様に思つて、好三昧をぬかしての、夜中までべん／＼と飲居らアな。こつちは晝の勞れで、ちつとも早く寝てえと思居るに、夜深早更まで能い氣になつて洒落居るが、ほうき 帚も灸も利くもんぢやアねえ。てん／＼は腹さんざ朝寝をして、ヤレ宿醉だの、頭痛だのとぬかして、薬を呑んだり、水雑炊を食つたりして、うんすん云ひながら、八ツ九ツまで起居た奉公人の同情なした。料理茶屋なら花でもはづむだらう。こちとらにはお蔭で小言さ。お忝けでも何でもねえ、ト咄して居る後 別家

のかみさま、何時の間にか来てゐる。さる「併し御新造さんは分つたお方さ。一體お慈悲深いから、勤める者の仕合せ、びつくりして顔を赧め。合さ、トおべかと顔を見合。サア這入らう。べか「中で流し合うか。さる「ウンニヤ、さうしてはゐられねえ。今に九ツが鳴るだらう。早く歸つてお節の支度をせにやアならねえ。おめえン所は味噌の雑煮か。べか「うんにや、やつぱり醬油のお雑煮さ。さる「それやア奇特だのう。おらん所も醬油さ。ト柘榴口へ這入る。跡よりにて二三人入。おふな「どうだ色女め。トおべかの背中をび。べか「オ、痛え、おふなさん、何だな、浮虚者めえ。ふざけなさんな、おめえの傍へ倚ると、色かぶれがして困らア。ふな「へんきつい洒落さ、それやア、あつちらこつちらだよ。こつちはガツをこしらへるやうな働はねえはな。ノウお鬢さん。たば「さうよのう、彼が宜しくと云つたよ。べか「その通り、へん、あきれるよ。掃溜の蔭にてちらと見そめな。いづれいろよき御返事を松虫鈴虫響虫めめすウ引、とんだお龜女郎だ。ふな「お龜女郎はあたりめえさ、打遣つて置きな。どうせおべかどんの様に硝子を横ツ倒しにぶらさげた様ぢやアねえから。べか「なんだおめえの事を云つたのぢやアねえ、アイサ私は硝子を横ツ倒しさ。さる「おべかどん負けなさんな。たば「なんの又四文と出るやつさ。さる「おめえの出る幕ぢやアねえよ、鐵炮の隅へかゞんでお念佛でも申して居な。たば「きついおせ、だの。べか「アイサ、私共はお鮎さんの様な美人徳利ぢやアねえのさ。ふな「備前徳利を横ツ倒しでもよいよ、わつちらア數ならぬ者だから、おべかどんのやうに餌はつきやせん。べか「何だこいつが。ト湯をすくつて掛ける。又こちらからもすくひ掛けると、兩方から加勢が出て、柘榴口と風呂の中で大騒ぎに狂ふ。此時風呂の隅に屈み居たるは、うんざり聲とかいふ、ちうツばらの中年増、先程よりだまつて居たりしが、この

騒動夥しく、湯のはねるに熱くなつて、女「ヤイ、此あまめらは何をふざけやアがる。いけやかましい、何の事たい、あたり近所へ湯がはねて是見やアがれ、天窓からお湯をめした姉さんが、お一方出来たはい。總體此あまめらア悪くふざけやアがる。うぬらばかし買切居る湯ぢやアあんめえし、あたりに人様も御座らツしやんねえ様に、野方圖な奴等ぢやアねえか。コレ、人は人と思つてナ、些と熱いと思つた湯も漣ぢやア口がうるせえから、辛抱して這入つてるのに、あんまりてへば無闇な仕方だ。ベツちやくちや、と、あくぞもくぞを算へ立つて、おやんなさんやしの口を寄せやアしめえし、湯の申中を口だらけにして、いけ騒々しいあまつちよめらだ。是見や科もねえ者にまで、さつぷりと浴せやアがつた。いかツばちの錢を蒔いて、はゞをするか知らねえが、コレ番頭、こいつらア打遣置いたら、湯の中へ糞をたれて、鬼渡や捉迷藏も仕兼ねえ。片端からしよびき出して、一軒／＼に断ねえきやアならねえぞ。皆覺悟をしやアがれ。ト鳴り立て睨みつけられ、四五人のおちやつびいは、色を變。ばんとう「モシ、おかみさん、お腹立は至極御尤でございます。何を申すも若い人達だから、後先の勘辨なしでござります。初春早早、彼是があつてはお互に快くござりませぬから、どうぞ御不肖なさつて遣はさりまし。女「春早々から、こつちは何も云ひたかアねえが、若えとつて、程れえのあつた物だ。今の世世界ぢやア、啼くと食はうのね、さんでも、無面目ぢやアねえはな。ばんとう「マアようござります、何事も私におくんなさりまし「おらア御幣は擔がねえが、正月の三日に頭から湯を浴びぢやア、亭主の前へ云譯がねえ

ばんとう「ハテ清めるのだからようござります。四月八日なら、あたまから茶を浴びるが、正月三日だから天窓から湯を、女「コレをかしくもねえ、此番頭は、こんたまでが曲るぜえ、ばんとう「ハテ何曲る、さう柄をすげなすつちやアわるい。ハテまアようござります、女「いゝはな、悪氣でした事もねえから、量見してやらうが、どのあまでも爰来ておれが頭ア拭きやアがれ、ヤイ爰へ来うよ、ばんとう「ハテさて、お前を恐れて此處へは来られません、女「恐れる程なら、湯も浴びせず、小くなつて屈んで居べいが、猫糞でしやア、まぢ、だ。コレ姉さんを見覺居て尻もやの用心しや。舌の先にさく錢が絶えねえお蔭にやア、一ツ身もんでえをすれやア、小判小粒が噓をして駆付けらア。おつにごろつく雷の腦天から、悪くいたぶる地震の尻の毛まで、百も承知とはマアおいらが云出した事だ。子分子方が有り餘つてを賣つた代にやア、土地を離れても姉御だよ。へん、癩生靈め、何を云つても張合がねえ、不肖してやるべい。ドウダ番公、おれと一緒に歩ばねえか、屠蘇もたゝき牛房も愚な咄だから、さらけ止の、古風な餅も搗かずよ、角大を抱いて劍菱五といふ正月だ。歩ばつし、例所へ行つて、も、ん、ちいで四文二合半ときめべい、ばんとう「アハ、お跡から参りませう。モシエお前方に不斷騒ぎな料理屋、さるなといふは爰の事さ。今度からたしなみなさい。モシおかみさん私が拭いてあげませう、ト手拭で髪を毛をふきなから、私は是でもね、昔風の狂歌が大好き。しかも一風齋の弟子で、一風呂齋と申します。私は御高名を承知だが、他は知らねえ。惜しい時止めました。今だと判者になつて、翌から一風呂齋大人といは

れるのだけれど、女「コレ何をいふのだ、ばんとう「イエサそこで一ツ祝ふつもりでございます。エヘン、斯もあらうかつ、エヘン、此即狂が名人だてネ、女「道理で獅子鼻だ「東西、ア、折角出たものを、エ、まづ前書を、イヤナニあの、はし書を、エヘン、扱と、エ、何さ、エ、エヘン、浮世風呂の風呂の中にて、女の数が五人、六人、七人近く居侍りて、女「佛の数は三萬三千か、ばんとう「オツト東西、エ、居侍べりしが、べちやくちやとしやべり侍りて

ばんとう「こゝらが狂だてネ。エヘン、しやべり侍りて、又後には互に湯をあび見、あびず見、かけ見、かけず見、

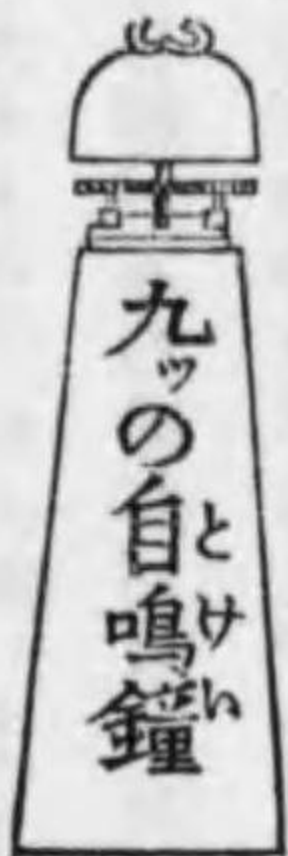
ばんとう「降りみ降らすみの心で、浴びたり浴びなんだり、掛けたり掛けなんだりさ、女「へりふんだり、へりふまんだりぢやアねえか、ばんとう「オツト東西、

狂ひ侍りしが、その湯が、エヘン、その湯がはね侍りければ、そこでかみさん腹立ち侍り、合點せぬとて、四の五の侍りけるを、やうくになだめ侍りて、百萬年の御祝と祝ひ侍るツ

ばんとう「よしかね、そこで歌に、

錢金は涌き出る湯屋の手拭で年のかしらをふくは來にけり。サ、ばんとう「アハ、なんと名歌でござりませう、女「ハ、ハ、ハ、此番頭のいふ事は、今朝程の判物の

様だ。アハ、、、、ばんとう「それでも歌詠だ、アハ、、、、猛きおかみさんの心を和らげるも、一風呂齋が歌の徳なりけりサ。アハ、、、、と笑ふ門には福大黒、當年の恵方から庭に飛込み打はやせば、七福神の寶船、と唄ふ鳥追諸共に、聲長閑なるしろウさけ白酒しばらくありて



三編卷之上終

三編卷之下

女中湯の遺漏



名代の割懸者と呼ばれしかみさま、浮世風呂とは一ツ長家と見えて、湯汲み場の片わきなる開戸を明けて、浴衣のなりにて出で来り、水桶のわきの懸竿にかけ置き、栢樋口へ這入りながら

おえご「番頭さん最うお晝をしめたか ばんとう「しめた〜」 おえご「おいら

も今お節を祝ツた。腹こなしにどんぶり温まらうといふ腹だが、大きな腹だよのう。我ながら何故こんなになご〜するだらう。おいひながら栢樋口を オヤ〜〜並んだ〜、是見よがしにいかい事尻をお並べた。ハイ御免なさい、田舎者と江戸者と等分でございます。ハイ冷物〜。滅多にむぐり込んだら、角兵衛獅子が舞込んだといふだらう。アハ、、、、おいひながら、やらや お前さん方は、どなたも能くお並びなすつた。私は跡立だよ ポンナドリノウタ「前駈衆は尻が低い。最う些高くてアのウみイますウ〜引「アハ、、、、ト皆々笑 えご「盆々のやうだもの、盆と正月の入込はならねえによ。ハイ湯がはねます、子供でござい。しかも三十年跡はツ トべろり舌を オヤ〜〜どなたか洗粉をお遣ひだネ。フツ、フツ、鼻をつかせア、臭い〜、サア臭い〜、ト大きな聲を呼ぶ 是はサアござい〜と云ふ洒落だが、どなたもさう聞いて

おくれ。正月めいた物だらう、オ、〱熱いは〱、道理で柘榴口が込んだ。どなたも長しい事ネ。なぜお湮めなさらぬネエ。モシ憚りながらそこからトン〱をお狸申します。骸はこつちの物、湯はあつちの物、何にも御遠慮には及ばぬ事さ。オイ三公、うめて呉な。ゆで海老にしても、最うお飾は濟んだぜ。さうだ〱〱、もつと湮めたり〱、ぬるくなつたら又湯をうめる分の事さ。こつちの腹の痛まねえ理窟だ。トン〱、オットよかる、ハお邪魔になるな、三助殿の厄介者だア。おなまめだんぶつトイひながら中へ飛びこみ「オ、あツツ、ツ、ツ、しつぱりだ〱〱トイひながら搔き廻すそりや、はねがかゝります。はね物〱、おれと同じ事だス。ア、よくなツた。サアどなたもお這入んなさいまし。ヤレ〱〱結構〱〱ト沈み南無阿彌陀佛、ヤレ〱〱湯と糠味噌は兎角かき廻すことだ此内皆々大笑ひに笑つてゐるな「叔母さん エゴ「オイおち坊か、誰と來た 女の子「お隣のをばさんと エゴ「よく來たの、何ぞやりてえが、爰は湯の中だ「ハ、〱、〱、〱 ▲見なせえ、私が湯へ來るにも腰巾着だ エゴ「さうさノウ。おめえがあんまり可愛がるからさ。いつそおめえの娘にしなせえ。のうおち坊、娘に成るだらうが ▲まさかそれも否だツサ。何でも朝むつくり起きるから、晩まで私が内に居續だ。前生で何でかあつたらうよ。兎角くツついてゐたがる エゴ「くツついて痛がる物なら 狼の生れがはりだらう。取付いて離れねえなら 狐様、引付いて離れねえなら石漆。もし煙草の脂なら、乾かねえ内に、味噌汁で洗ひなせえ。墨の付いたのならお飯粒で、オットよかる「アハ、〱、〱、〱 ▲成程おめえは氣さくだよのう。おめえン

所の旦那殿は、苦虫を食潰した様な貌をして、だんまり坊だに、夫に引替えてお前の又元氣の能さとした事が エゴ「似た者は夫婦といふが、私らが夫婦は鬼夫婦といふのだ。からツきり反對だよ。見なせえ、わたし一人と家内中と掛合ふはな。今朝も聞きなせえ、旦那殿は胸がやけると言つて、お雑煮をタツタ二切だが、こつちはそんな事ぢやアねえ、眞四角に切つた餅を、菜も芋も入れずに壳盛で十八切、其後で重詰の數子と座禪豆で茶漬をさら〱〱と三杯さ。イ、エサ、肝を潰しなさんな。他所のおかみさん方とは違つて、一文からの商で日がな一日居たり立つたりする物を、腹も減らうぢやアねえか。お晝はチツト早かつたから、未だ腹がいゝかと思つて、食つて見たら又いける。イヤほんに聞きなせえ、腹をへらして物を食ふほど、甘い物は恐らくねえによ。汗が銀杏大根に焼豆腐の賽目、お平はお定りの芋胡蘿蔔、牛房大根、田作といふ所を、あの田作が這入ると臭くてならねえから、奢つて猿頬の剃身を入れやした。おめえの所でもさう仕て御覽じろ、アイサ、田作鱈に鮭の焼いたので、又六杯とお目にかけた。鹽引ぢやア飯がすゝむよ。今も番頭に笑はれたが、さう食ふから體が丈夫だ。下手なお信濃はかなはせねえ ▲オヤ〱〱よくそんなにたべられる事だねト笑ひながら柘榴口のふちを押へ、右の手で襟袋をつかひながら おた〱〱ぢつとして這入つてお出でよ。ぼちや〱〱をすると、だぶ〱〱がはねます。ソリヤ〱〱、言はねえ事か、夫見なせえ、いふ口の下から湯が目へ這入つた。それよし〱〱ト顔をふいてやり 最今度からおよし、ヨ、ヨ、ヨ、手拭でお顔や手々をよウくお洗ひ、エ、きたない足だ、



お鼻の下もば、ツちいだから、お湯をかけてお洗ひ、番頭さんがお叱りだよ。オヤ、能い子におなりだぞ。上手にお洗ひだのう。はお見、おつかさんも上手にお洗ひだよ。小見坊も上手にお洗ひ。おつかちゃんも上手にお洗ひ。おたこ「オ、〱、坊も上手にお洗ひだぞ。コレサ、それがわるいはな、天窓からお湯を浴びては、今の様に目へ染みます。さう、さう、能く云ふ事をおき、だぞ。坊は聞譯が能いから、御褒美をやりませう。餅がよから、薄皮かお焼芋か。小見坊はちいあん。はちいあんが能いよ。おたこ「はちいあんトは何だの。小見坊はちいあんお芋が能いよ。おたこ「オ、〱、お芋、〱、八里半か、オホ、〱、此子はマア誰が云つて聞かせたか、おつな事を覚えてさ、オホ、〱、そばにゐるか。おいか「オホ、〱、八里半ツサ。いかな事でも、とんだ事を覚えてさネエ。ほんに、子供衆といふものは、能くまア小耳に挟んでお忘れなさんねえ物でございますネエ。功者な口をおき、だ。おたこ「イエモウ店の者が色々な事を教へまして、どうもなりません。老成た口をき、ますに、側から附智恵がございませうから、いと、お喋舌になります。おいか「オホ、〱、それに又今年は琉球芋が澤山な所爲か、焼芋が流行りますよネエ。お前さん方は御存じもございませうが、何方も焼芋の無いことはございませぬ。おたこ「左様でございますとさ。私も初は何の事を申すかと存じたらば、八里半とは九里に近いと申すことだと。おいか「左様さ、最ちつとで栗だといふ事ださうにございませう。お前さんはどうか存じませぬが、私どもは栗よりおいしいうございませう。おたこ「左様でございます。栗は

皮をむくだけ世話でございます。おいか「お薩の方が、やつとおいしうございませうよ、オホ、〱、意地のきたないお咄だ。併しどこのも好物さネ。おたこ「私どもでも、毎日おさつでございます。小見坊つかア、お芋、お芋をおくえ。おたこ「とんだ事をお云ひ、此處はお湯だものをや、そんな事をいふと番頭さんがお叱りだよ。イエモウ咄食はうで、どうも困ります。最ちつと聞譯がありさうなものでございますが、根から分りませぬ。まだお前さん、尿も教へたり教へなんだり。おいか「それはその筈さ、お前さん、是でもネ、最半年も経つて御覽じまし、大きにお世話が薄らぎますよ。小見坊向小見坊にネエお鮫さん、おつつけ能いお姉さんにおなりだネ。髪を結つて簪をさして。小見坊「紋、あつて。おいか「アイ左様、紋の付いた櫛、で、オホ、〱、よくお言をおつしやるネエお前さん、ちよつとお聞きなさいまし、櫛、紋有つてツサ、アハ、〱、なか、分ります。イエモウ女郎のお子様は格別お早うございますのさネエ、エ、〱、おたこ「なんだか小癩な者でございますよ、オホ、〱、おいか「お湯がお好でようございます。おたこ「ハイ湯は好でございますが、かはつた事で行水が嫌ひで困りました。最う今年らは、どうぞございませうか、去年の夏は大困りさ、お前さん。おいか「オヤ、〱、どう致したことでございませう、水なぶりをなすつてお嬉しがる筈だが、サア、伯母とお湯へお這入り。小見坊「いや、おいか「否、かえ、オヤきついお愛相づかしだネ。大分ぞり、〱、が生えました。おたこ「ハイサ、兎角嫌ひで困ります。サア中へ這入りませう。サア、〱、お手

桶とお徳利をお持ち。オ、寒くなつたぞ。坊は留桶の中だからよいが、おつかさんはあぶうございませす。小見坊、あぶい。おたこ「オ、く、あぶからうく。おいか「サアをばあも這入りませうト中へ抱き行く」

おたこ「ハイ御免なさいまし、子供でございませすト踏段へ立たせおき」サアこゝに立つてお出で、お背中をよくしめしませうト手拭にて湯を浴びせる内、おいかは。おいか「おかみさんエ、此お子さんにはお熱うございませうから、水をうめて上げませう。サアく、爰へお這入んなさいまし。おたこ「これはく、憚り様、お手を

頂きます。これはモウ有難うございます。サアく、坊や這入りませうよ。ヤレく、結構なお湯だぞ。叔母さんがうめて下すつて、丁度よいお加減だ。ソリヤ沈みませう。ソレぶくぶくく、ア、よ

いぞく。小見「あちいよウ、おつかア、あちいよう。おたこ「ナニ熱いことがあるものか、弱いことを云ひなさる。アレく、他所のね、さんも長にお這入りだものを、アリヤよその伯母さんがお譽めだよ。

ハイく、お鮫坊はとんだ能い子で、よく湯へ這入ります。お譽めなすつて下さいまし、ハイく、ありやお譽めだ、ノウ、最うよからう。ソリヤ熱くもなんともない、ネエ、丁度能うございます、サア

く、能うく温まつて出ませう。小見「最出ようヨウ、おつかア、出ようよウ。おたこ「サアく、出ませうく、ハイ御免なさいまし、出ます者でございませすト踏きて」「ハイ左様ならおかみさん、おゆるり

とお出でなさいまし。私はお先へ上ります。おいか「ハイ左様なら、お鮫さん、あばく。おたこ「伯母さんにあばく、サアお辭儀をしな。おいか「オ、能いお辭儀だぞ、ハイ左様ならトをか湯を浴びせてあがりゆく」

●風呂

の隅にて鄙めきたる聲張りあげ、下懸眼に鏡子のなき節といふをうたふ聲する

▲山出下女「さまよ銚子のウ引、荒濱育ち引、色の黒いは御免なれ。し

ようがえ引 ●「コレく、何を唄ふのだナ。女湯の中で唄をうたふものが何國にあるものか、貴様の國では唄ふか ▲「イ、エわたしは國でも唄ひましねえ ●「そんなら何故唄ふのだ ▲「それでも隣

の男湯で唄ふから、わたしは又江戸といふ所は湯へさへ這入れば唄ふものかと思ひました「馬鹿なことをいはつしやい、あれは男だから唄ふのだはな。女湯で歌を唄つてすむものか、いかな事たつて呆

れけえるは ▲「そんならよしませう。ハテネ江戸はおつだネエ、男湯で男は唄つてもいゝが、女湯で女が唄つちやアわるいだネ ▲「知らねえよ、じれツてえト女。お松「いゝよ、唄つても能いから、唄ひ

度は随分大きな聲でやんな。とんだ能い聲だは ●「オやお松どんか、聞きなナ。あゝいふ代物だはな

お松「此内が能いはな。おツつけ江戸の水が染みて見な、頼んでも唄ひはしめえ ●「さうよのウ、そして、田舎の女の聲は、哀れツぼくおつに震へるのウ。お松「そのくせ能い聲さ、●「この人は聲自

慢だはな。お松「道理だ、最う一つ唄ひなナ ▲「イ、エよしますべい ●「お好みが出たから唄ひな、鬼も頼めば人を食はねえとやらだ ▲「何おめえ方が笑ふだんべい、わたしは國に居た時、觀音堂建立

の御詠歌に出ました。十六七を頭にして、私らが十三の時分だつけ、毎晩建立に歩きました。お松「そんなら御詠歌も知居るだらうの ▲「アイ、まづ一番知居るものが坂東の御詠歌、それからじやうかよ節、潮來節、しようがえぶし、それから甚九、それから川崎節、何でも知居るだ。中でも海老屋の甚

九が面白えだ お松「それはなんだ ▲「今度喜代が崎海老屋の甚九さ ●「うんにやよ、何といふ節だよ ▲「甚九のクドキといふものさ お松「唄ひなナ ●「唄ひますべい、笑はつしやるべいが、どうするもんだト大きな聲 今度喜代が崎海老屋の甚九、親の代から小間物賣よ、今は小間物賣やを止めて、大坂通ひの糸物立よ、船は黒檀ふたなり新艘、綾や錦を下荷と積んで、まだも積みましよ金欄緞子、碇巻上げて傳馬を積んで、白帆まき上げて蟬口しめて、表上りて鹽風みれば、甚九戀風はや吹きまくる、周防灘をも七十五里よ、播磨灘をも三十五里よ、遙か見ゆるが津の島灘よ、サアサおせさせ船頭も水主も、押せば大坂がのう近くなる、甚九運が能きや夜一夜で走る、おやれ嬉しや大坂へ着いた、宿は何處だと手代衆にきけば、宿は加賀屋の八郎兵衛様よ、中の積物は何々ござる、綾もござれば錦もござる、まだもござるや金欄緞子、今日は日もよし商仕舞た、人を慰む新町通ひ、此廓にて目につく人は、小銀小櫻梅の花よりも、三味の音を出す白糸様も、わしが目につく道芝様よ、志よと道芝様へ、そこで道芝大きな事よ、志とは佛の事よ、今宵一夜に千萬兩も、金をつかうて戀路を照す、もちと口説けば事長くなる、これで仕舞ましよ、小じやんとしやんと ●「ヤンヤ〜 ▲「ア、ヤレ〜逆上せたはネ お松「大きに御苦勞〜 ●「とんだ面白かつた。アハ、、、オホ、、、 風呂の中の人々、皆山出しの下水、平氣にて飛び出し、水槽のそばへ行き、折から水を飲んで耳を しめし、顔は眞赤にして、ふかしたての如く、からだに湯氣を立て、みる ばんとう「コレ〜伊勢屋の女中、きさまはとんだ能い聲だの、ハ、、、女湯始まつて、つひぞない事だ みな〜「アハ、、、 ●「髪の中の薄き女房二人にて流し

合つてゐ お山「サアお川さん、おめえの背中を出しな お川「アイ、そんなら、ざつとやらかしておくれ。垢はよらずと能いよ お山「オツト承知の幕さ。オヤおめえ灸がいぼつたの、痛かアねえか お川「痛い はな、今日は日本橋の藤の丸から、膏藥を買つて来て貰つた お山「それやア能かつたの、あすこの膏藥は能く利くとさ。

因に云ふ。藤の丸は舊家なり。慶長年中、湯島天神の門前において創業し、萬治二年日本橋通二丁目に開店してより、年數凡そ百五十餘年、連綿と相續す。江戸において膏藥を鬻ぐ家は、藤の丸法橋高室見林を元祖とせり。其證委しくは國家萬葉集に見えたり。且慶長より數ふれば凡そ二百十餘年に及ぶ。おのれ三馬當主と金蘭の友たり。故に舊家の縁故を記して、普く世人に知らしむ。

お川「コウ〜お山さん、おめえの隣ぢやア、昨夕も夫婦喧嘩があつたの、久しいものさ。何故あゝだらう お山「思ふ中の小諍とやらさ。どつちをどうとも云へねえはな お川「兩方が悪いといふ内にも、商賣あがりの者は、癖として嫉妬深いから、夫婦喧嘩が絶えねえのさ。男の最良をするぢやアねえが、惣體男といふものは表を勤める者だから、些つゝのつき合もありうちだアな。そこを女房も得心して居ねえぢやアならねえ。目が明かずに悪くやかましくばかり云つて見ねえな。夫こそ猶逆らつて出懸けるはな。さうかと云つて、だまつてばかり居ても濟まず。諸事鹽梅物だによ。併し又おらが嫌だの、おらが山の神だのと云つて、かみさんをこはがる亭主も、世間體の悪いものさ。なんぞの嘶序に

は、てんぐの女房を譽めちぎるも氣障な奴さ。さうかとつて、慘くあたるばかりを能にして、ひどいめにあはせる亭主も面の憎いものなり。何でも氣の合つた夫婦が互の仕合。長い月日にやア好い事ばかりもねえもんだから、兩方で不肖仕合ふのさ。隣の疝氣を頭痛とやらで、きついお世話だけれど、隣の太郎四郎さんを見なナ、屋敷から下りたてのおかみさんに、持立の女房だつて、間がな透がな、お縁さんの傍へ倚つて、のろけた顔を見なナ。麥藁の大蛇を兩手で曳伸したといふ身で、長アく寐そべつて居て、女房が五大力の爪弾を聽居るも、ヤンヤな沙汰ぢやアねえ。お縁さんもお縁さんだ、なんぼ屋敷出だつて、あんまりあつかましいぢやアねえか。お山「まだおめえ、ひい／＼たもれた物を、花嫁の内が花さ。おツつけ子小兒でも出来てみな。あゝはいかねえ。お川「へん穴嫁が呆れるよ。ヤレ香をかぐの、茶を食ふのと、大笠原か采女原かのお諸禮を仕候とつて、風見の烏を見るやうに、高くとまつてすまアして居るも、小癩に觸らア。人が行きやア豆猪口へ急須から茶をついで吞まして、本所の楠生亭とやらが拵えた菓子箆筒から、目へ這入りさうな菓子を出して、一つお取んなさいまし、私どもは房齋をたべつけたら、外のお菓子はどうも口にあひません、なんのかのと、作り聲の猫撫さ。ようかし房齋もすさまじい。大福餅や大ぶかしを、むしやり／＼で居ながら。お山「さうさ、花を活けるの、琴を弾くのと、世帯持のいらねえ事さ。飯を焚いて、着物を縫つて、内外の者の身じんまくをして、物に廢の出ねえやうにすれやア、女房の役は澤山だはな。それで氣に入らざア、先さまの

御無理だ。お川「アノお縁さんは亭主が御そくさいで持つたものよ。芝居は代り目／＼に丸三と越長二軒へ行くし、指ものはオツト來たりで自由さんめえにとり替引替買ひ立てるし、呉服屋へは夫婦連で見立にいくか。お山「へんお樂だの、ホンニあきれもしねえ。お川「なんの相談でもお縁や／＼さ。朝から晩まで口づけにお縁やだ。荒神さまのお縁や／＼が聞いてあきれらア。お山「オホ、、、、不景氣や、きいた風な、併しそんな亭主といふ者は嫉妬深いもんだによ。お川「あの面で嫉妬ぢやア銅羅焼だアな。お山「お縁さんがお色白ときてゐるから、夫婦揃つた所は白玉と金鏝焼を一つ竹の皮に包んだといふもんだらう。お山「まだしも色白だから七難も隠すけれど、あれで黒からうもんなら、こちとら組さ。さうだがの、亭主はあんな老實者がいゝよ。常住取替引替見立直しの女房を持つ人は、氣がねえのう。お川「第一居る空がねえはな。ハテおめえ女房で候と打居ゑて置かれて、賣藥屋の銅人形見たやうに、看板にされたばかりも、つまらねえぢやアねえか。お山「さうさ、それやアこつちにも荒神様があるから、さう旨くはいかねえのさ。何にしる他所の事は打遣つて置いて、こつちのあたまの蠅を追つて居よう。いつか一度は旦那様の思召に叶ふだらう。お山「ア、さつぱりした、サア這入らう／＼。○二十三四年頃にて、お山「お壁さん、今し方表を通つたおかみさんを御覽か。お山「はいえ。お山「とんだ華やかなお形さ。路考茶縮緬に一粒鹿子の黒裏で、下へ同じ一粒鹿子の黒の引返しを二ツ着て、緋縮緬の縮緬に白縞子の半襟で、鼠の厚板の帯のこり／＼する九寸幅さ。背恰好はす

らりとして、故人米三を中年増に作つたといふ風だつたが、女でさへふるひ付くものをネ、ましてや男は尤もな事さのう。今もお聞きナ、髮結床の前を通つたらネ、若い者が大勢で、其おかみさんの路考茶を見てネ、あれ見な、とか、見ろとか云つて、今の女は皆青い着物だナ。惜しい女に馬糞の衣をかけたぜ、あつたら事をした、なんぞといふはな。男といふものは、憎いことをいふもんだねえ。おかべ「さうさのう、それだから髮結床の前を通るのは恥かしいよ。先刻通つた人も立派な事さ。髪が上方風で、化粧まですつぱり上方さ。鼠色縮緬だつてが、伊豫染に黒裏さ、とんだ能い上りだつた。あひ着はずつと茶返しちやがへの比翼ひよくで、緋縮緬ひぶくろの縮緬ちぢみ、やつぱり白襟をかけて黒緇子の帯、どうもいへねえ風俗だつて。よそのおかみさん達は、押返されねえ形でお正月を遊ばすが、こちとらは、つまらねえものさ。あの衆はよくく〜能い月日つきひの下で生れた人だらうよ。それやアさうと、一面に伊豫染だの。おい「アイサ、路考茶か、鼠か、伊豫染さ。みんな昔流行つたさうだが、段々流行返るのだ。おかべ「さうさ、染色も案じ盡すもんだから、一人ひねつた人が有つて、昔物を見付け出すとネ、今の目には珍らしいから、サア能いとは云つて、一人着い、二人着いして、流行り出すのさ。しかし丁子茶ちやうじちやから見では、今の鼠や路考茶は近頃の物だツサ。伊豫染はよつほど大昔流行つた物だが、相變らず廢らねえ居て、今又すつと流行るのださうさ。私等が内の婆さんが話したつけ。それやア能いが、何故あんなに上方風を嬉しがるだらうか、氣が知れねえよ。おかべ「さうさ。あのまア化粧の仕様を御覽か。目の

ふちへ紅を付けて置いて、その上へ白粉をするから、目のふちが薄赤くなつて、少しほろ酔といふ顔色に見えるが、否な事たねえ。おい「そしておめえ、夫ばかりぢやアねえはな、顔の白粉と生際の白粉と襟の白粉とは別々に有つての、眉掃も三本入るとさ。おかべ「オヤ大層らしい。私らは眉掃さへ遣はねえものをや。おい「夫だからあのさまをお見。本面屋ともいひさうに、顔がてら〜して、誠に本塗ほんぬりだはな。あんまりべたく〜と化粧したのも、助兵衛らしく、しつこくて、見ツともないよ。諸事婀娜あななとか云つて、薄化粧がさつぱりして能いはな。おかべ「そしての、鼻の先ばかり一段べたく〜と濃くつける風があるが、あれは全體上方の役者が始めたことだツサ。何とか云ふ女形の鼻が人並だから舞臺ではえねえツサ。おい「成程のう、役者の鼻は人並より少し高みな方が見能い容だネ。おかべ「夫だから其女形の工夫で、鼻ばかり別に白粉を濃く付けたら、ソレ鼻が高く見えて、舞臺顔ぶたいがほが美しく見えさうさ。おい「成程いゝ利方だ。おかべ「それを町方の女中が眞似てする物だから、見やう見眞似に、江戸の女までが、此頃はちらほら眞似やす。おい「さういへば、間に見かけるネ。おかべ「あれは役者といふものは拵物こしらへものだから、遠見の能いことばかり考へたものさ。それだから鼻を濃くするも恰好が能いけれど、平人がその眞似をしては、側でしげ〜と見られるから、見ざめがして、穢きたならしいネエ。おい「目のふちへ紅を付けるのも一體は役者から出た事らしいネ。おかべ「あれも大方はさうだらうが、昔からする人が有るから、あの方はまア許しもせうよ。併し目のふちへ紅をつけた人は、老

つて目のふちが黒くなるツサ、氣を付けて御覽。目のふちが黒い人が大年増にあるものだ。おいへ「あります」おかべ「すべて上方の女中は、役者の眞似をしたがるで見えて、化粧下へは、かほよ香といふ油を塗るとき、おいへ「江戸でも役者の化粧するのは、すき油を付けるぢやアねえかエ。おかべ「さうさ、其かほよ香といふ物も、すき油の様なものさ。おいへ「いやだのう、氣味の悪い。夫よりは三馬が所の江戸の水をつけた方がさつぱりして、薄くも濃くも化粧が褪げねえで能い。おかべ「それだから今一面に流行るはな。おいへ「價が出来たの。おかべ「あれは水の色を似せた計で、天花粉を入れたのだツサ。夫だから江戸の水とは、付けて見て違ふはな。おいへ「オヤほんにか。おかべ「夫はさうと、暮に買ふのを忘れたから、今日は油を買ひにやらうヤ。おいへ「おまへ油をお買なら、本町二丁目の江戸樓でお買ひ。あすこの油は夏も變らず、いつそ能いよ。そして、目方がたんと有つて、とんだ安いはな。おかべ「そんな咄を聞いたつけ、オ、それ、去年の春、勘三の芝居で松助が弘めた店だの。おいへ「アアさうさ、あの時は白粉を撒いたつけ。おかべ「さうさ。おいへ「おまへおあがりか。おかべ「アイ一緒に行きませう。おいへ「わたしは歸り道で胡椒を買はねえきやアならねえ、おつき合ナ。近き日、胡椒とばかりにまぜたるは、例。おかべ「勿論さ、といふ折ふの筆力甘心。けの文章をやりたがり、几帳のかけに、櫛屑でもかざしてゐさうな氣位なり。



かも子「ハイうつぽを讀み返さうと存じてをる所へ、活字本を求めましたから幸ひに異同を訂してを

ります。さりながら舊冬は何かと用事にさへられまして、俊蔭の巻を半過ぎる程で捨て置きました。けり子「それはよい物がお手に入りましたネ。かも子「鬼子さん、あなたはやはり源氏でござりますか。けり子「左様でござります。加茂翁の新釋と本居大人の玉の小櫛を本にいたして、書入を致しかけました。たが、俗た事にさへられまして、筆を採る間がござりませぬ。かも子「先達てお噂申した庚子道の記は御覽じましたか。けり子「ハイ見ました。中々手際な事でござります。しかし疑はしい事は、あの頃にはまだひらけぬ古言などが今の如ひらけて、つかひさまに誤のない所を見ましては、校合者の添削なども少しは有つたかと存ぜられますよ。かも子「何にいたせ、女子であの位な文者は珍らうござります。先日も外で消息文を見ましたが、古へぶりの書き様は、手に入つた物でござります。けり子「左様でござります、何ぞ著述があつたでござりませうネ。世に残らぬは惜しいこととござります。ホンニと御覽なさりませ。私はうけらが花を一冊貸し失ひましたが、トント行方が知れませぬ。けり子「イヤどうも貸し失ふで困りますよ。此間はお歌は如何でござります。かも子「何か埒明きませぬ。先日どなたにか承りましたが、あなたはひなぶりをもお詠みなさるさうでござりますネ。けり子「ハイサ、もうお恥かしい事でござります。あまり本歌で退屈いたす時は、慰みがてら俳諧歌をいたしますが、何もうお恥かしい、お耳に入つては恐れ入ります。かも子「イエサ、萬葉の中にも、大寺の餓鬼の後にぬ

かづきの歌、エ、夫から夏瘦によしといふもの鰻とりめせの類、其外あまた見えますし、殊には續萬葉に俳諧體と申す體がわかりましたから、無心體の歌もお慰みには宜しうござります。けり子「イエモウ、松の思はん事も恥かしでござります。此間ネ、餘りいやしい題でござりますが、おかちんをあべ川にいたして、去る所で頂きましたから、取敢ず一首致しました。

うまじものあべ川餅はあさもよしきな粉まぶして晝食ふもよし

と致しました。オホ、かも子「オホ、くわん冠辭を二つ立て入れて、至極面白う承ります。まぶしてなどが、どうか古言こげんの様に聞えまして、オホ、けり子「イエもう、ほんの慰みでござります。先生などのお耳に入つたらお叱り遊ばすでござりませうよ かも子「何お前さん、いづれ雅の道でござりますものを、オホ、うまじものあべ川とか、り、あさもよし、きと承けて晝食ふもよし、どうもいへません、オホ、あなたお這入りなさりますか けり子「ハイまづお先へト石樋口へ這入る

●引違へて六十近きはあさま、小桶を二ツ両手でずつと押しながら来り オヤおばさんよく來なすつたの こちらの腰さきま 同年位の人 ▲ホ、ウ姉さん、今來なす

つたか ●何だなんな此おばさんは、他の心も知らずに、そんな元氣ぢやアねえはな ▲オヤ、何故よ

マアおばさん聴きなせえ ▲又初々はつづくしく泣言なきことか、おらア最うお正月の耳だから、泣言の聴役きやくは否だ

よ ●泣言ぢやアねえがの、聴きなせえ野郎殿やろうどのが又始まつたはな ▲オヤ ●元日に禮れいに出候でとつて、

袴羽織で吉の野郎きちのやろうを五種香ごしゆかうにして、年玉物としたまものを持たせて出たと思ひなせえ ▲オヤ ●さうすると、元

日の暮方くれがたになつて、吉ばかり歸つたから、金太はどうしたと聞いたら、何處へか廻るから先へ歸れと、云ひなさりやしたから、わつちばかり歸りやしたと、何かおめえ、うぬが指して行つた脇差も吉に指させて、袴もくるくるとひんまいて、年玉の箱の中へ入れてよこしたのさ。サア又爺さまの耳へ這入つたら大事だが、併し元日しまから這入所もあるめえ。追付歸るだらうと思つて、待てど暮せど、サア歸るもんぢやアねえ。昨日になつても歸らねえから、親仁どのはわたしにばかり食つてかゝる。わたしもどうも居たゝまらねえから、下駄屋のげぼう様の所や、鑪掛屋の鍋さん、花屋の松さん、箔屋の金さん、留場へ出る傳坊が所まで探し歩いたが、友達は皆内に居るのさ。あくせえ仕果てゝ内に居るとの、ゆうべ、のろりと、歸つた所が、内へは這入られねえから、車屋の大八さん所へうせたのさ、うぬ一人で身じんまくでもする事か、おめえ、いつでも私に尻を拭はせるだ ▲何處のもさうさ。此頃まで蟹糞の世話をしたものが、最う又金尿をたれかけるだ ●イ、エサ、友が悪いから、碌な所へは行きやしねえ。いつでも附馬を曳連れて、あたり近所の恰好も悪いに、兎角外聞といふ事を知らねえだ ▲正月しまから、馬だの牛だのと引連れて、とんだお精靈様だ。眞菰まこもに引包んで送り火でたゝき出すが能いのさ ●ほんにさ、打つても、はたいても、糠に釘といふ奴だから、やるせがねえ ▲そ

れで内へ入れなすつたか ●初々しく騒動するも悪いから、内へは入れたけれど、今日は平氣でそゝり節だ。間があればア怠けちらして遊びあるく。アノモウ家業を疎おろそかにして、怠ける奴は一ばん廢り

者さ。遊居あそんでて碌しだなことを仕出しやアしねえ。寄るも障さばるも錢ぜにを遣ふ算段ばかりで、友達めらが又碌なものは一人もねえ。此中このちゆうもあんまり夜遊びに出るから異見いけんしたら、せうことなしに夜作よなべをして居ると、ヤ寄つた、友達ともどもが集つたときは、踏込ふみこみに下駄げたが重り合あつて、足の立端たちばがねえだ。サア夫それからはや、指合さしあひ構かまはずの女咄めづで、起きて居られねえから、はづして寝たふりをしてゐたら、手々てんぐに出だしツつこで奢あつたかりかけるだ。大福餅だいふくもちから、ゆで鶏卵たまご、お芋いものお田でん、なんでも通る物を買はうと云出して、騒さわぎ立てるだ。御膳ごぜん麥飯あつたか 温あつたかい、ソレ來たと買ふ、正月屋しょうげつやでござい、ソレ買へと呼ぶ。何處どこの國にかおめえ、按摩あんまを六人まで呼込んで、手々てんぐに肩を揉もませながら、風鈴ふうりん蕎麥そばを惣仕そうじ舞まにして、蕎麥屋そばやに燗あつたかをさせてはとち食くらふだ物を、有頂うりやうてん天てんになつて夜鍋よなべ仕事しごとも手につくもんぢやアねえ。世間よぢやア餅もちを搗たくの、煤すすを搗たくのと云ふのに、其勘辨かんべんもなく、寒聲かんせいをつかふの、寒聲かんせいを語るのと、毎晩まいばん年とし忘れだ。あんなまり年としを忘れ過ぎて、大卅日おほなまかの來ることも知らねえのさ ▲いやはや、困こまつたもんだ。些ちつと大屋おほやさんでもお頼たの申まして、異見いけんして貰もらふが能あたいのさ ●そんなことにでもせざアなるめえ。ホンニ〜いつ苦勞くろうが止とむ事ことか、子こを持ってば七十五度泣なくといふが、あの野郎やろうにかゝつては何百度なひやくどか數かずが知れねえはな ▲息子むすこだと思おもふから悪い。郭公くわくこうだと思おもつて居ゐなせえ ●なぜ ▲八千八はっせんや聲こゑ啼なくといふから ●あの野郎やろうぢやアねえ、こつちが泣なくのはな ▲そんなら、ふとゞぎすさ ●此こをばさんは又始またまつた ●▲アハ、、、 ●お屋敷おやしきから去年こぞあたりお眼まなこを頂たまいた歎なげ、但ただしは不順ふじゆんで療治りやうぢにでも下くだつてゐる歎なげ、二十四五にじゅうごのぼつとりもの、片かたはづししの妻つまの風かぜも、派手はてななお屋敷おやしきと見みえて、人がらよく、いきな形かたちなり。おはしたのおはつは、いはねどしるき部屋へやが

大風俗おほふうぞく、お隣おとなりのお眼まなこを誘さらひ合あせて三人連さんにんづれれ、 お初おはつあなたエ、 おさめ「なんだ 初おはつあのネ、 おむすさんのお髪かみは、今いま留とど桶づくをひかへて、べんぐとの長湯ながゆ 日ひのはまことに恰好かっこうがよいぢやアございませんかねえ おさめ「さうさ、ホンニおむすさんのお髪かみは、どなたがお結むすひだエ おむす「これかエ、是こゝはあのウ、何なんでございませよ、お前まへさんも御存ごぞんじの忠七ちゅうしちネ おさめ「ハイ おむす「あれは私の所の地面ぢまゐの家守やもりを致いたして居ゐりますがネ、其そのかみさんが結むすひましたよ 初おはつへエ、成程なりやう、昨日きのうからお手傳てつだひにお出でださうで、路次ろじでお見みかけ申ましました。アノ奇麗きれいなお女中おんなぢゆうでございませう おむす「ア、左様さやうさ おさめ「まことにお上手うまいだネ。根掬ねくひから何なんから極ごくつたもんだ おむす「ちつと鬚ひげが上あつたぢやアございませんかエ おさめ「ナニサ、お人柄おじんがらでまことに能あたうございませよ 初おはつホンニまことに感心かんしんだネエ。私わたしどもは百ひやくで調しらへた米こめを一度いちどに頂たまいても、此真似こゝろは出來こません おむす「オヤ廻まりくどい事ことをお云いひだのう。百ひやくが米こめを一時いちときに食くらべてもとお云いひな 初おはつオヤおむすさん、いかな事ことでも、オホ、、、。いつそモウ感心かんしんなお子こさんだねエ おむす「私は名代なだいのおてんばだ者を、ハイおちやつびいとおてんばをネ、一人ひとりで背負しょてをります。夫おつだからネ、感心かんしんなおしやもじだよ おさめ「オヤオヤおしやもじとは杓子しゃくしの事ことでございませよ、オホ、、、。おさめさん、ほんにかえ。私は又またおしやべりの事ことかと思おもひました。鮮あざをすもじ、肴さかなをさもじとお云いひだから、お喋しゃべりもおしやもじでよいがネエ 初おはつ如何いかな事ことでもお前まへさん、オホ、、、。おさめ「やがてお屋敷おやしきへお上ありだと分わりますのさ 初おはつ左様さやうさネエ、おしつけ御奉公ごほうこうにお上あり遊あそばすと、夫おつこそ最まう大和詞やまとことばでお人柄おじんがらにおなり遊あそばすだ。



其時には私の旦那様のやうに片はづしか、勝山にお髪をおあげさせ遊ばして、さぞお美しからう。お儀式の時にはお下髪で、お眉を遊ばして、地黒や地白や時々のお襦を召して、お襦とはえ、お襦さ、お屋敷では毎日うちかけを着ますかエ、おイ、エ、出番と引番がござりますから、出番の時に不斷も召すお屋敷がござります。又お儀式の時ばかり召すのもござりますのさ。四月から九月迄は何方様でも帯付でござりますから、お襦はござりません。みなお下帯でござります。お下帯とお下髪の様なものかえ、おイ、エ、お下髪は五節句などのお儀式でござりますのさ。お年寄様方は長かけと申して、長をおかけ遊ばす。お傍様方は中をお掛け遊ばすネ。お小姓は童でござります。お眉をお付け遊ばしても、さげ下地にお結ひ遊ばすお屋敷もござりますのさ。ネエあなた、おそれ、略したのさ。おむすさんのお聞きの下帯といふのはネ、心の厚く這入つた、幅の狭い帯でござりませう、蜻蛉が羽根を擴げたやうに、しやつきりして、居るが、あの様ぢやアござりませぬ、役者は狂言だから三月の節句などに下帯で出るけれどネ、眞は四月から九月までの間で、袷と羅衣の時候に用ゐるのさ。さうして三月と十月は帯付が間白さ、お問白とはエ、お問白とは白縮子に紅絹裏をつけた衣裳さ、お中白とは四方の味噌でござりますよ、おアレ御覽、お初どんがあんなにお洒落だよ、お酒もじかエ、オホ、、、おさめ「オホ、、、おむす「そして三月のうちかけはエ、おさめ「三月のかけ

は桃色さ、お五月の御節句は綸子の惣模様でござりますネ、おさめ「ア、綸子もあり、紹もあり、ちややつじもあるのさ、おむす「ちややつじとはエ、おさめ「さらしの惣模様さ、おむす「七月はエ、おさめ「七夕も矢張ちややつじさ、お縮は六月七月と二月に限るやうでござりますネ、おさめ「さうさ、縮の惣模様もあるが、大體はちややつじで間に合ふのさ。八朔が箔紋さ、お箔紋とは龍紋の様な物かネ、おさめ「イ、エ紋所や惣模様を摺箔でおいた物さ、お絹縮は五月と八月でござりますネ、そしてお玄猪から間赤になりましたネ、おさめ「さうさ、お玄猪はお正月のお儀式の初まりだと申すよ、おへい左様でござりますとネ、おさめ「オヤ、むづかしいもんだネエ。私の様なおてんばな、ぞんざい者は、御奉公が勤まりさうもないねエ、おさめ「ナニサ、それでもけつこう勤りますのさ、おおむさん、お背中をお出し遊ばせ、お流し申しませう、おさめ「イ、エよろしうござります、おさめ「おむすさんお出しナ、流してお貰ひ、おサア、お出し遊ばせ、おさめ「ハイ左様ならお出し遊ばしませう。オ、あつ、おさめ「オ、あぶない、どうお仕だ、おさめ「此湯もじがあんまり熱もじだから、つい焼痕もじ、おアレ又じやうだんをおつしやるよ、オホ、、、お二人大笑ひ、おチツト水をうめませうか、おさめ「それはお憚もじだネ、おさめ「いかなや、おむさんの洒落には感心だネ、おまことに、感心、おさめ「私もまことにかん心のうち、おむすが背中、おさめ「おむさんヤ、おむす「ハイ、おさめ「おまへ又今宵も私どもでお琴をおさらひナ、おむす「ハイおやかましくなくば、おさめ「おつしやるもんだネ、おさめ「ほんにお前さんもお弾きなら参り

ませう おさめ「夫れは随分 むす「左様なら参りませう。ほんウとうウでございますよ おさめ「アイほんとうとて、ナニウそを申す物かエ 初「オヤ嬉しいのう。今宵もお琴でございますかエ、有難うございますネエ。おむすさんのお聲は無駄ながらまことに、感心なお聲でございますよ むす「ハイサ、左様でございますよ、細くてお奇麗で、意氣で能く立つて、なんののかとお初どんおよしナ。能い加減になぶつてお呉よウ 初「アレ勿體ない、何のつきにお廻り申ませう。まことに、ほんとウでございませよ。ネエあなた おさめ「ア、夫は最う、うそつこではないのさ むす「コウ、お初どん、お前のお好を當て、見ませうか、お待ちよ、斯だによつて、ア、知れた、葉隠のめりやすだらうが 初「ハイ左様でございます。私はモウ、あれほど好いたものはございません おさめ「葉がくれは誰でも好いた歌さ「一夜の仇枕、ほんにしみる憂や辛や、といふ所はまことに能いのう 初「ア、モウおつしやいますな、あすこの所を承ると、骸が解けるやうになりますよ。噂におつしやり出して、ぞつといたしますはな むす「お初どんは葉隠で氣違になりさうだよ。私が晩に唄ひませう 初「ハア有難う おさめ「山座さんのお唄ひなさる所を初に聴かせたいのう。ホンニまあどうしてあのやうな聲が出るか むす「おさめさん今宵はネ、斯さらひませう おさめ「アイ むす「まつ櫻狩さ おさめ「アイ江の島ネ 初「江の島、ア、有難いネエ、江の島は有難いネエ、江の島 むす「アレお初どんは辨天様でも拜むやうだよ 初「それでもお前さん、江の島は面白うございますものを おさめ「おむ

さん、そしてネ、長恨歌も能いはな むす「ハイ浚ひませう。そんなら櫻狩、江の島、長恨歌と、それから住よし おさめ「それから那須野 むす「左様、まアさう極めて置ませう 初「オ、嬉しい、サア、今宵は大樂み。お店の衆ときさこの道中雙六を致さうか、あなたと歌骨牌に致さうかと存じたが、お琴では何もいらす、まことに、お琴なら最う むす「オヤ、お初どん、なんでございませう。お琴といふものはネ、箆をつるしてお琴煮、オヤおことにちやアねえ從弟煮を 初「オツト、云はれずは春永におつしやいませ 初「これは三十位の婦人、義太夫の稽古所の女房と程しく、勿論義太夫でおまんまをたたり。生園は御當地なれど、淨瑠璃の口癖と、亭主の上方調にかぶれて、言語は大坂なまり、顔の美しいに似合はぬ、咽喉の太さと、えらいどす癖は、看板に偽りなし。太棒の一の糸も、紐につけたる熊袋を口にくはへて、かけ竿から浴衣をはづして、ひらりと身に纏ひながら、十六七の娘の子に向ひ

●小弦さん、おまへ今お出でたか ▲オヤ住吉さんか、今さ ●おまへ所へ、煮殻の天神は見え  
るかな ▲誰だの ●ソレなまりの天神のトグリぢやはいな ▲ウ、ムから、潜人がことか ●茶飯  
さんよ ▲さうさ、おめえの方ぢやア煮殻の天神といふか。わつちの方ぢやアの、茶飯さんも生姜の  
癖に金びらなからをいふし、淨瑠璃ぢやア訛る癖に味噌を揚げるから、兩方合せて、からら潜人とい  
ふはな。しかも三糸さんが諱名の號親さ ●えらい、煮殻は荏柄の天神と聞えるが、から、潜人  
はあら、仙人と聞えるナ。むごく太郎四郎にされるはい。可哀さうに太郎四郎とはた ▲其管さ、なまる  
に絶句するに、本が有つても讀めねえから無本同然、あれで床本を大層に書かせて持居るが可笑しい  
●其癖本持ちや。死んだ市右衛門はいふに及ばず、あの人の若い時分ばりついた本書に、龜喜とい

ふが有ツたげな。我等とは時代違ぢやから知らん事ぢやがナ。どの詞混るは江戸者の京談まじり。此外氣をつけてよみ玉ふべし。江戸詞のおさとの知れる事あり。○龜喜とは大阪下りの床本筆者也。江戸六くんだり或は太夫ゆか木あまたをうつけり。正木にては木町そだちをはじめとして、あの時代の江戸浮瑠璃にあまたあり。常の浮瑠璃本の書體にかはり、近松時代の書法に據つて一流なり。此龜喜は章をさすことの名人、神田紺屋町に住せしが、天明中に没す。○市右衛門、一流の上手也。江戸六くだりは書かず。太夫のゆか木あまたをうつけり。正木は納太刀響鑑を書きたるのみ。中橋に住せしが、寛政中没す。ゆか木近年の能筆なりし。その後さま／＼のゆか木書出でたれども、龜喜、市右衛門の右に出づるもの少し。○卯兵衛といふ人、木町新道にありて、太夫のゆか木をうつけしが、今はいかゞなりしや知らず。○龜喜、市右衛門、卯兵衛おの／＼浪華の流なりし。因にいふ。江戸板の五行并に六行の筆者多き中に、中古の名人は古人金三なり。これにならびて小十郎、ふきや町に住す。此人らまれつき綿密なるゆゑ、文句ふし付とも一點を誤つことなし。その後淺草茅町に住める直七といふ人あり、これは古人金三の筆法に據るものと見えたり。おの／＼江戸木の六くだり并に七くだり、正本をうつけすのみにて、太夫のゆか木を書くにあらず。をしかな小十郎直七筆を廢してよりこのかた、江戸六くだりの筆法并にふしづけの法。それから後に吉兵衛どんかそないな人に倚てこつて書かせた本が、なんぼも有るげな。アノをだまきはどうかぢや、ハ、ハ、ハ、▲あの芋環のいとめが切れくさつてトなまりの口 ●ハハハ、風のやうにいふ内が能ぢやないか。風とはいはず。いか、いかのほりといふが、上方の詞なり。これら皆江戸者の生をあらはす所なり。▲茶飯さんに用があるかエ ●ハこれは返詞也。まだまア長い事ぢやがナ。廿日頃に初會と翠簾開とごつちやにして、立會を致しますから、お頼み申します。ト、ソシテあのナ、お宿を御遠慮申して、わざとお知らせ申しませんさかい。よろしうお頼み申しますと、此様に云うてお呉れ ▲アイ／＼、さう云ひませう。何を出しなされる ●さればそこぢやて、連中が多いさかいに、二晩でも餘る。マどないにしても三夜さ掛らんならんさかい。内でもほつとしてゐるはいないなこちのもほつとして、などいふべきを、内でもといふ ▲なるほど夫ぢやア割るものがねえのう。稽古の入らねえ物にして、足らずめえは見取にするといふ物か、世話物でも跡へ付けるか、二ツの内だの ●それいな、立會も稽古のかゝらん物というたら、忠臣藏、ひらがな、

菅原、千本、まア此様な物かい ▲どうも珍しくないネ ●さいな。夫ぢやによつて困るはいなト上男出で来りて風呂の栓をぬく 申刺自鳴鐘 三助「わたしは斯して置き助どん、最う些と待ちなナ。邪見な人だのう

たいが、松の内早仕舞といふお定りだから、仕方がございやせん。そりやぬけます「オ、情ねえのう。おれが斯だらうと思つて氣がせいたけれど、禮者が永尻で、ヤツト今來ました。せめて二度這入ると能いに、タツタ一遍「オヤ／＼それはお寒からう。私は仕合せと、浮世風呂もこれで三編、板元の金儲け、又ずつしりとぬけました。最うぬきましたと番頭が、挨拶をする門口から、

●御慶申し入れます。「忝い」と名札をみれば、

本町二丁目延壽丹  
年頭佳儀 式亭三馬

三編卷之下 終

ぐつと捻つて俗物なる跋

いつまでぐさのいつまでも くだらぬ趣向の毫とりて、又三編はこじつけるとも、看官の興はあらじと、否む詞も聽かばこそ、是非にと頼む發客に「なまなかまみえ物おもふ」、されども例の懶惰にて、去年も竟に間に合はず。孰れ今年の發市にと、附きに從いたる居催促、「たとひせかれてほどふるとても出来ぬ作なら詮方も、亡弟には繋りし「えんと」思へば外ならぬ、此石渡が新板物、骨折甲斐のあれかしと、計る「じせつ」の流行も、人氣に遇はゞ評判の猶彌増るすゑをまつ。しかはあれども博物の他の作者に引かへて、在下が拙作は「なんとせう」。繪師と作者と板元と「たがひの心うちとけて」仕立てあげたる小冊の、「うはべはとかぬ」封じ目も、速く封切り見たしとて、需むる人の山なさば、其御最員の御蔭にて、京阪までも爲登荷の櫃に書き遣る「五大力」。さはさりながら前編に「かはるいろなきおんふぜい」、「やがてあほぞへ」つじつまも、亦面白く四篇目に、残りの條を「かたるぞへ」書きたい事の數々に言はれぬ穿こきまげて「をしき筆とめいほし」。としかいふ。

文化八年辛未五月八日、浮世風呂三編の稿を脱して錢湯に浴する刻、風爐の中の鼻唄を聽いて一篇の狂文成る。仍て此書の跋に換ふるものなり。

たらし樓のあるじ

三馬しるす

四編

自序

秋風起りて白雲飛び、債券披いて心先踊る盆前の鬨を、ほとくとおとづるゝ者あり。誰曾也と見れば債主ならで、催促は彼に齊しき發客の主管なり。稿本たびく虐れど、紺屋の明後日、作者の明晩、久しい分説と合點して、春と暮れ夏と過ぎ、穰は來れども看官に、未だ俺は來ぬ浮世風呂、初編の鑄版烏有となりて、製本最も世に絶えたり。嗣いで二編三編あれども、各女中湯の趣向なれば、男湯を人皆俟てり。今宵は是非にと責懲られ、明朝迄との詫言さへ、爲方案にむかひ酒、一杯機嫌に筆を採りて、序とか何とかいふ物を、態とばかりお祝申し、這で好いかと與へたれば、主管忽ち莞爾となり、唯々として去りぬ。

式亭三馬戯題

大いなる  
金どろろ  
とどろろ  
うい  
雁了  
たき  
のぼろ  
おん  
まら  
まら  
まら  
馬



たき  
のぼろ  
おん  
まら  
まら  
まら  
馬



馬

たき  
のぼろ  
おん  
まら  
まら  
まら  
馬









譚話浮世風呂第四編卷之上

男湯再編

江戸戯作者 式亭三馬戯編

秋の時候

秋來ぬと目にはさやかに見えねども、燈籠やくと賣る聲に、おどろかれねる盆前の怔忡も、親の心子しらすとて、お閻魔さまの目をたのしむ、娘子共の一群。これも浮世敷風呂屋の門に立ちならぶを見るに、十ばかりより六ツぐらゐまでの小兒を先だちにならば、十一二才より十四五歳の娘はその次に二ならびとわかり、そのあとだちといふり出すは、江戸流の盆踊「他國の御見物にまうす」江戸は他國のぼんをどりのごとく、對のゆかた音頭とりな「おしやべり」おてんば「おちやつび」と名うての子もり大ぜいの子どもとありて、をどる事たえてなし。只ほんうたといふものをうたひて、三四だんにならびてゆくのみ。▲おと名うての子もり大ぜいの子どもにさしづして、いろいろ おてば「コウ／＼お雪さん、おまへは背が高いから先駆ぢやア見つともねえ。中央にお並び。オヤ／＼お霜さん、なんだエ、おまへはそこぢやアないはな。お曉さんとお朝さんと手をお引かれ。アレサ、無器用なお子だ。そこぢやアねえといふにさ おとな「コウおてばどん、あんまりひどくいふと、あのお子さんはお泣きなさるよ おてば「夫だつても世話がやけてならねえから、ぢれつ



戸ぢやア踊りませんね。私どもの國では盆踊は大相さ。其越後か。むだ「越後は盆踊の名代な所だ。其イ、エサ。江戸もむかしは踊つたさうなが、繁花の地は流行が速いによつて、そこで後々は踊らぬ様になつたものさ。ばんとう「なぜまた盆々と云ひますネ。其あれは唱哥によつて盆々と云ひ來つたのさ。むだ「ばんとうしらすか。盆々々はけふ翌ばかり。あしたは嫁のしをれ草。といふ唄がある。ばんとう「なるほど。其おそらくはあの哥が盆唄の始だらうテ。夫をいろ／＼に和したものであらう。むだ「それもいゝけれど、今うたふ盆唄といふものは悪態を衝くのだネ。其あれは情なき事さ。所謂田婢野娘の乳母子守等のたぐひが、出放題の文句を作るに仍つて、あのやうに鄙しくなるぢやテ。ばんとう「一體まづ女の子には、やさがたな事を教へたいものでございます。むだ「しかし、成人しておしやらくをするやうになれば、自然とおとなしくなるから、邪魔にもならねえス。其まづそんなものではあるが、ねがはくは幼少な時分から躰が大切さナ。其の證據には、堺町兩國邊に育つ小兒は、鳴物の音におびえず。寺地近所の者は、葬礼の強飯を付目にして、貰つて食ふはス。是等は自然と馴れるのぢや。そこで孟子のお袋さまは、三たび轉居をさしつたとある。成程御尤もなことさネ。むだ「イエさうもいへやせん。其の證據にけス、本町に吐虚誕もあれば、深川に浅い川もあり。是如何。其コレサ／＼、足下のやうにさう意地わるく出られては、どうもかなはぬ。むだ「足下でも反齒でもいゝが、はゞかりながらおめえの了簡は狭い。ハテサ、今の女の子の中にも、おあんなしになる女もあれば、絹布にくるま

つて、一寸出るにも定乗物で、きん／＼になるもあらうス。されば云つて盆唄の悪態がついてまはるもんでもなし。これやア面々の性質さ。盛場の小兒だとして、鳴物におびえぬもあれば、おびえる子もあらうシ、寺地の者だとして、葬礼の強飯を食ふものもあらうシ、又食ふと限る事もねえネ。其ハテさて、さうではないが、そこには聴き所がある。むだ「爰一ばん聴き所だいつ。おめえの了簡は臍だツ。ハ、ハ、ハ、上戸は酒を飲むものだ。下戸は餅を食ふに限るとおもふのは、チト來つた代物だネ。おめえのやうに義理を堅く覺えちやア、今時は往かねえ。ハテ潮煮で飯を食ふ下戸と、唐茄子のあべ川を食ふ上戸は、たひら一面の押物だ。眞田の腰帯は男がしめて羽織をはさむシ、晒の手巾は女中衆がかぶつて野遊に出る。厚ぼつてえ綿頭巾は、血氣盛んの壯夫が、襟へ巻いたり天窓を包んだりする。さうかとおもへば、姫にはこうとうな形をさせて、押返されねえさまをする姑もあり。其サア／＼そこだテ。それが此の方のトント心に落ちぬ所ぢや。むだ「ハテサ、それが了簡が小さい。昔から今まで流行といふものは、瞬をする間に後れるから、またいろ／＼になるはな。其それは古今變化の理で、今は昔に販り、昔は今に變り、古往今來風俗の移る事は、桑田碧海ぢやが、其の中にも。むだ「イ、エサ打遣つて置くがいゝ。世話にもならねえことだ。世の中の放蕩家が、親や親類の異見する間はきかねえ。ソコデ、己の氣から止まつた時には大磐石となるぞ。其の理窟は万事に通じる。ハテ捷い譬諭だ。惣體の事が一旦はかぶれるけれど、善悪は三歳兒にもわかるものだから、是は悪いとおもふ事は、

ながく續かねえはな 其しからば色と酒で家國を傾け、角家敷を亡す筈はないが、和漢古今ともに、貴賤をいはずしてあまたあるはどうぢや せうそれやア、うぬが氣で了簡のつかぬ者に逢ちやアしかたがねえ。早く云へば馬鹿者だから、是は論の外さ。オット馬鹿者といへば、アレ、向側を通る日傘を見なせえ 其ドレ、ハ、ア、夫婦とおぼしき者、相合傘で、しかも欣々然として通る せう何だらうネ。男は凡そ中位の好男だが、頸に青黛を泥つて、チト厭味たつぶりの拵へ。ソシテ女は、いづれあやしき者の果と見えるが、高慢な面をして相合傘は出来さねえネ。よつほど鏡面皮やつらだ。人を人ともおもはぬ舉動だ 其か、ア自慢の膏育に入つた奴ぢや せう女房膏育の次第を御覽じろかつ。あれもあの女に入れて、漸々内へ引込みの、晝も箆筒の環が鳴るといふ世界さ。しかし此の道行はあまり氣恥しいネ。額の汗を下手に拭くと、色男の面が藍隈になる 其しかし、土地の風俗といふものがあつて、あれも京都などで見ると見苦しくないテ。すべて京の町は女と相合傘はおろか、娼婦哥妓などを引連れて、手をひき合つてあるくが、一向目だ、ぬ。江戸で見たがい、夫こそ口々に毒づいて大騒だが、上方は人氣の和かい所爲か、トント穩便さ。江戸ででんぼう、上方でもうろくなどいふ、あばずれがあれど、夫さへも馴事になつ居る所爲か、更にかまはぬ せう己々の好々だから他嫉はいらねえ事だが、先づ誰でも口を出したがるテ、風呂からあがつてくる男、大のひひながら、近年の流行にて、妙薬の能書を両面に張り、とび「ヤどうだ、むだ公。大分早く來たの。イヤ甘次さん、し

ばらくお目にぶらさがらねえの。コウ見ねえ、如在ねえ事をするぜ。薬の引札を團扇へ張つて、湯屋へ配るなどとは、五分も透かねえよノウ。番公どうだ。居眠りか、久しいものよ。番公の居ねむりはまだいゝが、湯汲の居睡るのがおそれるぜ。今時分はいゝけれど、冬、寒くてがた／＼震ふをまかまはす。小さな柄杓で、だらり／＼と汲むやつさ。あんまり心いきがねえ せうそのくせ、夏はさるぼうをつけて隨意に汲ませる 其その筈さ、冬は湯が湧かぬ。夏は捨て置いて湧上るはさ ばんとう「よび出しの湯を、さつさと汲出されると、湯の湧く間がねえから尤も至極だけれど、他はさう思ひませぬ せうよび出しとは、の片小鬘に書いてあるやつだの 其細見ぢやアあるめえし とび「アノ淨湯をくむ升形の所を呼出しといふはな。湯汲の若い者のことを上り番と云つて、大概何所の湯屋でも、あがり番と焚番は毎日代り合ふ せう「がうせえにくはしいもんだの とび「そりやア違ふはな。素灰と消炭を俵にしてうるは、おかみさんのほまちになる。糠の油を取つて浸淫瘡のくすりにするシ、挾斬だ爪が喉痺の薬になるといふ事まで御存じだはス せう「おそろしい。シタガ、おめえは虚誕の間屋だから的にならねえ とび「コウ、よろしく申してくんな。大誓文、是ばかりは正直だ 其「イヤ、飛八さんの話はいつも鐵炮だテ せう「しかし、をかしくていゝネ、いふ所へ、いさみはだの男入り来る、これも名うての、其「イヤ噂をすれば影とやらだ。鐵炮先生御光來 作「なんだ、他の事を鐵炮だの何のと せう「鐵炮とは飛八が事。作公は大筒だ とび「おきやアがれ 作「とんだ所へ浮腫がかゝるもんだぜ ばんとう「作さ